

藤原後成

福井久藏著





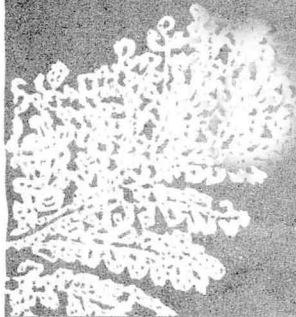


藤原俊成

福井九藏著

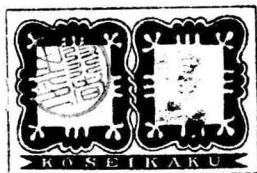
歴代歌人研究

千代田



# 藤原俊成

一 歷代歌人研究 一



昭和十三年七月十三日印刷  
昭和十三年七月十六日發行

著者 福井久藏

發行者 岡本正一  
東京市麹町區下六番町四十八番地

印刷者 谷口熊之助  
東京市麹町區土手三番町廿九番地

印刷所 合資 會社 谷口印刷所

東京・麴町・下六番町

發行所 厚生閣

電話九段(33)三二一八番  
振替東京五九六〇〇番

## 序

平安朝の末期から近古時代に互りて歌壇の中樞をなしてゐたのは御子左家の一流であつた。この一門を開いた五條三位俊成卿の生活をたづねてその歌壇に於ける七十餘年の事跡を審かにし、その子孫及崇拜者の見た作品の再検討を行ひ、その理念としてゐた歌論を明かにすることは我が和歌史竝に歌論史上極めて大切のことゝ信じ懲に筆を執つた。蓋し我が文藝論の基調をなしてゐる幽玄論を理念とし、その作に批評に一生を打ちこんだ三位の斯壇に及ぼした影響は頗る甚大で、平安朝中期に於ける紀貫之と雁行し、優るとも決して劣らないと信ずる。凡歌道に於て定家を難ぜんものは冥加あるべからずとたゞへあげた京極中納言を薰陶し大成せしめようと日夕心を砕いたこの慈父と嚴師とを思ひ浮べる時、我等が頭もおのづと下るのを覺

序

えないのである。併し物はあまりに信ずるときはその眞を見極めることが出来ないことを思ひ、後學の身を以て妄に忌憚なき筆を走らせたことを三位の靈に謝せねばならぬ。まして史料の拾蒐撰擇の十分ならずして讀者を誤らんことを心より愧ぢ且怖れてゐるものである。

昭和十三年五月廿四日

福 井 久 藏



# 目次

## 第一篇 俊成評傳

一序 説	………	一
一、時代の概観	………	二
二、歌壇の状勢	………	四
二 御子左家	………	六
三 俊成の小傳	………	七
四 千載和歌集の撰	………	七
五 御子左家と六條家	………	六
六 判者としての地位	………	四

目次

七	俊成の理念とした歌論	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	二六
八	古來風體抄に就て	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	二七
九	萬葉時代考と和歌肝要	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	二八
	一、萬葉時代考	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	二八
	二、和歌肝要	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	二八
一〇	古今和歌集定本	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	二九
第二篇 俊成の作品と評釋																			
一	長秋詠藻と長秋草	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	三五
二	俊成と抒情歌	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	三六
三	俊成と敍景歌	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	三六
四	俊成と釋教和歌	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	三〇



目次

四、續拾遺集	……	三六八
五、新後撰集	……	三七三
六、玉葉集	……	三七六
七、續千載集	……	三八六
八、續後拾遺集	……	三八九
九、風雅集	……	三九三
一〇、新千載集	……	三九七
一一、新拾遺集	……	三〇〇
一二、新後拾遺集	……	三〇三
一三、新續古今集	……	三〇四
九 長秋草	……	三〇八
附 藤原俊成年譜	……	三〇九



# 第一篇 俊成評傳

## 一、序 說

三千年の傳統を有する和歌は人口に膾炙してゐるものでも少くない。然もこれを選集の上より云へば、三つの大きな流に歸するのが通説である。素朴雄渾な萬葉、優麗典雅な古今、高雅幽艶な新古今の三大系の影響は時に消長があつても、いづれも抜くことの出来ない程の勢力をもつてゐる。その新古今の前驅をなすものに千載集がある。金葉詞華の後歌壇は歸趨を失つてゐた。千載集を撰んでこれが指導をなしたものは實に五條三位俊成卿である。俊成は御子左家の歌學を起

## 第一篇 俊成評傳

した人、その子定家及養子寂蓮は勿論、定家と共に新古今時代の双璧とたゞへられた壬生家隆も、皆その教へ子で、大炊御門の齋院も道を尋ね、後京極攝政も疑を質し、吉水僧正も圓位上人も自歌合の判を請うた。崇徳院の仰によりて久安百首を奉つてより、土御門天皇の建仁三年千五百番歌合の作者及判者に加はつたその間だけでも約七十年、歌壇に活躍してゐたことは頗る長く、歌合の判者となつたことも屢々で、判詞を遺してゐるものが千七百六十三番の多きに上つてゐる。門下などの作を添削した數はいか程であつたであらう。推量するの中々容易でない。

和歌所で九十の賀を執り行はせられ、無上の光榮を擔うたのは洵に偶然の事ではないのである。中古の終から近古の初にかけて歌人として歌論家として卓越し、後世に甚大な感化と影響を與へたこの人を研究するのは學の爲にも作の上にも頗る意義あることゝ信するのである。

### (一) 時代の概観

俊成の存へた時代を考へて見るに、必ずしも願はしい世相でなかつた。釋尊の教も末法時代で南都北嶺の僧侶が神輿神木を擁して京都を騒がした時代に彼はひとゝなつた。執政家の藤氏は法性

寺關白と宇治左大臣とが兄弟で權を爭ひあつてゐた。畏くも院政も末期で、彼が始めて任官した頃の崇徳天皇はまだ御壯りの御齡であらせられるに、上皇の御氣に召さないといふので、澁々ながら三歳の近衛天皇に御位をお譲りになる。女謁が盛んで正理も枉げられ易く、近衛天皇の崩御をきつかけに保元の亂が起り、皇室も大臣家も武門も兄弟叔姪が互に鎬を削つて争ひ倫常の亡んで了つた程の世、三とせを重ねて平治の亂が起り、都の中、御所の庭が血腥い戰場となり、弓矢に命を隕し、憂き年月を配所に送る雲の上人も少くなかつた。平家が武門から出で、藤氏を抑へ、そのかみ高下駄をはいて歩つてゐた清盛は大相國となり、輦車で宮門を乗り廻す頃、俊成はそのはたらき盛りであつた。けれども幼冲の頃父を失ひ、蔭子法の澤によりて敍爵の恩命はあつたけれども、四人兄弟の年若、後見にも抄々しい人がなかつたが、官位も沈滞、纒に歌にその懷を遣るに過ぎなかつた。彼は夙く佛教に志をとどめ、いやが上にも消極的の傾向を帯びるに至つた。保元より平治の亂に及んではその近親に知友に戰禍の巷に下り立つた人もあつたが、彼は世の治亂をよそにし、黙々と敷島の道に精進してゐた。福原の遷都、諸國の源氏の蜂起、一谷水島屋島

第一篇 俊成評傳

壇浦の戦を経て、平家一門の滅亡に關しても全く没交渉で、よくいへば斯道の精進、あしく云へば世の治亂と風馬牛相關しないものゝ如く、身を危きに近づけなかつた。子煩惱は人一倍で、長男成家の侍從任官希望の爲には左京大夫を辭し、三男定家の昇任を冀ひて退隱を志すといふ如く、青雲の志も子供ゆゑに伸さなかつたよき父であつた。近親には後徳大寺左大臣などもあり、その一族で大官仕をしてゐる女官も少くなかつたが、その性格がおとなしく、しめやかな生活を志してゐたので、政海の波瀾に關係なく、己が志す道に進むを得たのは却つて彼の幸福だつたのであらう。

(二) 歌壇の狀勢

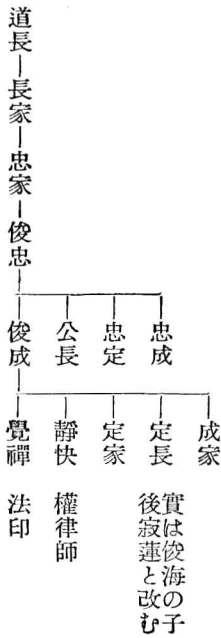
俊成の幼時には桂大納言の子源俊頼と右衛門佐基佐二人が傑出してゐた歌人で對立してゐた。人麿影供を始めて行つた六條家の顯季は父と同年に歿し、萬葉集を分類して類聚古集を遺した藤原敦隆も、また今より見ればつまらぬやうであるが、綺語抄の如き和歌字典を始めて作つた藤原仲實も、西行が私淑してゐた自然派の行尊大僧正もこれに前後して歿してゐる。歌學に達かつた



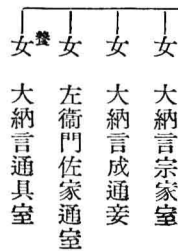
といふ基俊に就いたのは何歳頃であつたか分らぬが、保延四年二十五歳の時には古今集の疑義を悉く傳へたといふことであるから、この時代にせつせと修養したものと思はれる。俊頼が金葉集を撰んで新奇な歌風を唱へた頃はまだ歌を知らなかつた時代であるが、六條家の顯輔が詞華集を撰する頃には相當な歌人となつてゐたが、世間からまださう認められなかつた。久安百首の御召しがあつて彼もその一人に加へられ、大に力をこめて作をなし、その秀拔の才を認められるに至つた。俊頼基俊顯輔等の先進が歿した後には參議教長や刑部卿範兼も老いてゐて、特に教長は刑餘の人高野に遁れ、範兼は童蒙抄を遺したが、新進の清輔は俊成よりも十歳の長者で、その父顯輔が詞華集を撰んだ當時にも既に一家の見識を有して學問も詠歌も共に衆に抜んでゐたから、その存生の間は俊成も斯壇に於ける天下第一人者を以て目せられるには至らなかつた。まづ兩者對立と見做して宜しからう。清輔の弟の顯昭は廣才の方であつたが歌は俊成の養子の寂蓮には及ばなかつたぐらゐであるから、清輔の歿後は入道の身を以て勅選の仰を蒙るに至つた。斯くて俊頼の子の俊慧の如きも御子左家の下風に立つに至つたのである。

二、御子左家

俊成の家筋は御子左といふ。三條坊門南大宮東の一廓はもと延喜の聖主の御子で左大臣となられた兼明親王の邸宅で、世上こゝを御子左邸と呼んでゐた。御堂關白道長の六男大納言長方がその邸を譲り受けた、さうして屋敷の舊稱を襲用して長方を御子左大納言と呼んだ。俊成はその曾孫であるので、自然その家を御子左と稱へたのである。その略系を擧げて見ると、次のやうである。



「俊海 覺長 法印



### 三、俊成の小傳

俊成は堀河院が時の歌人に第二回目の百首を御召になつた永久二年に呱呱の聲を揚げた。父は權中納言俊忠、母は三兄と同じく伊豫守敦家の女とも、また顯隆の女とも見えてゐるが、幼名を顯廣といひ、三兄と異なり父の偏名を附けてゐない點などから考へて自分は顯隆女の説を採る。葉室顯頼の養子となつたのもその縁かと思ふ。十歳にして父に別れたが、母には二十六歳まで事へることが出来た。父は筆跡もうるはしく、六條家の顯輔が詞華集を撰むに方りて顯廣に歌稿を

第一篇 俊成評傳

示すやうに誂へたところから見ても相當に歌も詠んだには違ないが、保安三年に歿する時は顯廣がまだ幼少であつたので、格別の庭訓も遺すに至らなかつたと想はれる。

第五勅撰の金葉集の成つた大治二年に敍爵して美作守に任ぜられてゐるが、これは蔭子法の餘澤に浴したことで、任國に赴くやうなことはなかつたであらう。當年まだ十四歳を數へたぐらうであるからまだ歌もあまり多くは詠まなかつたではあるまいか。

そのかみ歌壇に最も輝いてゐたのは木工權頭俊頼と前左衛門佐基俊とであつて、前者は歌才が秀で、後者は歌學に長じてゐた。後の俊成の顯廣は基俊の門に入つた。その年代は明かでないが、二十五歳の時師から古今の奥義を授かつたとあるから、いづれそれより數年前に教を受けたと考へられる。保延元年彼が二十二歳の時、七月九日洛東は鳥部山にある父の墓所に詣で、折しも饑法が行はれてゐたのでこれに會ひ夜ふけて歸つて來たが道芝には白露がしげく置いてゐるので、

わけ來つる袖の雫か鳥邊野のなくく歸る道芝の露

と詠んだ。これが今日に残る彼の最初の歌である。露の袖の雫に見立てるのは例しもあるが、そ



の環境もはつきりと見え、感じも可なり強く現れてゐて、初心の作ではあるまい。基俊は學はあつたが傲岸な質でなか／＼人をゆるさないうに、顯廣が返上の古今集に

君なくばいかにしてかははるけまし古今のおぼつかなさを  
の一首を添へたに對して

かきたむるいにしへ今の言の葉を残さず君に傳へつるかな

と和してゐるのを見ると、その關係の如何に親密であつたかゞ忖度できる。この贈答によりて後人和歌血脈道統譜を作成し、基俊俊成の頃より既に古今傳授が始まつてゐるとするのは容易に賛意を表することは出来ぬ。かの宗祇などの云つてゐる三鳥三木などの古今傳授とこれとは別箇のものとするべきであらう。

顯廣が加賀守になつたのは長承元年十九歳の時で、遠江守になつたのは保延三年二十四歳の時である。この年齢の頃には任地に赴いたとも考へられるが、或は目代を遣し自分は京師に留まつてゐたのか分らぬ。保延五年母の喪に丁りては嵯峨の法輪寺に籠つてゐた。母の墓がそこにあつ

第一篇 俊成評傳

たのか、法輪には御子左家と何かゆかりが有つたのか是も分明でない。兎に角世をはかなんでゐた。嵐のはげしいのを打咤びて

浮世には今はあらしの山風にこれや馴れゆく始なるらむ

と詠じてゐる。若い時には何かあるとそれを氣にしてとかくセンチメンタルな傾向になり易い。或は夙く佛門に遁れるやうとの心持もあつたのかも知れぬ。世相は前に述べたやうである。敍爵以來官守は三たびかはつてゐるが十三年の久しきに互つて一回の昇敍もない。よし四男であるにしても父は中納言太宰帥になつてゐる。人並々の昇進はあつてもよいなど胸中に絶えぬ惱みを感じてゐたに違ひない。折ふし雪は降りつもつて庵室の籬も埋るばかりである一日、九重の中には正月京官の敍任式が終つた翌友人が訪ねて來た。そこで

思ひやれ春の光もてらしこぬみ山の里の雪のふかさを

と我身の沈滞をかこつた。情ある友は同情の涙を濺いたのであらう。

翌年述懷百首を詠んでゐる。題は堀河院の百首のそれによつたものであるが、悉く皆感傷性が

基調になつてゐて、血氣壯んな希望に燃えるやうな歌は一首もない。小倉百人一首に俊成の代表作としてか

世の中よ道こそなけれ思入る山の奥にも鹿ぞなくなる

と世を詛つた作を取つてある。實にこの述懐百首の一で鹿を詠じた歌で、他を見ても皆同じ傾向が充ちくゝてゐて、人々の誰もめでたさを諡ふ子日松を

春日野の松の古枝の悲しきは子の日にあへど引く人もなし

と詠じてゐる。鴨長明が方丈記の前半に天災地殃を列擧してゐる程はなかつたにせよ、饑饉とか、山門と園城寺との確執とか、京都を騒がせるた世相はもとより楽しくはなかつたに違ひない。かかる時感傷的に傾き厭世的になるのは自然で、特に個性によりそれを切りぬかうと努力するものと、その世相にもまれてゆくとの差がある。併し述懐百首だと云つて首より終まで歎くばかりが歌の本意でもあるまい。蓋しこれは當時最も輝いてゐた歌人俊頼の恨躬恥運雜歌百首などの影響を受けた爲ではあるまいか。人は常に愛誦する書の感化を受け易い。自家の官位の遲滯を思ふ時、

第一篇 俊成評傳

かういふ作がおのづと詠まれたものかも知れぬ。消極的でものしめやかなことを好む顯廣はおのづと佛法に親しみをもつに至つたと思はれる。時の皇太后待賢門院（璋子）は佛法に御志篤かつた御方で、法金剛院を創立せられるとか、金泥の大藏經を寫して佛寺に寄せられるとか、塔を立てられるなど、三寶の爲に心を盡させられた。そのお側に仕へてゐた女官には神祇伯顯仲の女の堀川とか、兵衛とか、新少將とか中納言とか、安藝とか、加賀などの名媛が澤山あつた。康治の頃、待賢門院中納言が結縁の爲法華二十八品の歌を人々に詠ませ、顯廣にも歌を送つて來た。試に一二例を引いて見る。序品の廣度諸衆生、其數無有量を

渡すべき數もかぎらぬ橋柱いかに立てたる誓なるらん

勸發品の即往兜率天上を

遙なるその眺をまたずとも空のけしきをみつべかりけり

と詠んでゐる。この待賢門院中納言は如何なる人か、父は中納言であつたことは云はずとも知れてゐるが、俊成のゆかりの人と見えてゐる。或はその姉妹で葉室中納言顯頼の室となつてゐる人

女などであるまいか。さうすると自分の嘗ては養子になつてゐた行先の女でその姪の俊子に當り、後に九條尼三位と云つた人と想はれる。六條家には顯輔が中宮亮であつた長承三年に歌合を行つてゐる。近衛天皇の康治二年には勅を奉じ第六勅撰の詞華集を撰んで奏覽した。兎角の議論があり、藤原爲經は後葉集を著してこれを謗り、顯輔の子清輔は父に代りて牧笛集を著してこれを駁撃した。この二書は夙く佚して共に傳らないが、崇徳上皇の六條家に對する御親任は渥かつたやうに拜する。この撰にあたり、顯廣のもとにも歌を出すやうに勸誘があつた。父の中納言俊忠の作を遺す時に、

木のもとに朽ち果てぬべき悲しさよふりにし言の葉を散すかな  
の歌を贈り、顯輔よりはその返しとして

家の風吹きつたへすば木のもとにあたら紅葉の朽ちや果てまし  
の一首を送り、集中に一首だけを載せてゐる。また顯廣の歌も

心をばとゞめてこそは歸りつれあやしや何の暮をまつらむ

第一篇 俊成評傳

の後朝戀の一首を入れてゐる。この歌は左京大夫顯輔の家にて歌合し侍りけるによめるとの端書がある。顯輔が左京大夫を兼ねたのは保延五年であるから、顯廣の三十歳前の作であることが知られる。

鳥羽上皇は崇徳天皇を叔父兒など、仰せられて、體仁親王を愛し、御讓位を促されたので、永治元年その事が決定した。霜月十日あまりの頃、顯廣は土御門内裏の南殿の前にあげがたまであつて面白く過した時の詠には

忘るなよ忘れじとだに云ひてまし雲井の月の心ありせば

の如きがある。斯くばかり心に憑んでゐた。然るに東宮御所に於てはまだ昇殿を許されないので珍しき日影を見ても思はずや霜かれはつる草のゆかりを

の一首を翌年新嘗會の日皇后宮の御方に遣して官位の沈滞を訴へてゐる。珍しき日影は東宮をたへまつてあることは云ふまでもない。これは前に述べた待賢門院中納言などに宛てたものかと思はれる。この八月門院は崩御になつた。十一月に至り顯廣は從五位上に陞進した。蓋し彼の身

にも日影はさし始めたのである。

先帝崇徳上皇は康治元年十三人の歌人に勅を下し百首歌を召された。その人々は

中納言石衛門督

參議左中將

左京大夫

前備前守

藤原公能

同

教長

同

顯輔

同

季通

同 隆季朝臣

尾張守

右馬權守

丹後守

散位

清輔

待賢門院

堀

同 親隆

同

實清

同

顯廣

同

清輔

堀

河

上西門院

待賢門院

花園左大臣家

兵衛

安

藝

小大進

にてこれに院もみづからお加はりになり、都合十四人。初度のものは夙く佚して了つたが、久安六年再度の詠進百首は今も存してゐる。世にこれを久安御百首といふ。院の御製中、無常の歌には、

はかなさは外にもいはじも、歌のその人かずはたらずなりにき  
の如きがある。次に

先年況列三百首人數、未レ終ニ六儀ニ詞藻之輩、或依ニ暮齡ニ類ニ朝露、或雖ニ紅顔ニ歸ニ黃壤、浮世險

第一篇 俊成評傳

眼、慨然墮<sub>レ</sub>涙、故詠<sub>レ</sub>之。

と注せられてあるのでも知られる。この御百首中、俊成の作は特に光を放つてゐるものが多く、千載以下の勅撰に入つてゐるものが六十五首に上つてゐる。その長篇に於ては自家の不遇を赤裸裸に敘してゐる。句は少し長いが全章を引いて見ると、

ことの葉は 神の御代より 川竹の 世々に流れて たえせねば 今も藐姑耶の 山風の  
枝もならさず しづけきに 昔の跡を 尋ねれば 峯のこすゑも 蔭しげく 四つの海にも  
波立たず 和歌の浦人 數そひて もしほの煙 たちまさり 行末までの ためしとぞ  
しまの外にも 聞ゆなる 是を思へば 君が代に あふ隈は うれしきを みはたゞかゝる  
埋れ木の 沈めることは から人の 三代まであはぬ 歎にも かはらざりける 身のほ  
どを 思へば悲し 春日山 峯のつゞきの 松が枝の いかにさしける 末なれや 北の藤波  
かけてだに いふにも足らぬ しづ枝にて 下ゆく水に こされつゝ 五つの品に 年ふか  
く 十とせ三とせも 經にしより 蓬の門に さしこもり 道の芝草 おひはてゝ 春の光



は こととほく 秋は我が身の 上とのみ 露けき袖を いかゞとも とふ人もなき 檣の  
 戸に 猶ありあけの 夕影を 待つこと顔に ながめても 思ふ心は 大空の むなしき名を  
 ば おのづから 残さむことも あやなさに 難波のことも 津の國の 蘆のしほれの 刈  
 り捨てゝ すさび染 さすかにのみぞ なりにしを 岸うつ波の 立ちかへり かゝるみことの かし  
 こさに 入江の蕨屑 かきつめて とまらん跡は みちのくの しのぶもちすり 亂れつゝ  
 忍ぶばかりの ふしやなからん

## 反 歌

山川のぜゝのうたかた消さらばしられん末の名こそ惜しけれ

に於けるが如く萬葉の風調を得ないけれども、言はんとするところは十分に盡し、特にその家系  
 を述べ、十三年も五位下に沈滞してゐることを憚るところもなく述べてゐる。

この年の正月の司召に正五位下に、翌七年の春には従四位下に昇敘され、翌仁平二年には左京  
 大夫に任ぜられた。當年顯廣三十九歳で、急に仕途に春が回つて來たのである。鳥羽院の城南田

第一篇 俊成評傳

中御殿にいらせられた時にも、顯廣は皇女暲子内親王の御賀に歌を上つてゐる。崇徳院の仙洞にては六月朔日、八月十五夜、九月十三夜、九月盡等に歌會を御催しになり、顯廣もその筵にまじはる光榮を擔つてゐる。長秋詠藻の下雜部には、「崇徳院より御草子かきて進らせよとて給はりし書きて奉るとて包紙に」と詞書して

數ならぬ名をのみとこそ思ひしか斯かる跡さへ世にや殘らむ

の歌を奉つた。御返りごとには女房の手にて

水莖の跡ばかりしていかなればかき流すらん人はみえ來ぬ

の一首を賜つた。この草子は院のあこがれになつてゐる方の作を顯廣が勅を奉じて淨書したものと見える。四位に敘せられた翌仁平三年には、まだ還昇を申し上げない中に、百首の歌部類して奉るべきよし重ねて仰せがあつた。その時に

雲居よりなれし山路を今さらに霞へだてゝなげく春かな

の一首を參議教長卿の手を経て差出した。今は宮中の奉仕となつて、常に仙院に侍らひがたくな

つたのを霞隔てゝと謡つたものですらゝと思を述べた作である。かくて近衛殿に昇殿して、御物忌に籠つた夜、御庭の遣水に月の宿つたのを見て

いにしへの雲居の月はそれながら宿りし水の影ぞかはれる

と詠んで、土御門内裏の御溝水を思ひ出してゐる。崇徳上皇の恩寵は忘れないが、顯廣は一向きになる性格ではなかつた。美福門院の白河押小路にて彼岸の念佛會に歌會を催された時にも人々と歌を詠んでゐる。當時歌人として推されてゐたからである。女院は極樂の六時讚の繪を書かせ、その賛歌をさるべき人に仰せられ、その殘餘を顯廣にうづめるやうにとの仰せがあつたので顯廣は十八首の和歌を奉つてゐる。「朝に定より出づる程ほのかに天の樂を聞く」の晨朝の繪賛には

ほのかなる雲のあなたの笛の音もきけば佛の御法なりけり  
の如きがある。

久壽二年に六條家では顯輔が亡くなつた。御子左家には長子成家が生れた慶事がある。その七

月には近衛天皇は寶算十七歳にて崩御あらせられた。顯廣は御大葬の翌日參殿して日の御座も裝束を改めて佛の軸を掛けられたのを拜して、思はず、

のぼりにし夜半の煙の悲しきは雲のうへさへ變るなりける

と詠めてゐる。諒闇の年の暮には從四位上に敍せられてゐる。當年四十二歳。一とせを経て鳥羽法皇がお隠れになる。その諒闇に保元の亂が起り、長くも崇徳上皇は讃岐に播遷あらせられ、宇治の左大臣は流矢にあたりてうせ、歌人參議教長の如きも連坐して常陸に流された。三とせを重ねてまた平治の亂が起り、少納言入道信西もはかなき最後を遂げ、二年を経た應保元年霜月には美福門院もお隠れになつた。御遺言により御舍利は高野の山に納めた。その御使は侍從大納言成通入道で、師走の四日に彼の山に着かれたと聞いて顯廣は

後れるて思ひやるこそ悲しけれ高野の山のけふのみゆきを

の一首を入道大納言に贈つてゐる。

その翌年二男定家が生れた。幼名を光季と稱した。顯廣は當年四十九歳で、前年に左京大夫に

なつたが、つくづくと官途の昇進の遅いのを啣つてゐる。藏人になられないのを歎いて賀茂社に二千三百度も御参りをした人もある程の時世であるから、顯廣も崇徳、近衛、後白河、二條、四條天皇の侍臣となつて尙月卿の地位に進みえないのを慨いて

いかなれば沈みながらに年を経て代々の雲居の月を見るらん

と詠じてゐる。同じ歌壇の藤原清輔はこの年三月三日に稍く昇殿を聽された。六條家對御子左家の關繫はこの頃既に面白くなかつた。袋草子によると、三月十三日に中宮の御方に見合が行はれるといふ仰があつて、その日に先ち和歌題が二首兼題として出され、翌日の御會には月卿及二三の雲客を加へ、數十講の歌合が行はれるといふので、刑部卿範兼が題者となり、専ら清輔の歌才を試さうと企てたやうで、範兼の判にいかゞはしい事があつても、清輔は口を挟まずにゐた。半ば披講のあつた頃、清輔は今夜は和歌の沙汰は致さなと思ふのかと忝き勅諭があつたので、機を待つてゐた。躑躅の歌にこのもかのもと詠んであるのを見て、範兼はこれは筑波山の外には詠じてはならぬといひ、顯廣も近代の歌合にもさういふ風に難じてゐると相槌を打つと清輔は始め

て口をきり、それは基俊の判を指すかと質すと俊成はさうだと答へ、範兼は得たりとなす時、清輔はそれは殊の外僻事だといへば、清輔の弟の重家までも末生の身で、基俊の説をさみするのは如何といふ。清輔は私見ではなく、基俊以前の大家にさう詠んだ例しがある。凡河内の躬恆の假名序に漢河に鳥鵲のよりはの橋をしてこの面彼もに行きかふやと書いてあるのは何よりの明徴だといへば、満座動搖し、曩に居丈け高であつた範兼も、顯廣も、急に腰を折られたと、自家廣告をなしてゐる。斯くて清輔は二條院の勅を奉じ、父顯輔の後を襲ひて續詞華集二十卷を撰んだが、二條院の崩御により奏覽を遂げなくて勅撰の中に入れられなかつた。(尤も正治奏狀には異説を述べてあるが、それは後に述べる。)

長寛二年八月讃岐院は白峰で御崩御になつた。寶算四十六。御恨めしき事が多かつたこと、傳へられてゐる。御供の某が御宸筆を顯廣に届けたといふ。顯廣が多き歌人の中特に院の御志しをありがたく拜して長歌一篇をものし、その反歌に

夢のうちになれこし契くちもせでさめむ旦に逢ふこともがな

と述懐してゐる。西行が仁安三年秋白峯陵を訪ねた一話は撰集抄に出で、雨月物語によりて一般に知られてゐるが、顯廣のことは世に全く知られてない。

二條天皇が御讓位になつて、六條天皇が御即位になつた永萬二年改元 仁安に至り、顯廣は從三位に敍せられ、その子定家は五歳にして從五位下に敍せられ、大嘗會には行事辨俊經をして悠紀方の和歌詠進のことを仰下された。從來は儒家の人が命を拜する例だと申して辭退し奉つたが、更に恩命があつたので風俗歌十首と屏風歌十八首とを詠進した。近江國阪田郡の稻春歌

近江路や阪田の稻を刈りつみて道ある御代の初にぞつく

もその風俗歌の一首である。この事のあつて間もなく定家の昇敍があつた。教長は敍に遇つて歸京したが後高野に隱栖した。範兼はその前年に卒した。顯廣と清輔とが歌壇の中心人物であつたが、閱歷の高い顯廣の方が世に用ゐられた。この年、中宮亮重家朝臣家の十四番歌合の判者となつてゐる。當年五十三歳。顯廣の判者となつた現存の歌合中の最も夙いものと見える。翌年太皇太后宮亮平經盛朝臣家十二番歌合には清輔が判をなしてゐる。その相對關係は相較べて見るべき

である。

顯廣は永萬二年正月に左京大夫を辭した。長男の成家がその代りに侍從に任ぜられた。十二月に五歳になる四男の定家が従五位下に敍せられた。これも異數に考へられる。翌仁安二年正月には正三位に敍せられ、その十二月には名を俊成と改めた。(以下改名によつて敍することゝする。)

その頃は平家の勢が盛んにして清盛は太政大臣に、その嫡子重盛は權大納言、三男の宗盛も三位の中將であつた。俊成は平家の公達の歌の師範であり、また後白河天皇の皇后建春門院とは縁つゞきの關係もあつて、後鳥羽仙院の院司に補せられ、仁安三年の末には右京大夫に任ぜられ、高倉天皇の御即位あらせられるや、後徳大寺實定卿は皇后宮大夫を辭し、俊成がこれを兼ねることゝなつた。この皇后宮と申上げるは後白河天皇の皇后建春門院(御名は忻子)のこと、實定の御はらからで、門院や實定の母は俊成の妹であり、さういふ關係で實定がその地位を俊成に譲つたのである。平相國の女が高倉天皇の中宮と定まるや、建春門院は皇太后とならせられ、俊成も皇太后宮大夫となつた。承安二年には以上の二役の外更に備前權守をも兼ねてゐたが、十



二月に右京大夫を辭し、その代りに定家は侍從に任ぜられ、一門がいよ／＼榮えていつた。然るにその翌年九月二十日より病に罹り、二十七八日頃には危く見えたので、官を辭し剃髮しようと思ひ、そのことを内大臣師長のもとに申送つた。消息に添へた一首は

昔より秋の暮をば惜みしにことしは我ぞ先たちぬべき

の如く哀音を含んでゐる。師長は

霧はれぬ心ありともとまりてなほこの秋も惜めとぞ思ふ

と返しをした。俊成はこゝに名を釋阿と改め佛門に歸し、和歌に餘生を送ることゝなつた。時に年六十三。俊成の名を用ゐたのは僅に九ヶ年である。

その翌年六條家の清輔は歿した。對手ではあつたが寂しさを感じたであらう。翌治承二年夏仁和寺の官から仰があつてその歌をまとめて出すやうにとの恩命を蒙り、久安百首と述懐百首とを上卷に自餘の作を部類して中下の二卷となし撰進をした。これが長秋詠藻である。斯る間にもさま／＼とめぐる世の中を見た。みやびの武人源三位頼政は平家に叛いて橋合戦にもろくも敗れ、

第一篇 俊成評傳

扇の芝の露と消えた。飛ぶ鳥も落す勢で天下を我が物としてゐた福原の大相國も蛭が小島の小冠者のしるしを見ないでこの世を去り、その一門は一谷に屋島に壇浦に轉じ主従悉く終に滅亡した。法然上人の淨土開宗がいかにも多くの人を引つけたかも目のあたり見たのであらう。その中後白河院の院宣を忝うし、圓頂緇衣の身で第七勅撰の千載集を物の見事に七ヶ月で撰進した。時に年七十五。老いて益々矍鑠で斯壇の明星と仰がれ、建久四年には八十歳の高齡を以て左大將家の六百番歌合の判者となり、同八年には齋院式子内親王の爲に古來風體抄五卷を著し、歌の本義を説き史的變遷を敍した。翌年には後京極攝政の自歌合に批評をしるし、その後も撰歌合その他の歌合の判者となり、建仁二年千五百番歌合には八十九齡を以て新進歌人に伍してその作者に加はり、同三年朝廷におかせられては特別の御思召を以て和歌所に於て九十の壽宴を開きその名譽ある歌人を犒はせられ、釋阿は思ひ殘すこともなく、元久元年十一月三十日九十一の高壽を以て天年を終つた。平安朝に紀貫之と共に後人に影響を與へたことは長く和歌史上に牢記せらるべく、御子左家の歌風がその後隆々として榮えたのは偶然ではない。

## 四、千載和歌集の撰

詞華集が出来て後四十又餘年勅撰の事が無かつたので、後白河院は壽永二年二月院宣を入道三位俊成に下され、正曆以降の歌を撰ばしめられた。院使は藏人頭右中將平資盛であつた。文治三年九月功を終へ奏上の運びに至つたが、明月記によると、文治四年四月二十二日進覽したとあり、入道の自筆、白色紙、紫檀軸、羅表紙、紘紐といふ裝潢で、外題は世尊子伊經卿これを認め、蒔繪の筥、蘆手摸様のうるはしいものであつた。思ふにその前年に出来てゐたのに、仰言があつて撰者の歌を尙多く加へたりして、奏覽は序文と異なりその次年であつたと見るべきである。佛門に入つたもので勅撰に與るのは異例であつたと見え、昔喜撰が和歌式を撰したことを序に引いて辯明した。

この集は俊成独自の撰であるから、この集を評することは俊成その人の歌に對する理念を明にすることとなる。一體歌人は歌の打聞を作つたもので、八雲御抄によると、桑門集には敦頼入道道因

第一篇 俊成評傳

の現存集、憲盛の拾遺現存集、俊惠の歌苑抄なども存してゐた。俊成には三五代集の撰があつた。長秋詠藻の雜の部に

行く末は我をもしのぶ人あらむ昔をしのぶ心ならひに

の歌があり、その詞書には撰集のやうなることしける時、古き人の歌どもの哀なるなどを見てとある。新古今卷十八雜下には千載集撰び侍ける時人々の歌を見て」と詞書がある。

俊成と對してゐた清輔は治承元年に歿してゐる。月輪關白が玉葉に「近代知<sub>レ</sub>此道<sub>二</sub>之者唯彼朝臣而已、可<sub>レ</sub>貴可<sub>レ</sub>仰」をも、その歿するや、「和歌之道忽以滅亡、哀而有<sub>レ</sub>餘」と嘆息してゐるほどの斯道の弘才が亡き後には五條三位こそ勅撰の撰者として何人も異議なかつたであらう。俊成が美福門院在世の時その年官の榮を蒙つたことも一度ではない。後白河法皇によく、その溫和な性格はいづ方にも敵はなかつた。六條家の如き平明の體は若い人には受けられないし、俊賴の流を追うて新を喜ぶ人のは飛躍しすぎたものもあつたであらう。俊成は古今集信仰者であることは、御裳濯川歌合判にも「古今集こそは歌の本とは仰ぐべき」といひ、古來風體抄の序にも同様の見が

ある。千載集の體裁は古今集に則つて二十卷となし、春<sup>上</sup>、夏、秋<sup>下</sup>、冬、離別、羈旅、哀傷、賀、戀<sup>一</sup>より、雜<sup>五</sup>まで、雜<sup>上</sup>中、釋教神祇に分ち、雜下を短歌<sup>今いふ</sup>、長歌、旋頭歌、折句歌、物名、俳諧歌に小別した。物名、俳諧歌を雜體に入れ、神祇釋教を新に設けたところは、後拾遺集に做つたのであらう。

歌數は八雲御抄には千二百八十四首又短歌とあり、勅撰次第一本には千二百七十七首とし、國歌大觀本は千二百八十五首となつてゐる。俊成は撰歌にあたり可成り公平の態度をとつたと云はれてゐる。一日歌林苑の俊慧法師が訪れて、貴下の秀歌は「面影に花の姿をさきだてゝ」の詠かと尋ねた時、否

夕されば野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里

の歌をおもて歌とすると答へたといふ。その創作時の態度に關して心敬僧都のさざめごとには深更にとの油ほそく有るかなきかに對ひ、直衣の煤けたるうちかけ、古き烏帽子耳まで引き入れ給ひ、脇息により火桶を抱き、吟詠の聲しのびやかにして、夜闌け人靜まるにつけてうち傾

第一篇 俊成評傳

き、よと泣き云々

といふ有様で優しい歌を詠んだと傳へてゐる。随つて他の歌を見るにも幽玄とか餘情といふ體を重んじてゐた。尙、さびた體、艶なる姿、長け高き様などを重んじてゐたことは、御裳溜川歌合の判にても察しられる。飛躍し過ぎて雅正を缺くものは欲しなかつた。清新を尙んだが、俊頼や曾丹の如く險語奇語は好まなかつた。奇峰峭立とか崎嶇たる峽中とかよりも、砂清く草青き江渚を好み、情趣に富む氣品ある諷詠を望んでゐた。それが理念は千載集を通じても見られると思ふ。

後拾遺撰後正曆より文治の當代に至る間の歌人三百三十餘家の作品をすぐつた。中に後拾遺時代の作家は四十人、金葉に始めて見はれた作家は四十七人、詞華のが二十二二人。この集に新に出て來た人は二百三十四で、階級別に考へると現代作家の中僧侶が六十人、女流は二十三人を數へることが出来る。今集中多く採られた人々と歌數とを檢して見ると

源 俊 頼 五十二

藤 原 俊 成 三十六

藤 原 基 俊 二十七

崇徳院 二十三 俊恵法師 二十二 藤原清輔 二十

道因法師 二十 西行法師 十七 大江匡房 十七

藤原實定 十六 藤原兼實 十五 藤原季通 十五

藤原顯輔 十四 源賴政 十三 顯昭 十三

の如く、その顔觸も粒が揃つてゐるが、自然派の西行の作が比較的少い。七十八十まで佳吉社に月詣でをして秀歌を祈つてゐたり、歌合を張行したりしてゐた道因に佳歌もあるが西行の方が少いのは淋しい感じがする。寂然には法門の歌に優れたものが多い。年は若いが寂蓮にも佳い歌がある。これらが僅々七首ぐらゐである。勅勘になつたので止むを得なかつたであらうが、平經盛經正父子薩摩守忠度の如きも歌口であつて入れられず、中に忠度のが僅に一首詠み人知らずとなつて入つてゐるなど古人が指摘してゐる。

千載集を繕いて見ると新古今の前驅をなし、而もそれに比べて遜色のないものが少くない。敘景歌として優れたものには藤原定頼の

第一篇 俊成評傳

朝ぼらけ宇治の川ぎりたえぐにあらはれ渡る瀬々の網代木

の歌の如きは繪畫的であつて、而も平面描寫に止まらないで、うつりゆく變化を示してゐる。後徳大寺實定卿の

郭公なきつるかたを眺むればたゞ有明の月ぞ残れる

の如きも自個と自然との位置を明確にし、言外にその聲を愛惜する情緒を宿してある。清輔の

鹽釜の浦ふく風に霧はれて八十島かけてすめる月影

の如きも情を景中に没入させた大觀の眼前に浮ぶ作である。抒情歌に於ても

長からん心も知らず黒髪のみだれてけさは物をこそ思へ（待賢門院堀河）

の如き、黒髪の枕詞がよくきいてゐる。

大方の露には何のなるならん袂におくは涙なりけり（西行）

の如きもあはれの深いものがある。

さゝなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻ばな



の如きも感慨深い作である。二條院讃岐の沖石の歌、待賢門院加賀のふし柴の歌などそれにより渾名を得たる名歌も皆この撰に入つてゐる。

言外に餘情を残した作、幽玄な歌、さびの歌などは俊成が狙つたことは歌合の判の條にも述べたが、この集に採ることを努めた。「野邊の夕風身にしみて」の類今一々引かない。これと反對に一首の上でなくて、一句の上に面白い表現を用ゐることを喜んだ。例へば

春の夜は軒端の梅をもる月の光もかをる心地こそすれ（俊成）

立田山散るもみち葉をきて見れば秋は麓に歸るなりけり（大江匡房）

吹く風に折れふしぬれば女郎花まがきぞ花の枕なりける（藤原行家）

の如き「月の光もかをる」といひ、「秋は麓に歸る」といひ、「籬ぞ花の枕」といふ表現が一首の眼目となつてゐる。斯くて艶な歌をなすを喜んだ。この風調は新古今時代には一層盛になつて來た。故事や本歌にすがつた作は古今集にも相當に存するが、この頃に至つて漸く盛になつた。

誰が爲にいかになつてばか唐衣千たび八千度聲の恨むる（藤原基俊）

第一篇 俊成評傳

の如き白氏文集の千聲萬聲無了時に據つたもの、

唐國に沈みし人も我が如く三世まであはぬ歎をばせし

の如きは漢武故事に出てゐる顏駟が三葉不遇のことを詠じたもの、

思ひあまりうちぬる宵のまぼろしも浪路をわけてゆきかよひけり(鴨長明)

の如きは白氏の長恨歌に由つたもの、

見せばやな露の光のたまかづら心にかけて忍ぶけしきを

の如き源氏物語の玉葛の巻をよせたもので、斯かる類も少くない。

當時兵亂相續ぎ、武門が起り、縉紳は勢力を失ひ、また末法思想が熾にして、世を遁れるものが少くなかつた。またそこまでに至らないものは上位に對し身の振方や榮進を希求する類の歌も少くなかつた。撰者自身もみづからの上、また我子の上に就きて愁訴したことが一再でなかつたやうで、他にもその類が多く、基俊の如きも一子光覺僧都が維摩會の講師に度々望をかけていつも外れるので、藤氏の氏長者に恨を述べた

契りおきしさせもが露を命にてあはれことしの秋もいぬめりの如き作がある。源三位頼政の如きも昇殿が中々聽されさうにないので、

人しれぬ大内山のやまもりは木がくれてのみ月を見るかな  
と詠じ、大江匡範が大學で勉強する爲の學文料を望んで得られなかつたので、

思ひやれゆたにあまれる燈火のかゝげかねたる心細さを

と詠じ、また前にも述べたやうに、藏人になられないのを歎いて賀茂社に二千三百度も御参りをしたのもある。時代風調で、それらの歌を撰んだものと見える。下情上達の一方便として歌が利用されてゐた。

撰者は身圓頂の人となつてゐたばかりでなく、歌を以て佛道の所縁としてゐた程であるから、佛教思想を歌つてある作などは多く眼にしたのであらう。

うきことのまどろむ程は忘れてさむれば夢のこゝちこそすれの如き世をはかなんだ歌、

第一篇 俊成評傳

野邊見ればむかしの跡や誰ならむその世も知らぬ苔の下かな

の如く、亡き人の墳のしるしも分らずになつたのを歎じたもの。

こえやらで戀路にまよふ相阪や世をいではてぬ關となるらん（藤原家基）

の如く迷と罪とを詠じたもの。その他佛教々理を詠じたのに

空しきも色なるものと悟ればや春のみそらの緑ならなん（攝政家丹後）

の如く色即是空の心を三十一字となしたもの、

わび人の心の中をよそながら知るやさとりの光なるらん

の如き智慧光佛を詠じた類の如き、優雅な釋教和歌を撰んである。

撰者は全く新しい風を斥けたかといふに、多少はこれを探つてゐる。世にいふ一句切三段切と唱へる。

この頃の鶯の浮寝ぞ哀れなる

上毛の霜よ

下の氷よ

(崇徳院)

けふ暮れぬ

花の散るしも斯くぞありし

二たび春は物を思ふよ

(前齋院河内)

また破調と思はれるやうな

人もがな

見せも聞かせも

萩が花咲く夕かげの蛸の聲 (和泉式部)

さまざまに心ぞとまる

宮城野の 花のいろく

蟲のこゑく

(源俊賴)

の如きも採つてある。また

千載和歌集の撰

第一篇 俊成評傳

蟲の音も稀になりゆくあだし野にひとり秋なる月の影かな

の秋なるの如き用法は後世毘舍門堂家の家風として二條家の排斥するが如きものをも收めてある。俊成みづから斯かる詠作を好まなかつたが、時代風調の新しい分子として遺棄しなかつたと想像される。尙この集のこまかな批評は別の著作に譲り、こゝには省略するが、撰集に對する俊成の意圖は察知出来ると思ふ。

五、御子左家と六條家

平安朝の末期に於て、六條家は和歌の家として世から認められてゐた。左京大夫顯季が始め人鷹影供を行つた時には木工權頭源俊賴が當代第一の歌人であつたが、第五の勅撰は顯季の子顯輔が撰進の恩命を蒙り、その子清輔が家學を繼いで藍青の譽があつて、歌學を明にした爲である。高倉天皇の應保二年三月中宮の歌合にて、顯廣清輔の對立のあつたことは既に述べた通である。

清輔は石上の柿本寺に人鷹の卒塔婆を建てたりして歌神を崇敬してゐる。俊成は五條の邸内に紀

伊の玉津島明神を勸請して

和歌の浦の道をば捨てぬ神なればあはれをかけよ住吉の波

と詠んだと云はれてゐる。その孫爲家は毎月六回この社に詣で、百首詠を企てたとも傳へられてゐる。清輔が卒した後にはその弟の顯昭が歌學を究めて六條家の歌學を完成しようとしてゐる。建久六年後京極左大將家で六百番の歌合を行ひ俊成を判者とされた時、顯昭の歌を多く負とした。顯昭はこれに陳狀を奉りその非を難じた。これが有名な顯昭陳狀また六百番陳狀と呼ばれるもので、歌合論争の公開狀である。否六條家の俊成の僻見をこきおろした意見書である。

圖書寮本六百番陳狀によると、顯昭自歌百首中三十五首と他に信定歌一首に就き判者の説を反駁したもので、風情を第一とし、用語は自在なるべく、取材を廣くすべし等の意見に基づき、判詞を攻撃した。例へば元日宴を詠んだ

む月たつけふのまとるや百敷の豊のあかりの始なるらん

に對し、俊成の判に

御子左家と六條家

第一篇 俊成評傳

歌の意趣常の習はまると見ては梓弓を引きよせ、豊明など詠まん時は曇なき世など詠みなら  
ひたる云々

に對し

和歌は風情に引かれてよりくる所をとまかくも詠み侍れば、必ずしもその詞のすちをよみ通さ  
ぬことのみ多く侍るめり云々

雲雀を詠んだ

春日には空にのみこそあがるめれ雲雀の床は荒れやしぬらん

の判に

雲雀が己が心ならず空にあがりて床をあらすなどするにあらざるべし。(中略)されば床を荒し  
やしつらんなど云ふべからぬ事なるべし。

やまと歌の習は風情を先とし、實儀をたゞさぬ事多し。春は空にのみあがりて見れば、雲雀  
の床やあるらんと詠める、あらましごとはさのみこそ侍れ。さのみ實事を正さば(中略)、和



歌に法令難するは口惜きこととぞ法性寺殿は常に告げられ候由承りし、鶉の題

鷹の子を手にはするねど鶉なく粟津の原にけふも暮しつ

の判に

催馬樂の鷹の子の歌の心をよまばたと手にもする侍れかし。是は手にはするねどといひて粟津の原にけふも暮しつとは鶉を取らばやとのみ思ひくらせるにや侍らん。又風體も無下になつ詞にや侍らん。

狩せんとても來ねば、鷹の子も手に居ゑねど、鶉の聲を身にしめて粟津の原を過ぎもやらす、日をくらす心を仕れり。古歌の心を思ひながらかやうに詠みかへたる歌の風情始て不可ニ申盡(中略)和歌の風情は折に従ひ志に任せて蘭菊のみをほしきまゝに詠み來れるにや、(中略)今より後は鶉の音を心にしむる事は思ひ改めて、偏に鶉とらばやとのみに心を入れて歌を詠すべきか

に於てその一斑は窺はれる。天のまでがた、河社、そが菊などに關する考證的論辯は論鋒の鋭き

御子左家と六條家

## 第一篇 俊成評傳

對手をして心膽を寒からしめるものがある。判に多少偏したところもあるが、また強辨もなきにしもあらずである。兼載雑談に顯昭と俊成の養子寂蓮とが獨鈷鎌首の争を世に謡はれたことも著く、顯昭が「歌はやすきものなりけるよ、寂蓮程無才學なれども歌をばよく詠む」といふと、寂蓮は「歌は大事のものなりけるよ、あれほど大才なれども歌は下手なりけるよ」と酬いた説話を載せてある如く、顯昭は考證的方面に長じた學匠、俊成は卓越した歌人であつたので相容れないのである。

俊成は正治年間に奏狀を上つて六條家を攻撃してゐる。これは何の爲にしたものか。正治には百首歌を然るべき歌人より召された。定家はその人數に入つてゐなかつたので、俊成は愁訴してその數に加へられた。季經は清輔や顯昭の弟で、定家とはその間の悪かつたことは明月記にも見え、正治二年四月の歌合に季經が判者となつた時、定家は作者となることを辭したいきさつもある。斯ういふ次第で奏狀も作つたものか。

顯昭は萬葉集時代難事を著し、古今集の眞名序を徴とし、萬葉集の撰を大同帝の時としてゐる。

る。正治奏狀には聖武天皇御時の撰とし、崇徳院の久安百首には最初御製の外十三人で、その中に公行行宗二卿、忠盛、僧都覺雅も加へられてゐたが、講が手間取つた中に物故する人が生じ、新に隆季、清輔、實清が加へられた消息を述べ、承安二年清輔が白川莊金剛院で尙齒會を開いたのは文壇の一美事といはれてゐたが、尙齒會と申事をこそ年老たる者ばかりは仕事にて候へ、百首には次第更に候はぬ事候と云ひて自家が三十の齡にて久安の百首に加はつたことを述べてゐる。尙齒會も俊成にはあまり同情を引かなかつたと推量される。

藤原教長が拾遺古今を撰んだ時、清輔は側にゐてその業を助けたが、「照りもせず曇りもはてぬ」の歌を夏の部分に入れたのは白氏の詩も、源氏の花宴をも見ないのでとその無學を誇り、顯輔も始は佳歌を詠んだが、年老いてはざれ歌を好み、詞華集はざれ歌のみ多く、八條相國撰じ直すと申されたが、内大臣公教の諫によつて止めた。蓋しこれは公行の佳歌を採らなかつた意趣だともいひ、また清輔は續詞華集を作り勅撰となさうとしたが、二條院の御承引がなく、後徳大寺左大臣實定卿は彼の集には我が歌のよきは入れないで悪しきを採つてゐる。されば自分の歌は勿論

第一篇 俊成評傳

我が閑院一家の人々の作、また外戚にあたる釋阿の詠も入れるなどの御話があつたと隨分六條家の人々を非難してゐるが、同黨異伐の弊を受けての文字と見える。續詞華集も奏覽に及ばない中に二條院の崩御になつたので沙汰止みになつたと見るのが正當であらう。

晩年大炊御門齋院の爲に著した古來風體抄の中に歌の病犯を事々しく云はなかつた點も六條家の歌風と對照すべく、和歌聲韻説に關しても清輔の牽強なるを論じ、長歌短歌の別を正しくし、「清輔朝臣と申しゝものゝ、奥儀とかいひて、髓腦とて書いて侍るものには、偏に長きを短歌と定めて書きて侍るとかや。大方はかやうのことは萬葉集をぞ證據とすべき所(中略)萬葉集のことをいひながら、偏に三十一字の反歌短歌を長歌といふらん髓腦は萬葉集を委しく見ざるに似たり」とさへ云つてゐる。また同書には川社及鹿火屋などの解釋に關しても顯昭の説を辯駁してゐる。後京極左大將良經の爲に萬葉時代考を著し、その撰者を聖武天皇の御宇と説くのも顯昭の萬葉集時代難事に對するものである。

また定家が顯昭の古今集註に密勘を加へたいはゆる顯註密勘は清輔の奥儀抄の歌註に對しても

密勘を加へてゐる。その説の基づくところは家説云々と所々に云つてあるのを見ても多少俊成の説も雜つてゐると見るべきである。猶定家によつて御子左の歌學が六條家に代つて勢力を得たことは茲には述べない。

## 六、判者としての地位

創作にゆたかな天分を有するもので、批判や鑑賞にさまで優れた識見を具へないものも世には少くない。俊成は歌人としてまた歌の批評家として顯廣時代から優れてゐた。釋阿時代に至りては更に爛々として光を放つたものと云ふべきである。九十一の高齡を有つたことゝて人の歌を見たことが頗る多かつたに違ひない。歌合の判者となつたことも隨分度々であつたと思はれるが、現存してゐるものに就いて考へて見る。永萬二年中宮亮重家朝臣家歌合の判は顯廣時代の最も古いものゝやうである。この歌合は花、郭公、月、雪、戀の五題十四番で、作者は左右各十四人、公卿の外兵庫頭賴政、若狹守平經盛、俊惠、顯昭、寂然、待宵小侍從、右京大夫、祝部成仲、賀茂政

第一篇 俊成評傳

平の如き武家、神官、僧侶、女流も加はつてゐる。判詞も古典古歌を引き先例を擧げ、相當に詳密に説き及んである。その六番の右の右京大夫師光の

櫻花としの一とせ句ふともさてもあかやこの世つきなん

の歌に「上下の句の始の文字同じきことぞ古き歌合にとがとせるやうに覺え侍る」といひ、又九番の右馬權頭隆信の

年を経てつくす心を哀とや句をそへて花もさくらん

の歌に對しては「年をへて句をそへてといへるての字同じことにや」云々と評し、十番の左の白雲の八重かさなりて見えつるは奈良の都の櫻なりけり

の歌に於ては「なりの字ぞ二ところ侍るめる」と評してあるのを見ると同音音韻の病を斥ける意同も見えるが、その第一主眼とするところは幽玄の調、餘情の體などを準とした。二番の

左

打よするいそべの波の白ゆふは花ちる里の遠目なりけり

右

ちり散らす覺束なきに花ざかり木のもとをこそ住家にはせめ

の判に「左、風體は幽玄調、義非凡俗云々。右ふることどもを兎角引よせられたる中に、かの伊勢の御息所の歌は山路にて故郷のといぶかしがり、げになに散りちらす聞かまほしきをといへるこそ殊におかしきをこの歌には散りちらす覺束なからんことは花を思ふ心は深からんやと聞ゆるらん。末にすみかにはせめと云ひはてられたるほど餘情たらずやあらん」と評してあるのは移してすべてにわたして見るべきであらう。

俊成時代に判を加へた歌合は

嘉應二年十月九日 住吉社歌合……(一)

同 十六日 建春門院北面歌合……(二)

承安二年十月十七日 廣田社歌合……(三)

同 三年八月十五夜 三井寺新羅社歌合……(四)

判者としての地位

第一篇 俊成評傳

の四つで、(一)は社頭月、旅宿時雨、述懷の三題で、作者は實定、清輔、賴政等左右各二十五人。みづからも作者に加つてゐるが、いづれも自作をば負とし、他の作には「既幽玄之境に入、よろしくこそ聞え侍れ」といひ、自らのには判者拙歌に侍りけり。「依例不能加判云」と云ふ如き態度を執つてゐる。(二)は關路落葉、水鳥近馴、臨期違約戀の三題、作者二十人、二十番にて作家にも加はつてゐる。(三)は社頭雪、海上眺望、述懷の三題、作者六十人、每題二十九番、その作者にも前と同じく加はつてゐる。(四)は遙見山花、古郷郭公、湖上月、野宿雪、談合友戀の五題各八番。作者は法性寺石藏法橋房以下十六人、三密瑜伽之壇傍に柿本の風を詠じ、一乘止觀の窓前に遙に湖上の月を詠めて懷をのべ、自分に判を請はれたのを榮としたとの狀を添へてゐる。花を飭り質を忘れたのを戒めた言もあり、誠之至深者其詞无詞、文之偏質者其體少體などと評したところもあり、或は詩を引き經文に擬し、心、姿、詞のつづけがらの優なるを尙び、古きによりて古に泥まず、新しきものあるをたゞへ、その疵をも婉曲に指してある。而して自歌は負とし、その宜しきものも持となす。そこに謙抑な宗匠氣質のあるのを見通すことは出来ない。



次に入道後の歌合の判を拾つて見ると。

- (一) 治承二年三月十五日 別雷社歌合
- (二) 同 三年十月十八日 右大臣家歌合
- (三) 文治中 御裳濯川歌合
- (四) 建久四年秋 左大將家六百番歌合
- (五) 建久六年正月廿日 民部卿家歌合
- (六) 同 九年五月二日 後京極殿自歌合
- (七) 建久の末 慈鎮和尚自歌合
- (八) 正治二年二月五日 御室撰歌合
- (九) 建仁元年 千五百番歌合第三第四判
- (一〇) 建仁元年三月廿九日 新宮撰歌合
- (一一) 同 八月三日 影供歌合

判者としての地位

第一篇 俊成評傳

(二) 同 八月十五夜 撰歌合

(三) 同 二年九月十三夜 水無瀬殿戀十五首歌合

(四) 同 廿九日 水無瀬櫻宮十五首歌合

等である。中に、

(一)は賀茂神官重保の企てにかゝり、霞、花述懐の三題、作者は六十人。每題三十番。公卿の外、平家の人々には時忠、經盛、經正、忠度、源氏の人々には頼政、仲綱等、僧侶には寂念、勝命、祐盛、寂蓮等が加はつてゐる。判者の歌は頼政と合せてある。

(二)は右大臣兼實家にて行はれたるもの、霞以下述懐に至る十題合せて三十番。作者二十人。判者も作家に入つてゐる。

(三)は後京極攝政がまた左大將であつた時に催したもの。作者は左方後京極良經、藤原季經、同兼宗、同有家、同定家、顯昭、右方藤原家房、同繼家、同隆信、同家隆、源信定、寂蓮で各百題百首合せて六百番、建仁元年に行はれた千五百番に次いで大なる歌合にて、左右兩方からそれ

ぞれ相手に對する歌の批評を述べ、次に判者の詞を記したもので、判詞の一の典據となるもの。これに對し顯昭はその歌に對する判者の言を非とし、六百番陳狀を著してこれを奉る。歌論史上注目すべきものである。その異見は別に六條家對御子左家歌學の條に述べて置いた。

(四)は民部卿經房卿の開催したもので、作者は四十六人、二十三番。釋阿は右方に、定家、家隆は左方に分れ、殷富門院大輔、讚岐、三河内侍、丹後局などの女流も加はつてゐる。八十八歳の時の判にて、末に

歌は必ずしも繪所のものゝ色々の丹の敷をつくし、つくも司の工のさま／＼木の道をえりすへたる様にのみ詠むにはあらざる事なり。唯よみもあげ、うちもながめたるに、艶にもおかしくも聞ゆる姿のあるるべし

と述べてある。

(五)は守覺法親王家にての當座にて、春夏秋冬雜の五題六十番。作者十八人。判は後に加へたもの。

判者としての地位

第一篇 俊成評傳

(六)は歌合中最も規模の大なもので、建久の三十家の百首を組合せたもので、判者十人、判の形式が判者によりて様々である。後京極左大臣の夏三及秋一の判は詩句を以てこれを判し、後鳥羽の秋二三の勅判は一首の歌を以て優劣を分ち、前權僧正慈圓のもこれに倣ひ、顯昭のは故事を多く引き、權大納言忠良の春一二の判の簡單なのや、釋阿の中庸を得たる等が比較される。

(七)は霞隔遠樹以下四字題十題三十六番、作者二十六人。作者隱名褒貶にて判詞には左右相互の主張を載せ終に判者の評を加へることは六百番歌合に準じてある。鴨長明の如き女流に於ては宮内卿局の如きもその人數に加へられてある。

(八)は作者十八人。初秋曉露以下六題十八番。釋阿の判なれど判詞は見えない。

(九)は中秋の作とて月多秋冬以下悉く月に因んだ題で作者廿四人、俊成卿女藤原秀能などもその中に加へられてある。判詞は簡明である。

(一〇)は作者十人、春戀以戀の十五題七十五番。後鳥羽院は左馬頭藤原親定の假名を用ゐてゐさせられる。

(二)は初秋風以下六題、作者十五人、十五番。判詞は俊成の最も晩年のもの。

西行法師の心をこめて合せた御裳濯川三十六番自歌合に於ける俊成の判には歌體に於ける意識を示したものがあつた。鴨立澤の歌を評して「心幽玄に姿及びかたし」と評し、難波の春は夢なれやの歌の如きも幽玄體といひ、

をしなべて花の盛になりにけり山のはごとにかゝる白雲

の如きはうるはしくたけ高く見ゆといひ、

蝨夜ざむに秋のなるまゝによわるか聲の遠ざかりゆく

の如きは姿さび詞おかしくと評し

秋になれば雲井の影の榮ふるは月の桂に枝やさすらん

等の類は心有りて聞ゆの

色つゝむ野邊の霞のしたもえて心をそむる鶯の聲

等の類は艶なるなどの評言に徴し、やがてその嗣定家卿の和歌十體を想起せしめるものがあると

第一篇 俊成評傳

思ふ。また後京極殿自歌合百番の釋阿の判を見るに八十五齡の時の筆にかゝる。その釋教歌の判詞例として九十八番を引いて見る。

左 毗梨那波羅蜜

朝夕に三世の佛に仕ふれば心を洗ふ山川の水

右 禪波羅密

心をばこゝろの底におさめきて塵もうごかぬ床のうへかな

右塵も動かぬ床の上誠に然りと覺え侍るを、猶左の心を洗ふ山川の水、かの泉飛雨洗聲夢といへる詩の心を思ひ出でられて、文の上の心、姿詞もおかしく侍るにや。仍左勝と

可レ申哉侍らん

に於けるが如く、歌の美點をよく攫んである。釋阿の判に對し、攝政が

玉ならぬことばも君にみがゝれてとまらん代々の光とぞなる

と感謝の意を表してゐるのは一片の挨拶と見るべきであるまい。

慈鎮和尚自歌合は三たび天台座主に任ぜられた和尚の歌をその甥の後京極良經が建久の始まだ少納言であつた時二百首近くを撰び、これにその作七首を加へ、百番となしたもので、和尚が俊成に判を請うた時、俊成の歌も七首を請ひ、父後法性寺攝政の歌一首を加へ、日吉七社の寶前に奉つたもので、

大比叡 小比叡 聖眞子 八王子

客人 十禪師 三宮

各十五番づゝとなつてゐる。大比叡一番の判の始に一方では神事、一方では結縁の爲にこれが判者となつたことを述べ、和光同塵のあはれを蒙らうとした。而して詠歌に關する俊成の理念は聖眞子十五番の判の終に發表してある。

もとより詠歌といひて、たゞよみあげたるにも、打詠じたるにも、何となく艶にも幽玄にも聞ゆることのあるべし。よき歌になりぬれば、その詞姿の外に景氣のそひたることにや。例へば春の花のあたりに霞のたなびき、秋の月の前に鹿の聲を聞き、垣根の梅に春風の匂ひ、峯の紅

葉に時雨のうちそゞぎなどするやうなることの浮び添へるなり。

といひ幽玄餘情の體を主張してゐる。

以上判を加へたものは十九度、判詞の見えないもの建仁元年の影供歌合を除き、判詞のあるものが千七百六十三番の多きに上つてゐて、その中に作家の體驗、また傳統の引用、舊様の修正等の意見はそれ／＼に見られるのである。

## 七、俊成の理念とした歌論

俊成の和歌に對する理念は長秋詠藻を始めその他の作品を味讀しても推想することが出来るが和歌史の濫觴とも見るべき古來風體抄にはその輪廓をやゝ明瞭に概説してあるのを知る。茲には歌合の判詞に就きて、具象的並に主觀的敘説の兩方面に互り多少の考察を述べようと思ふ。この問題に關し、釘本久春氏は昭和十一年發行の國語と國文學誌上六七八の三號に互り、緻密な分析的方法により「判詞に現れたるその詩的表現の方法」と題し、俊成の歌論を心ゆくまで論破した意



見の發表がある。又冷泉爲臣氏は昭和十一年より十二年に互り、國の花誌上に俊成卿の研究と題し、同じく判詞を取扱ひ、十八度の歌合千七百六十三番の勝負理由分類表を作つてその統計を示したりして説述してゐられる。判詞は個々の組合の二首の優劣比較を試み斷案を下す文詞から成つてゐるもので、相互の美所缺點を明かにするのが主要となつてゐるから、俊成歌論の全貌を悉さないかも知れぬが、題も多種、作者も多數であるので、その理念の實際的理論的の傾向を窺ふには屈強な資料である。尤も俊成が判を下した十九種の歌合の中、永萬二年中宮亮重家朝臣家歌合から建仁二年九月水無瀬櫻宮十五番歌合との間には三十六年の隔りがある。この間に俊成の理念には少しも變移が無かつたといふに、自分はさうは信じない。多少の變易があると思ふ。俊成の歌論の中心をなすものは幽玄であると一般に見做されてゐる。釘本氏は、

俊成的幽玄はあはれである。(中略)より具體的に言ふならば、幽玄は俊成があはれなる姿、心として認識し且識別してゐるその他のあらゆる形式内容、即ち即ちやさしき、をかしき、えんなる、たけ高き、細き寂びたる「姿」「心」の總べてにわたつて存在し位置し得べき理念でな

第一篇 俊成評傳

ければならぬ。更に換言すれば、これら特殊なる形式内容を通じて貫いてその中に形成せられべき美であり、姿相でなければならぬ。しかるに私達は俊成の批評言の中を探る時、私達の理解が誤謬でないことを知るのである。

と詳に論じてある。管見によると、五十臺の評と七八十臺の評とは相違があると思ふ。

中宮亮重家朝臣家歌合、花二番

左

打ち寄するいそべの波の白ゆふは花ちる里のとほめなりけり

を評して「風體は幽玄調、義非<sub>ニ</sub>凡俗」といつてある。これは五十三歳の時の評である。

嘉應二年住吉社歌合、旅宿時雨二十五番

左

うちしぐれ物さびしかる芦の屋のこやの寢覺に都こひしも

を評して「ものさびしかると置き都戀しもなどいへる姿、既幽玄之境に入る」といつてある。

これは五十七歳の評である。

承安二年廣田社歌合、海上眺望、八番

右

漕ぎ出で、みをさ海原見渡せば雲井の岸にかゝる白雲  
を評して「みをさ海原など云へる姿幽玄の體に見え侍り」とあり、

同 述懐二十八番

右

葛城やすがの葉凌ぎ入りぬともうき名は猶や世にとまりなん

を評して「すがのは凌ぎなどいへる姿幽玄にこそ聞え侍れ」と云つてある。以上はいづれも體と  
か姿といふ語で示してある如く、表現形式から命名したもので、同歌合の海上眺望の二番

左

武庫の海をなぎたる朝に見渡せば眉も亂れぬ阿波の島山

俊成の理念とした歌論

第一篇 俊成評傳

を評して「詞をいたはらずしてまたさびたる姿一つの體に侍るめり。眉もみだれぬあはの島山」といへる、彼黛色迴臨蒼海上といひ、龍門翠黛眉相對など云へる詩思ひ出でられて幽玄にこそ見え侍れ」と云つてある。これも體をさしたるものか。然るに西行の御裳濯河歌合十八番の判には

心なき身にはあはれはしられけり 鳴立澤の秋の夕暮

の歌に對し「鳴立澤といへる心幽玄に姿及びかたし云々」と心の上はこの語をかけてある。慈鎮和尚自歌合聖眞子九番

左

冬がれの梢にあたる山風のまた吹くたびに雪のあまぎる

を評して「心詞幽玄の風體なり」と云つてある。これは建久の末年のもので八十を踰えての時の語である。これは幽玄を心の上にもかけてある。正治二年二月の御室撰歌合の四番

左

にほひ來る梅のあたりに吹風はつらきものからなつかしきかな

の評には「梅の匂ひ吹風はつらきものから、なつかしき詞も心も尤も實をかねて幽玄にこそ侍らめと仰せ下されしかば勝の字を附け侍りき」とある。守覺法親王の仰言とあるが、この場合には幽玄は風體ばかりでないことが明かである。また建仁元年八月の撰歌合、卅四番左深山曉月、右野月露涼の

左

有家朝臣

花をのみ惜みなれたるみよし野のこすゑにおつる有明の月

右

白露にあふきをおきつゝ草の原のおぼろ月夜も秋しまなさに

の評には「幽玄の事に思ひよりて侍れど、左うるはしく宜しき歌也とて爲「勝」とある。これは着想の上に及した例である。これは八十八歳の時の語である。同年千五百番歌合の卷四、春、二百七十一番

左

俊成の理念とした歌論

第一篇 俊成評傳

風吹けば花の白雲や、消えてよなく晴るゝみよし野の月

の評には「よなく晴るゝみよしのゝ月、秋の空のひとへに限なからんよりも艶に侍らんかしと面影見るやうにこそ覺え侍れ云々。但し歌の道よなく晴るゝ三吉野の月など幽玄に及びがたきさまにあらまほしく侍るなり」とある。これも想の上にもかけて見るべきであらう。以上の用例から考ふると、五十臺の頃のものには單に姿や風體の上に限つてゐたものが、七八十臺になると、心即ち内容の上にも及ぼしてゐることが明かである。

抑も幽玄といふ語が我が文献に見えたのは古今集序に始まる。即ち眞名序に「或事關<sub>ニ</sub>神異、或興入<sub>ニ</sub>幽玄<sub>ニ</sub>」とある。尋いで忠岑の十體には「此體詞雖<sub>ニ</sub>風流、義入<sub>ニ</sub>幽玄<sub>ニ</sub>と見え、作文大體には「此等誠幽玄體也」とある。平安朝の中期に見えてゐるところは以上のやうであるが、未だ文學論の基調をなすには至らなかつた。然るに平安朝末期に至りては餘情の意味と結合して和歌批判の基調とされるに至つた。俊成の師藤原基俊は歌合の判にこれを使用した。基俊は長承三年九月中宮亮顯輔家歌合の判にこの語を使用してゐる。即ち紅葉の二番

左

新中納言

見渡せばもみぢにけらし置霜に誰がすむ宿のつま梨の木ぞ

右

道經

くれなるの末つむ花にうすくこき霜や紅葉の色をそむらむ

に「左歌詞雖擬古質之體、義似通幽玄之境、右歌義實雖無曲折、言泉已凡流也、仍以右爲勝畢」と評してゐる。俊成が判詞にはこの語を用ゐるもの十六七首に上つてゐる。俊惠の歌林苑に於てもこの趣を傳へたものと見えて長明が無名抄には古體近體を論ずる條中幽玄調を説くことが頗る詳密である。

心と姿と詞と三つがよく整つてゐるのが最も優れた歌となすことは俊成も他の歌匠と異なるところはないが、すべてが太く強くことごとしいのを嫌つた。細くやさしくうるはしいのを好んだ。心即ち想は平懐なもの、めなれたもの、陳腐なもの、卑俗なもの、おどけたものを斥けた。別雷社歌合二十四番

俊成の理念とした歌論

第一篇 俊成評傳

右

備前

咲くと待ち散るとてなげく春はたゞ花に心をつくすなりけり

を評して、右の歌「心姿よろしくは侍るを、かやうの心の歌、つねの心なるにやあらむ」と心姿は整つてゐても平懐の故を以て負とした。中宮亮重家朝臣家歌合、花一番

左

をちかたの風に亂るゝ糸櫻我手にかけて見るよしもがな

を、「をちかたの糸櫻まことに思よりがたく珍しく見ゆ」と褒めてゐる。同月十三番

左

成仲

立ちかへり天の川波あらへばや流るゝ月の隈なかるらん

を評して、左歌なだらかには見ゆれど、天の川流るゝ月のななど云へること、常に云ひ流して古りにたる事にや」と評して、陳腐なるの故に負としてゐる。同歌合雪の十二番

右

生西



よのつねは雲の衣をこしにまく高間の山は雪ふりにけり

を評して、「右はいと珍しくこそよみ侍れ、但『よそにのみ見てや止みなん葛城や高間の山の峯の白雪』などのみこそ聞き習ひぬるを、これは雲の衣をこしにまくといへる、それよりかみ思ひやられて山の姿も宜しからずや聞ゆらん。かの眞金ふく吉備の中山帯にせるなど云ふやうなることのあるにや、よも故なくはあらじをえ見及ばぬことにて驚き思ふ給へることいと口惜し。されど腰に巻くとは猶姿もいかゞ」と云ひて、その卑俗を嫌つてゐる。

太いもの強いものにはあはれといふ感じが伴はない。俊成は六百番歌合に源氏物語を見ざらん歌詠みは遺恨のことなりと云つてあるのも物のあはれを十分に體得しない故に殊更に述べたものであらう。佳吉社歌合述懐十番

左

實 定

數ふれば八とせ經にけりあはれ我が沈みし事はきのふと思ふに

を評して、「たれ人の何とならんと侍ること侍らねど、たゞうち見る歌のおもて心姿いみじくあ

俊成の理念とした歌論

第一篇 俊成評傳

はれにも侍るかな。誠によろづのこと昨日今日と覺ゆるを、年月の過ぐるのみこそは侍るを、數ふれば八年へにけりあはれ我がといへる姿いと忍びがたくこそ見え侍れ」と云つて勝となしてゐる。これは自家の體驗なども手傳つて、格別な趣向はないが、物のあはれの感じを贅してゐる。

このあはれといふ心はやさしいもの、心細いもの、さびたる感じと相伴ふのが常である。住吉歌合二十番旅宿時雨

左

實 賴 卿

旅寝するいその苦屋の村しぐれあはれを波のうちそへてけり

右

敦 賴

もりもあへすまだきにぬるゝ袂かな梢しぐるゝ松のした臥し

このつがへの評。左、磯の苦屋の時雨にあはれをうち添ふらむ波の聲はげにあはれにこそ推し量られ侍り。云々、右、心姿またいとおかし。松の下臥あたらしきことなるを古くいひ習はしたらむやうに聞ゆらむとぞ思ひたまふれど、もりもあへす、まだきにぬるゝなど云へる、梢にさこそ

侍らめと心細く聞ゆ。よりに猶右の勝とすと心細きをよく述べた句を賞してゐる。同二十五番

左

うち時雨物さびしかる芦の屋のこやの寢覺に都こひしも

の如き、既に説いたやうに、「ものさびしかると置き、都戀ひしもなどいへる姿、既幽玄之境に入り宜しくこそ聞え侍れ」と評し、あはれとかさびしとか、さびなどの類は幽玄なる姿傾向をもつてゐることを具體的に示してゐるものと云つて善からう。

以上と反對の二三例に就きて考へて見るに、千五百番歌合二百三十八番

右

三吉野のたのむの雁の聲すなり花になごりの春のあけぼの

の評に、右みよしのやと置けるより心こはくて侍ながら猶花の名残のなど云へる心得がたきやうにや侍らんと云つて負としてある。俊成は第一句の五文字には特に注意してその可否を論じたものが多く、且何々やとや文字を用ゐた句を剛い句として斥けた場合が他にも存する。千五百番歌

俊成の理念とした歌論

第一篇 俊成評傳

合二百七番の判詞にも「すべて歌の初の五字はよく思ふべきものにこそ侍るめれ」と云つてある。  
同二百四番

右

嶺ごしに散りくる花をしるべにて恨みもあへぬ春の山風

を評して、「末句は宜しく侍るめるを初の五字やことごとくしく侍らん」と斥けてある。中宮亮重

家朝臣家歌合

左

子規しのだの森の忍びねはきちゆき行く我ぞまづは聞きける

の評には「信太森のしのび音など歌めきて聞ゆるに、きち行く我ぞとなのれる程やなだらかにしも聞えざらん」と云つて詞のこわきを好まなかつた。

前にも云へる如く、俊成は夙く風體は幽玄調、義非凡俗との判詞を用ゐてゐる。また屢々心めづらしくといひ、心姿おかしく、心詞優に、心姿うるはしくなどの評語を下してゐる。また姿だ

けありといひ、心高く、姿も高く、姿詞高く、また姿うるはしく、姿詞もえんに、或は妖艶になどの語も下したところもある。この中めづらしいといふのは想の上にも表現の上にも互ること、極めて重要なことであるが別に説明を要しない。おかしくといふのは着想なり表現なりに智的趣向の面白味を具するものを指す。例へば中宮亮重家朝臣家歌合月十番左顯昭の

夜もすがら行きちがひてやすみぬらむ心は空に月は心に

を判して、「心姿いとおかし。但夜もすがら行きちがはん程靜かならぬ心地やすらむ」云々と云つてある。趣向の面白いことは讀むものゝ首肯するところであるが、このおかしといふも、適度を躰えてはならぬ。よし躰えないにしても、珍しくあはれに優れたものに比べては劣るときめてゐる。建春門院北面歌合水鳥近馴の五番

左

左衛門督

こやの池の玉藻刈るおに見馴れてや鴛の毛衣たちもはなれぬ

右

源頼政朝臣

第一篇 俊成評傳

子を思ふ鳩のうき巢のゆられきて捨てじとすれや見がくれもせぬ

を判し、左歌心姿最おかしく見ゆる。云々。右歌に鳩の浮巢のゆられきてといへる、心詞わりなく求め出でゝいと珍しく見ゆるに、子を思ふといへる五文字ことわりとあはれに聞え侍りしかば右の勝とし終りぬ」と述べてゐる。特におかしくと案する時は俳諧になり易いので、それを警めた。優にといふことが屢々叫ばれてゐるのは上品に適正に作らしめることを示すものである。心のおかしみは姿・詞のおかしみより貴ばれたもので、詞句のおかしみは第二次的であらねばならぬ。さうして第二次的のものは古語による方が誤がなく、近代語にすぎると荒涼になり易い。どこまでもうるはしく若しくは清らであるべきである。うるはしくといふは端正であり、きよくといふは洗練された冲淡であると思はれる。廣田社歌合の社頭雪九番

左

左近衛中將實定

ありし秋の住の江に見し月の色をけふ神垣にうつす雪かな

右

登蓮法師

雪ふれば朱の玉垣おしなべてひまなくかくる白にぎてかな

を判じて、「左佳の江に見し月の色をけふ神垣にうつす雪かななど云へる、兩社の間、月と雪との色通へる心いとおかしく侍り。右朱の玉垣おしなべてと置き、ひまなくかゝるなど云へる詞つづき云ひ知りて、強く聞え侍り。左はおかしく、右はうるはしく、歌の姿相似すといへども彼是を擬ふるに尙持とす」といひて二者の間に優劣を附してゐない。これは勿論歌がらに由ることである。

また建春門院北面歌合關路落葉二番

左

前大納言實定卿

山おろしに浦つたひする紅葉かないかゞはすべき須磨の關守

右

備中權守重家卿

紅葉する富士の山風吹きけらし錦をたゞむ波の關守

を判じて、左歌、浦づたひすると置き、須磨の關守と云へる心、最おかしく侍るかな、山おろし

俊成の理念とした歌論

第一篇 俊成評傳

と云へる五文字も特によく置かれたりと見え侍れば、右の歌も姿詞きよげに見ゆる云々とおかしくときよげとを區別してゐる。而してきよげとあるは一面あてやかに聞える。俊成はそれを艶といつて區別してゐる。以上の如きうるはしきもの、きよきものは多く雅正な古語の使用によりて得られ易い。優美でない詞俗に近い詞はうるはしくもきよくもなり得ない、むしろそれを打壞すものである。御室撰歌合三十六番

左

秋の夜は月と草葉の白露とひかりくらべにいづれかたまし

顯 昭

右

秋といへばいつしか夜こそ長くなれ寝ぬにあけしは昨日と思ふに

を評して、光くらべも優の詞ならず、長くなれも俗に近しいひ、左右共にたはぶれ歌の姿であると斥けてゐる。特に詞の碎けたのを難じてゐる。けれどもまた古語の中萬葉のこわくしいのは嫌つた。中宮亮重家朝臣歌合雪の八番



右

ねぬる夜はむべきえけらし朝戸明て見ればみ雪の庭に満ちたる

を評して、「右歌偏效萬葉之歌風。頗背中古之妙體也」と云つてゐる。六百番歌合五番の判詞にも「萬葉集より出でたりとも歌合の時は無<sub>三</sub>左右<sub>二</sub>證據とすべしとも覺え侍らず、萬葉集は優なる事を取るべきなりとぞ故人申し侍りし。是彼の集聞にくき歌も多かるが故なり」と述べてゐる。歌の本體は古今集を範とすべきことを古來風體抄にも説いてゐる。ふるの中道を正しいとして俊成は萬葉の詞に對して、さういふ見解を懷くのは當然の事である。

このきよくといふことは艶といふことと關係がある。華麗をつくせば艶となり、表にそれを除き、而も品のあるやうにすると清くとなる。廣田社歌合社頭雪三番

左

太皇太后宮小侍從

解くる間も積るもえこそ見分かね豊みてぐらにかゝる白雪

右

權大納言實房

俊成の理念とした歌論

第一篇 俊成評傳

山藍もてすれる衣にふる雪はかざす櫻のちるかとぞ見る

を判して、左白妙のみてぐらに雪をかけて解くるも積るも分がたからむ、いとおかしく侍を、右の摺れる衣に雪をおひて、かざしの花にまがへられる心姿、いと珍しく艶に侍る上に左にはさきにも侍る句の初の文字も毛を吹くにやと見え侍れば以<sup>レ</sup>右爲<sup>レ</sup>勝と艶を重んじてゐる。また六百番  
歌合戀四の三十番

左

見し人のねくたれ髪の面影に涙かきやる小夜の手枕

女房

右

見せばやな夜床につもる塵をのみあらましごとに拂ふけしきを

を判じて、「左の小夜の手枕、右の夜床の鹿、共に優には侍るにとりても、涙かきやる小夜の手枕殊に艶に聞え侍り、左の勝と申すべくや」としてゐる。また水無瀬殿戀十五首歌合、鞆中戀三十三番の

左

左馬頭親定（後鳥羽院の假名）

君ももしながめやすらむ旅衣朝立つ月を空にまがへて

を判じて、「朝立つ月を空にまがへてと侍る。心姿源氏物語の花の宴の歌など思ひ出でられて、いみじく艶に見え侍り」として勝を附してゐる。彼の實房の山藍の歌は華麗を極めたもので、色彩の美が豊かであり、小夜の手枕の歌はなまめかしい光景を描いたもので、情緒の深かみがあり、朝立つ月の詠は幽艶な境地を敘して、餘情の綿々たるものがある。また千五百番歌合第三春二百十八番右その女の詠める

影きよき花のところは有明の月もえならず澄める空かな

の判には女性の見る艶とゆるしてゐる。これらは清く美しい艶である。

俊成が年ふけて後の判には二三の妖艶の評語を用ゐたものがある。民部卿家歌合曉月十八番の左保季の歌

あくるまで露のやどりや惜しからむ淺茅がすゑに残る月影

俊成の理念とした歌論

第一篇 俊成評傳

を評して、「妖艶荆臺の夢に入りし姿に異ならざるにや」と云ひ勝としてゐる。身にしみ入るやうな餘情のある作であつて、作品の上から見ると幽艶また艶と異なるところがないやうに思はれる。

俊成の評語に「たけ」といふ語が見える。例へば六百番歌合春九番餘寒右顯昭の作に

しがらきの外山は雪も消えにしを冬を残すや谷の夕風

の判に、「しがらきなど云へるより上句はたけありて聞え侍る云々」、これはしめやかとかなまめかしいなどゝ違ひ、すぐくと立つてる喬木のそのの如く、け高いとか、がつちりした意を含めたものと思はれる。千五百番歌合には「心高く」とか、「風體高く」とか、「姿も高く」、「姿詞高く」などの類と同じもので、これも晩年の歌判に多く見るのである。御裳濯川歌合三番

左

おしなべて花の盛りになりにけり山のはごとにかゝる白雲

を評して「うるはしく長高く見ゆ」と贅嘆の意を惜まずにゐる。たけは端正と交渉がある。繊細な感じよりは壯大の感を有するものが多い。千五百番の春四の二百二十八番右忠良卿の作

山おろしに櫻流るゝ吉野川はやくも春のくれてゆくかな

また同二百三十四番

右

春風は吹きにけらしな吉野山雲に波たつ夕暮のそら

の類いづれも姿風體の高きを稱してゐる。これは萬葉集のをゝしい調から導かれたもので、俊成の常に好んだあはれとかしめやかななどの作と對蹠的地位に立つものと謂つて然るべきである。

俊成の歌に關する理念を幽玄の一體に攝する説が近來やうやく多くなつたが、前に擧げた民部卿家歌合の判の結語に、よみもあげうちも詠めたるに、艶にもおかしくも聞ゆる姿があるといひ、慈鎮和尚の自歌合聖眞子十五番の判の結語には、「たゞよみもあげたるにも、打詠じたるにも何となく艶にも幽玄にも聞ゆることのあるべし」と云ひ、幽玄の外に艶を對立させ、艶におかしくを對立させてゐる。それらの語の内容に廣狹の別があるとしても同一視はしてゐなかつた。尤も幽玄及餘情に重點を置いてゐたことは疑ふべくもなく、前に擧げた聖眞子十五番の結語のつゞ

俊成の理念とした歌論

第一篇 俊成評傳

きに、「よき歌になりぬれば、その詞姿の外に景氣のそひたることにや、云々と述べてゐるので分る。新古今集以前に於て俊成のかくの如き理念が一般に擴つてゐた。鴨長明が無名抄に

詮はたゞ言葉に現れぬ餘情、姿に見えぬ氣色なるべし。心にも理り深く、言葉にも艶極りぬれば、これらの徳おのづから備るところ、たとへば秋の夕暮の空の景色は色もなく、聲もなし。

いづこにいかなる故あるべしとも覺えねど、すゞろに涙こぼるゝ如し。又曰く一言葉に多くのことわりをこめ、現さずして深き志を盡し、見ぬ世の事を佛にうかべ、いやしきを語りて優をあらはし、愚かなる妙にてたへなることわりをきはむ云々と一脈相通するものがある。

以上所述する所を要約して見ると、俊成は心と姿と詞との三つに常に留意してゐた。この三者は一體となつて歌のよきも悪しき自然にきまるのであるが、分析してゆくと、心といふには謡ふその物象とそれを如何に扱つてあるか、反言すれば、歌材と着想とをこめ、姿はまた風體ともいひ、主として表現形式を指してゐるが、詞の連續を合せて考へ、詞には平懐なもの即たゞ詞を喜

ばず、卑俗な詞を斥け、古語のことく、しいのを嫌ひ、近代のあまり飛躍しすぎたものも捨て、一に雅正なものを選び不庶幾詞を指摘し、物のあはれに根ざしてやさしいもの、しめやかに心細いもの、さびたるものを希ひ、また興味のあるもの、珍しいもの、えんなるもの、うるはしいもの、きよいもの、けだかいもの、餘情あるものを理念したことが明かである。これを圖表となし漢語を宛てると次の如くなる。

	やさしい	優美
あはれの姿	しめやかに心細い	繊細
	さびたる	閑寂
	おかしい	興趣
	珍らしい	清新
	えんに	典麗
趣のある姿	うるはしい	端嚴

俊成の理念とした歌論

第一篇 俊成評傳

きよい	清淡
け高い	高雅
奥ゆかしい	幽玄

以上の中、幽玄は最も高い位に置かれたと謂ふべきである。

八、古來風體抄に就て

俊成の和歌に對する理念は古來風體抄に最もよくあらはれてゐる。この書五卷は後鳥羽院の皇女式子内親王の需により、建久八年八十四歳の時に稿を起し、五年の星霜を重ね、建仁元年五月に上つたもので、思考の老熟した時代の作である。

俊成は和歌の淵源は古く、家々に書留めてある歌式や髓腦、歌枕の類はあまたあるが、歌の姿詞の善惡を明かにし、歌道の本義を審かにしたものは殆ど少いのを慨し、章安大師の天台止觀にまづ佛の法を傳へ給へる次第をあかして、法の道の傳はれることを人に知らしめたのに倣ひ、萬



葉以降千載までの風體を明かにしようと試みた。

萬葉よりはじめて、中古、古今後撰拾遺しも後拾遺よりこなたさまの歌の時世の移りゆくに従ひて、姿も詞も改まりゆく有様を、代々の撰集に見えたるをはしくしるし申すべきなり

といつて、諸撰集に於ける歌風を論じ、秀歌をぬき短評を加へた。これは實に和歌史の嚆矢とも謂ふべきであらう。

萬葉集につきては後拾遺の序に「この集の心は易きことをば隠し、難きことをあらはせり。よりに迷へること多し」とあるを難じ、時世の移るにつれて歌の姿及詞は變つてゆくもので、當時の人の他を惑はさうと考へてしたことではなく、唯書き様の異があるばかりだとし、心もおかしく言葉遣も好もしく見える歌が多い。大伴卿の讚酒の歌、卷十六の戲咲歌などは學ぶべきにあらずとし歌聖柿本人麿の歌を評して、「その時の歌の姿心に叶へるのみにあらず、時世は様々改まり、人の心も歌の姿も移り變るものなれど、彼の人の歌どもは上古中古今の末の代までをかゝみけるにや、昔の世にも末の世にも皆叶ひてなむ見ゆめる」と賛歎し、百九十五首の多數を抜いてゐる。

古來風體抄に就て

## 第一篇 後成評傳

次に古今集に就きては「この集の比ほひよりぞ歌のよき悪しきも特に撰び定められたれば、歌の本體には古今集を仰ぎ信すべき事なりといひ、次に後撰集はふるき歌を旨とし、贈答などに亂れたるところがあるといひ、拾遺集よりは拾遺抄を揚げ、「近代の人の歌よむ風體、多くはたゞ拾遺抄の歌を希ふなるべし」といひ、後拾遺集は梨壺の五人の歌を旨とし、その後公任卿以下多くの歌人の輩出した時代なれば面白く聞きちかく物に心えたる様の歌多きに、撰者の所好より、所々地歌を挿入した爲に長けの下つた作が多いと指摘し、金葉集は撰者が少しく時のはなを折る心の進んだ爲か如何はしい歌が多い。詞華集には玄々集の歌を多く入れた爲に長けある歌が多いが、また地の歌は、皆俳諧歌になつてゐるといひ、千載集は歌を主として人を第二に置いたと述べてある。

尙古今集に五七の連続して末を五七七ととちめたものを短歌と題して以來、六條家などにてはこれにあやしき説明を加へたのを否とし、萬葉を引いてこれを是正し、また歌式に就きては、濱成式以下諸式が出て種々の病犯の制が出来たが、同事をかへして二度詠むことゝ又同じ心二所詠む

事は去るべきもその他には拘る要なしといひ、濱成式喜撰式により七病四病八病を擧げてあるが、それらは名ばかりを記すのみだと附け加へてある。また長歌短歌に韻字のことを説いてあるのは見苦しい事で、これは詩の病など申すことになすらへて式を作つた、餘計のことであると評してある。これらは訓釋考據を旨とする六條家に對する反駁と見るべきであると同時に、鑑賞批評の立場より見た考説である。

俊成は源氏をよみて物のあはれを知り、佛道に入りて、和歌の深き道は天台の空假中三諦に類すとなす。随つて藤原通俊が後拾遺の序にことばはぬひものゝ如くと云つた説を斥け、「必ずしもぬひものゝ如くならねども、歌はよみあげもし、詠じもしたるに、何となく艶にもあはれにも聞ゆることのあるなるべし」と主張してゐる。こは散文と異り、律動を有すべきものにて、この律動は花やかに人をひき付くることもあるべく、しめやかに人をして沈潜せしめることもあるべく、表現によりその差異があるといつても、藝術至上の見地から音律的のものと思惟した。この思考は近代的の思潮に合致すべきものと評價せらるべきであらう。

九、萬葉時代考と和歌肝要

(一) 萬葉時代考

萬葉時代考は一に萬葉時代事とも萬時考ともいふ。後京極攝政の間に對し答へた消息で、六條家の顯昭法橋の萬葉時代難事に對し、大同帝御代御撰説を排撃し、聖武天皇の御代に撰まれたものとした。大伴家持その他の公卿の敘任などを引いて説を立てたところ考據があると謂ふべきである。次にその全文を擧げる。

○

萬葉集時代事もとよりひと方にさだめがたくぞろむじあひたる事に候。

清和天皇御時文室有季にはれ候時は

神無月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふることぞこれ

と申て候へば、ならのみかどとはきこえ候。ならのみかどはうちまかせては、この京へ宮こう

つしてのち、さらに奈良に わが身許りかへりておはしましたるみかど、 桓武の御子嵯峨の御兄のみかどを御名には 平城天皇と申。たゞならの都におはしましたる六七代のみかどをば各御名ありてならのみかどと申さす。

元明、元正、聖武、孝謙、淡路、光仁也

古今の序には

いにしへよりかくつたはるうちにもならの御時よりぞひろまりにける。かの御世や歌の心をし  
ろしめしたりけむ。かの御時におほきみつのくらゐかきのもとの人麿なん歌のひじりなりける。  
これはきみも人も身をあはせたりといふなるべし。秋のゆふべ龍田河にながるゝ紅葉をばみか  
どの御目ににしきと見たまひ、春のあした吉野の山の櫻は人丸が心には雲かとのみなんおぼえ  
ける。又山邊赤人といふ人ありけり。うたにあやしくたへなりけり。この人々をおきてまたすぐ  
れたる人も吳竹のよゝにきこえずかた糸のよりくゝにたえずぞありける。かゝりけるさきの歌  
をあはせて萬葉集となづけられたりける。かの御時よりこのかた年はももとせあまり世はとつ

第一篇 俊成評傳、

ぎになんなりにける。

とかきて、代をかぞふれば平城より醍醐天皇まで十代、年をかぞふれば平城天皇のはじめ、大同元年より延喜五年にいたるまで百年。

世つぎにはならのみかどの御時左大臣橘諸兄うけたまはりて萬葉集をえらぶと申て候。

顯昭法師はこの世は十つぎになんなりにけると申す古今の序をつよくまもりて、大同のみかどの御撰と申。

さなき人はおほくさきのならの御代にえられたりと申は、たゞ世は十つぎのことば許りこそ大同にあたりたれ。すべて人丸あか人を召しつかふよりはじめてなにごともさきのならの御代にあたりて見ゆれば大同にあらずと申あひてくめり。

この説につく人又おなじ序をひきてもとせあまりとかけるに、もくとせにみつとしなれば、け脱か一定さきなりと申人このせちにつきて、人丸赤人をめしつかふ御世に萬葉集をえらぶと申すはむげのひが事也。

萬葉集には時代あらはに見えて候。人丸あか人はふるき人になりて家の集を見てその歌を見る、當時ある人にあらば 聖武天皇をば太上天皇と申、孝謙天皇をば、天皇と申たり。中納言家持は二十卷前太上天皇は元正御事也。光仁御時寶龜十一年二月一日參議になる。桓武延暦二年七月十三日中納言になりておなじ四年八月にうせて候へば、大同の人その歌をかきて中納言とかき候べし。

萬葉集には内舍人より越中守式部少輔左中辨など申候て次第になりのぼりたる上達部よりさきのつかさをやうくにかきて候。又さなき人々も光仁桓武の御代の公卿をばおほく殿上人よりしものつかさに書きて候へば、あらはに聖武天皇位をおりさせ給て、孝謙天皇くらゐにおはしますころの集とは見えて候へども、たれうけたまはりて一定えりたりとも、いづれのみかどのおほせ事にてありともたしかにかきたる物はなにもみえ候はず。

諸兄大臣は天平勝寶八年聖武天皇のうせさせたまふとし致仕、つぎの年うせて候へば人のほどまことにうけたまはりてえらんもあたりたる人に候へども、ものなどにうるはしくかきたる事は、

第一篇 俊成評傳

見及び候はず。人のつかさ世のありさまにてあらはに聖武御時のことゝは見え候へども、さまざまに論じいさかひ申あひて候。

やすくと人のしりたることにていらぬカば也。むかしのことはなにごとにもかすかにたしかならで、人の心はしなやかに心にくゝ候へば、ものをあながちにあてかたすること候はず、かきつくる事も申さば、しどけなきことおほく申ちらして候を、世のするにはいかにせんと、しらぬ事をもしりがほに、見さためぬことをもきるやうに申あひ候へば、きくゝも又おこがましくもなり、これよりすぎてたしかなる説はたれもえ申候はじとおぼえ候。

この一卷は自筆本九條家に傳へてあるといふ。

以上の如く所説穩健にして強解しないところが貴い。

(二) 和歌肝要

俊成の歌學書の一つとして和歌肝要を擧げるものがある。古語深秘抄に收めてあつて、詠歌法



と歌體と歌病とを説いてある。歌體は長歌・短歌・旋頭歌・混本歌・廻文・隱題を説き、歌病は四病八病を擧げ、詠歌法に關しては「詞をば古きを求め、風情は新しきを尋ぬべきもの」とか、「歌は人さまに従ひて詠みかふべきものなり。兒と女との歌はあまりに強きもはしたなし。表をなだらかにかざりよみて、下にさすが故をあらはすべきなり。僧俗の歌は胸腰裾をつゞけよみて上下をなりあはせて、而も姿をたをやかに詠むべきなり」など説いてある。歌體歌病などの條は俊賴秘抄などに據つたものと見え、啓蒙的のものである。末に

此書和歌肝心也。納<sub>レ</sub>箱底<sub>レ</sub>輒不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>閱<sub>レ</sub>之。非<sub>レ</sub>器量之仁<sub>レ</sub>者、莫<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>他見<sub>レ</sub>、縱亦雖<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>器量<sub>レ</sub>、撰<sub>レ</sub>年齡之多少<sub>レ</sub>、可<sub>レ</sub>授<sub>レ</sub>之。更<sub>不<sub>レ</sub>駭<sub>カ</sub></sub>可<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>閨之外<sub>レ</sub>而已

建保二年三月 日

歌林末學隱士 在判

の奥書、竝に理達が永仁四年十一月廿四日良瑜に與へる意の奥書があり、群書一覽などにも俊成の作としてあるが、如何であらう。建保二年といへば俊成歿後十年を経てゐる。歌林末學隱士といふは誰のことか、この奥書もいかゞであらう。古今集に長歌のことを短歌と云つてある説に基

第一篇 俊成評傳

づいて、「長歌は三十一字の歌なり。短歌はすゞろに句あまれる歌なり」といふ説を守つてゐる點なども御子左家の歌學ではない。これを俊成の作とするは蓋し誤であらう。

一〇、古今和歌集定本

京極中納言定家卿が老來諸本の考勘に力を竭し、歌壇學界に多大の貢獻をなしたことは世のよく知るところであつて、中にも古今集の定本の如きは堂上家の金科玉條のやうに扱はれ來つたことは今更論するまでもない。而もその素をなしたのは實に慈父俊成卿の努力によるのである。清輔及顯昭の註した古今註祕抄に密勘を加へた所謂顯注密勘を繕いて見ると、家本に據つていかに六條家の説を破したかを知ることが出来る。今二三の例を引いてこれを證して見よう。

卷七祝の部

しほの山さしでの磯に鳴く衛君がみちよを八千世とぞなく

の條に六條家の説を擧げ、次に家本にはすむ千鳥とぞかきて侍。これも兩説あらば鳴字二あらん

よりはすむを可レ用敷といひ、卷八離別の部の

夕ぐれのまがきは山とみえぬ哉よるはこえじとやどりとるべく

の歌の下には家本まがきは山と見えなむを用。但みえぬかな深心不レ違と注してある。また卷二  
春下

櫻花ちくさながらにあだなれど誰かは春を恨はてたる

の歌の條に家本にはさく花はとかきたるうへは不レ及三不審一。なにの證本をももちひず、家説はこ  
とはりのかなひ歌の聞よき説を執傳る也。但しかの崇徳院御本ときこゆるにも、墨はさく花と書  
て朱にさくら花とついたり。朱は僻事敷と誌してある。また卷一春上

春たてば花とや見えむ白雪のかゝれる枝に鶯ぞ鳴

の下には六條家のみえむみらん兩説を擧げた後、先人多書寫本花とや見らんと書てえの字をけた  
れて侍き云々など家本を擧げて立説するところが多く、父の感化教訓のいかに多かつたかを察知  
することが出来ると思ふ。尙その家本に就いては承久三年三月廿一日の跋文中に

第一篇 俊成評傳

抑崇徳院に貫之自筆本と申古今侍ける。教長卿亡父清輔朝臣各申うけて書うつしけるを、宰相は眞名假名の字をも一字をたがへず、そのつかへるもんじをかゝれ侍けり。これはたゞ眞名は眞名、假名は假名に書寫。但此本當時所見不審甚多歟。難信用おぼえしかば、先年前金吾の説を覺て書たりしかば、本之説をうしなはず、これ此取<sub>レ</sub>要て我家之證とすと申されしをむかし聞侍りし云々

と云つてある。この言説が誤が無いとしたならば、定家の古今集定本に關しては父俊成卿に負ふところが頗る多かつたことを知るべきである。

## 第二篇 俊成の子品と評釋

### 一、長秋詠藻と長秋草

長秋詠藻は俊成の歌集である。皇后宮を漢名に長秋宮といふより、その官名を取つて集の名となしたことは云ふまでもない。俊成は嘉應二年後白河天皇の皇后宮の冊立あらせられるや宮の大  
夫となり、在官三年、承安二年皇后宮の皇太宮とならせられるや、引續いて皇太后宮大夫に任せ  
られた點から考へて、集の大凡の年代を察することが出来る。併し長秋詠藻は異本があつて、自  
撰と後の追加とがあり、細かな検討を要する。

長秋詠藻と長秋草

第二篇 俊成作品と評釋

流布本は六家集本に屬し、上中下三卷より成り、上卷には久安百首及保延六年の述懷百首を收め、中卷には四季賀戀の六部を立て短歌を列ね、下卷には雜歌、釋教歌、神社歌と部類し、次に右大臣家百首、千五百番歌合之百首、次に文治六年女御入内御屏風十二帖の歌が加へてある。寛文の版本は上中を一巻、下を一巻としてある。

寫本には圖書寮藏定家自筆模寫本、同桂宮舊藏本、内閣文庫藏昌平阪學問所舊藏本、帝國圖書館藏本、彰考館藏俊成家集等がある。此等諸本を比較して見ると原本と増補本との關係を知ることが出来ると思ふ。

一 圖書寮藏定家自筆模寫本

用紙は鳥の子、胡蝶裝、表紙雲形、縦五寸六分、横五寸八分、一冊本、中を上中下に分けてある。定家卿自筆本といへど、委しく云へば卿と、嫡女民部卿局の兩筆本にて、元和七年小春中旬の書寫にかゝる。流布本に比するに、千五百番歌合の百首以下は無く、下卷神社歌の最後の歌の次に一面の餘白を置き、

此三卷治承二年夏依仁和尚召、所被書進也。件草近年依貴所召進覽、未返給之間、爲備忘更申請竹園御本、令書留之、以件本又書之。

寛喜元年四月廿二日

花押(定家卿)

の奥書がある。これは最も據とすべきもので、治承二年仁和寺守覺法親王の仰によりて草を立て、三卷となし進献した。それが原形なのである。最もこの本にはその後右大臣家百首が添つてゐるが、その百首は治承四年の作であるから、俊成の進献本には入る譯はないが、六十六歳圓熟時代のものであるから、治承四年から、奥書に見える寛喜元年までの間に追加されたに相違あるまいと思ふ。

## 二 内閣文庫藏 一本

楮紙胡蝶装、表紙は紺色紙形、縦七寸一分、横五寸二分、前本系統のもので、寛喜元年の京極黄門寫の奥書の外、次の如き跋文がある。

本云、此草紙皇太后宮太夫人道俊成卿歌也。始は京極の中納言定家、さて中程女房手にてか、

長秋詠藻と長秋草

第二篇 俊成作品と評釋

れたるは大夫人道孫中納言入道嫡女民部卿典侍ときこえし人の手也

先師黃門爲相

によりて前書の兩筆を裏附けたものと云へる。尙この書には右大臣百首の後に

此百首可爲別帖歟、自然依<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>餘枚、後年京極黃門書加<sub>レ</sub>之給歟。備<sub>ニ</sub>彼奥書、故<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>愚推<sub>レ</sub>注<sub>レ</sub>之可<sub>レ</sub>正云々、彼本不<sub>レ</sub>及<sub>ニ</sub>愚意<sub>一</sub>哉、不審所也、雖<sub>レ</sub>然書寫<sub>レ</sub>之了

と冷泉家系統の人が後半の奥書を加へてある。この右大臣家百首を別帖となすべきかとあるのが後に加へた一つの證ともなる。松田武夫氏藏傳爲相筆本はまだ矚目しないが、神社歌で了つてゐて、右大臣家百首以下の歌は全くないといふ。古形の如何様であつたかゞほど推定される。

三 帝國圖書館藏寶密法師筆本

袋綴の冊子本で、縦八寸七分横七寸餘、不忍文庫及溫故堂文庫の舊藏印がある。神社歌の終に寛喜本の定家の奥書があり、次に右大臣家百首があつて、千五百番歌合の百首がなくて、以下流布本と同じく、末に「于時應永卅年六月下旬比以<sub>ニ</sub>仁和寺常光院之本<sub>一</sub>書<sub>レ</sub>之」の奥書がある。靜



嘉堂文庫本も同系で、千五百番歌合之百首を缺いてゐる。最も右大臣家百首の次に「以下蟲食之間不<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>之」ホ<sub>レ</sub>、として半丁の餘白を残してある。これは千五百番歌合之百首全部が虫蝕であつたか、唯半丁だけ虫蝕であつたかは速断は出来ないが、恐らくは千五百番歌合の百首は應永末年頃までの家集には入つてゐなかつたと考へられる。

#### 四 圖書寮桂宮舊藏本

楮紙袋綴の冊子本、縦八寸七分五厘、横六寸八分。神社歌の終に四行明けてあるが、寛喜四年の奥書がなく、右大臣家百首の次に六行の間隙を置いて次に千五百番歌合之百首がある。末に  
此長秋詠藻今度加<sub>ニ</sub>書寫校合<sub>一</sub>畢、雖<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>夢庵老人之六家抄<sub>一</sub>、以<sub>ニ</sub>本集爲<sub>ニ</sub>所望<sub>一</sub>之間、如<sub>レ</sub>斯、殊於<sub>ニ</sub>此草<sub>一</sub>者雖<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>所<sub>一</sub>持<sub>レ</sub>之、可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>一具<sub>一</sub>之故、新調之者也。

慶長三年孟冬初三

丹山隱士玄旨

慶長十九林鐘七一校了

の奥書がある。流布本はこれらの系の本を底としたものである。内閣文庫藏昌平阪學問所舊藏本

もこの幽齋本系統のものである。

### 五 彰考館藏俊成家集

袋綴の一本で延寶六年の書寫。その後半は圖書寮藏長秋草と同本である。始には部を春、夏、秋、冬、賀、雜の七つに分け、大體長秋詠藻所載の歌を分類してあるが、千五百番歌合の百首は全く取らず、久安百首も六十首、述懷百首も四十一首しか取つてない。釋教歌は久安百首並に右大臣家百首中のもも除き、康治比の法華二十八品和歌も入れてない。次に五社百首を收め、奥書なども加へてある。尙末には哀傷に屬する詞書のある歌三十餘首を擧げてある。いづれも流布本長秋詠藻に見えないものばかりを取つてある。奥書が四つありて、第一には

此二帖以ニ作者目筆之本一令ニ書一寫ニ了、尤可レ爲ニ證本ニ哉。

藤原爲秀

とある。冷泉家の傳本と見えるが。此二帖とはいづれを意味するか。第二には

以ニ右奥書本一、件本者實隆朝臣所持本、鳥子四半、小双紙、歌三行、仰ニ梶井法親王維人任智上座ニ不レ違ニ一字ニ令ニ書一寫レ之、數度校合卒。

于時文明九年十二月廿六日 茶千丸

とある。茶千丸は後柏原天皇の御幼名か、梶井宮法親王家の任智上座に御仰があつて寫さしめられ校合遊ばしたものと見える。第三に

右奥書之本官庫有之申出、件御本書寫校合訖、

慶安二曆中秋下旬

とあり、第四には

延寶戊午歲以<sub>三</sub>林泉本<sub>ニ</sub>寫<sub>レ</sub>之、 洛陽詹寫之

とある。義公側近の歌人藤原言員などが京都にて御本を寫したもので、傳統が分明であるが、冷泉大納言爲秀の跋を疑ないものとするならば、俊成は長秋詠藻の撰後第二次の撰をなしたのがこの書といふことになる。長秋詠藻は六十五歳の時の撰、俊成歌集は千五百番歌合の百首を採らな  
い點から云へば、建仁元年以前となる。假に建仁元年とすれば八十八歳の時の撰となる譯である。流布本に收めてない作を相當多く入れた點から考へてこの集の再檢討をなすの要がある。

長秋詠藻と長秋草

## 六 續長秋詠藻

彰考館に一本がある。長秋詠藻に収めてない歌を集めたもので、水藩で撰んだものか、それとも京紳の手になつたものか。水藩の歌人藤原言員が寛永十二年四月八十歳で清書した本を翌年藤原政繩が寫し、元祿七年更に謄寫したものである。

## 七 圖書本長秋草

鳥の子、胡蝶裝、表紙は帛、梅から草散し模様一面、縦四寸三分五厘、横四寸六分、鳥の子は青、黄、紅、樺四色の染色紙、最初一枚表は何も書かず、裏に

かすが山たにのまつとはくちぬとも

と上句だけあり、次に五社百首と題し、二枚目の表裏には藤を詠める歌二首、三枚目には不遇戀以下祝の

四方の海のどかなれとぞ住吉のつもり  
の浦に跡をたれけん

に至る百四十五首を三十四枚に記し、次にこれよりおくはみぐるしちらさるまじくとある。こ

の一行によりて釋阿の閲したものと推せられる。尙その次に

此五社百首去文治六年<sup>建久元年</sup>三月朔所<sup>建久元年</sup>之清書<sup>建久元年</sup>也。日吉百首同三月朔參社之時令<sup>建久元年</sup>進覽了。殘各

相待便宜<sup>建久元年</sup>之間、伊勢神宮權禰宜荒木田氏良不慮之處同六月廿五日入來、仍宮悅令<sup>建久元年</sup>付進了。其後無音之間、建久二年九月十一日件氏良又入來、有<sup>建久元年</sup>示事<sup>建久元年</sup>者、仍即相詢之處以<sup>建久元年</sup>一紙夢想記<sup>建久元年</sup>示<sup>建久元年</sup>之、去年建久元年七月廿日件百首與<sup>建久元年</sup>一禰宜成良<sup>建久元年</sup>相議持<sup>建久元年</sup>參御寶前<sup>建久元年</sup>、午刻於<sup>建久元年</sup>寶前<sup>建久元年</sup>再拜讀<sup>建久元年</sup>之讀<sup>建久元年</sup>、奉<sup>建久元年</sup>納於<sup>建久元年</sup>禰宜宿館<sup>建久元年</sup>、(是於<sup>建久元年</sup>正殿<sup>建久元年</sup>者、非<sup>建久元年</sup>勅定<sup>建久元年</sup>者無<sup>建久元年</sup>奉聞<sup>建久元年</sup>之例<sup>建久元年</sup>之故也)、其後同年八月廿五日夜夢に氏良參<sup>建久元年</sup>五條天社<sup>建久元年</sup>候處、南面波入道令<sup>建久元年</sup>出合<sup>建久元年</sup>、布衣烏帽子ヲ着云々、又座上爾長老入御座波、入道座下硯宮有リ。爰長老人命<sup>建久元年</sup>氏良<sup>建久元年</sup>天曰久、只看ル明月之影ト彼御烏帽子爾可<sup>建久元年</sup>書志<sup>建久元年</sup>者、氏良奉<sup>建久元年</sup>レ彼仰<sup>建久元年</sup>ニ染筆<sup>建久元年</sup>天入道烏帽子ノ額たれたる中爾只看明月のかけ此定爾書之云々、此靈夢撰<sup>建久元年</sup>良辰<sup>建久元年</sup>語<sup>建久元年</sup>祠官<sup>建久元年</sup>之處、百首詠靈感揭焉之由、各所<sup>建久元年</sup>欣仰<sup>建久元年</sup>之云々、聞<sup>建久元年</sup>此事<sup>建久元年</sup>内心詠云あきらけき月みる人としなしけりこゝろはれてぞ世々をかきぬん子孫長可<sup>建久元年</sup>爲<sup>建久元年</sup>奉公<sup>建久元年</sup>歡慶之人象也。仍註之權禰宜氏良記八奉納宮底了

第二篇 俊成の作品と評釋

とある。五社百首は文治六年三月朔に完成しまづ同月晦に日吉社に奉り、七月二十日に大神宮に納めたことが明かである。大神宮には禰宜氏良の夢の告のことが物語的に記されてある。次に第二の奥書と見るべき一行と歌二首が

先人任<sub>ニ</sub>參議<sub>ニ</sub>之後註<sub>レ</sub>之、

おいらくの月にすみてはよとせへぬへだてし道の雲ははれねど

みてはるゝあまてる月のかげなればのちの世かけて我が身へだつな

の如く誌されてある。次に第三の奥書と見るべきものが

代々集目六第三大納言

先祖大納言長忠相續爲家

わかの浦にかすならぬ身のなにとしてむかしにかへる名をのこすらん

載<sub>レ</sub>之、非<sub>ニ</sub>神慮<sub>ニ</sub>者争可<sub>レ</sub>然哉、

是祖父春之草註、載<sub>レ</sub>夢記之符合也、

正元々年八月一日注レ之

の如く記されてある。第三大納言とあるは曩祖長家、二祖忠家より三代目の義であらう。次に第四の奥書が

きみもわれもつたふる道の三代までにいやまさりたる名をのこしつゝ

彼太神宮一禰宜

延季 氏良孫 和歌浦集撰者三代

文應元年九月廿二日此草子枕にして寝たる

人夢 ちゝ子やと——おもへば末ぞ神代なりける

とある。惟ふに第一の奥書は俊成、第二のは定家、第三のはその子爲家、第四のは度會延季の書いたものと推定すべきか。

五社百首に次ぎて後白河院の崩御に當り、六條殿に詣でたところが側近に仕へてゐた範綱、親盛等が俄に法體して素服の人に立ちまじはつてゐるのを見、親盛に贈つた短歌、靜賢法師に贈つ

長秋詠藻と長秋草

た長歌並に短歌の贈答、源通親卿より贈られた長歌及釋阿のこれに答へた五首の短歌を載せ、次に建久四年二月愛妻を失つた悲歎の歌、法性寺の墓所に詣でた追慕の歌、前齋院より慰問の歌、これに答へ奉つた歌、二年忌の歌より建久九年祥月命日法性寺の墓所で詠んだ哀傷歌を載せてとちめとしてある。この部が四十枚に及んでゐる。此全體が哀傷の作で、彰考館藏俊成家集の外は流布本その他諸本にも全く載つてゐない珍しいもので、釋阿の哀傷歌の眞を觀るべきものである。併し彰考館本俊成家集に比べるにその前半は缺けてゐるものゝやうである。

以上諸本の奥書等により俊成自撰の長秋詠藻は三卷から成つてゐたが、治承二年以前の作を撰んだもので、今の流布本の下卷神社歌で終つてゐたことは疑がないやうである。次に流布本に採つてある右大臣家百首は寛喜以前に加へられたもので、恐らくは一子京極中納言定家卿の手に據つたものであらう。而してその當時は別帖になつてゐたと信ぜられる。建仁二年の千五百番歌合之百首は更にその後に加へられたことは寶密法師筆本等に徴して明かなるべく、應永三十年以後或は足利末期かと考へられる。流布本には更に崇徳院御製竝にこれに應へてその側近の人に送



つた長歌、内府等との贈答、文治六年女御御入内屏風歌等は千五百番歌合の百首と同時に或はその後に加へられたもので、室町末期には今見る六家集本の體系をなしてゐたやうである。

これと別に俊成自撰の原形本に右大臣家百首を加へたものに、千五百番歌合之百首は入れないで、五社百首を入れ、終に後白河法皇の崩御を悲しんだ贈答及夫人追慕の歌を加へた俊成家集や、その後半と見える圖書寮長秋草が存してゐる。猶俊成の作は右大臣家歌合、民部卿歌合、御室撰歌合、新宮撰歌合、建仁元年及二年影供歌合、八幡若宮撰歌合等に加つた作で、その集に入らないものがある。これらは續集として添へらるべきものである。(尙次の論文を参照)

兒山信一氏の長秋詠藻の成立 (昭和四年七月國語と國文學)

松田武夫氏の長秋詠藻考 (昭和五年八月國語と國文學)

吉原敏雄氏の俊成家集について (昭和十二年八月國語と國文學)

吉原敏雄氏の俊成短歌作品の發展 (昭和十三年三月國語と國文學)

二、俊成と抒情歌

その一 婦人に對して

俊成は情こまやかな性質の人、左大將家の會に

戀せずば心のはえもなからましものゝあはれもこれよりぞ知る

とさへ強調してゐる歌人である。こゝにはまづ女性に對し實感の作を檢討する。今日の如く男女關係が嚴格でなかつた當時に於ては、地位の高い男子は多くの女人に關した。さうした抒情歌が少くない。俊成がその子定家の母との贈答が新古今集に載つてゐる。長秋詠藻にはこの歌の前後に三十首近い贈答があるが、一人の女性か否かは分らない。「秋の比嵯峨の山のかたに遊びける行きくらして、ほの見ける女の許に屢文遣しけれど、返事もせざりければ遣しける」と端書して、

うかりける秋の山路をふみそめて後の世までも惑ふべきかな

の歌がある。執着の深さが見える。次に「つれなくのみ見えける女に遣しける」として

よしさらば後の世とだに頼めおけつらさに堪へぬ身ともこそなれ

と云ひ送つたのに對し、定家の母は

頼めおかむたゞさばかりを契りにて浮世の中を夢になしてよ

と返してゐる。容易にゆるさないとこゝろを見ると、志操の固かつた婦人と見える。次に後朝の作と見るべきものに

いかにせむいかなる夢の名残ぞと怪しきまでに我ぞながむる

と緬々と情のこもつた歌及これが返歌もある。又女に遣しけるとはしがきして

戀しとも言はゞ愚かになりぬべし心をみする言の葉もがな

の歌を送つてゐる。心のまゝを率直に述べてある。また春の比忍ぶことある女の許に遣した作には  
思ひあまりそなたの空を眺むれば霞を分けて春雨ぞふる

の如く、主観客観織りまぜて婉曲にぼかしたやうな作もある。怨むることありて暫し言はざりけ

第二篇 俊成の作品と評釋

る女に送つた

怨みても戀しきかたやまさるらんつらさは弱るものにぞありける

と戀には負ける境地を詠んだもの等實感實情より來つた作がある。題詠は百首以外にも戀歌が少くない。女院の催された彼岸の御念佛の時や、法住寺殿の五月御供花の會にも戀の題が出るほどの時世であるからさういふ類は今こゝに一々論じない。

この愛した婦人を娶つたのは幾歳の時かはつきり分らないが、定家の生まれたのは應保二年四十九歳の時であるから、蓋し第二夫人であつたのではないかと思はれる。琴瑟相和することが三十餘年、建久四年二月十三日に夫人は歿した。拾遺愚草を見ると定家が特に親しかつた殷富門院大輔から悔みの歌を送られこれに返歌をしてゐる。釋阿の夫人を追憶する歌は長秋草に多く載つてゐる。亡き人に對し釋阿の愛の歌を窺ふことが出来る。法性寺の奥つ城に見送つて後四ヶ月、水無月晦ごろの夕方をながめて、送葬當日の哀痛が新に湧いて來る。

なげきつゝ春より夏もくれぬれど別れはけふのこゝちこそすれ

夕の雲をながめては

いつまでかこの世の空をながめつゝゆふべの雲をあはれともみん

と唧ち、眠る間は暫く忘れてゐても夢が覺めると

おのづからしばし忘るゝ夢もあれば驚かれてぞさらに悲しき

と一層の哀愁を覺え、時には久しく睦まじくして來たことを悔やしいとまでいひ、この因縁を咒  
ひて

前の世にいかに契りしちぎりにてかくしも深く悲しかるらむ

と疑ひ、墓所に詣りて

草の原分くる涙はくだくれど苔の下にはこたへざりけり

と悔み、

苔の下とゞまる魂もありといふゆきけんかたはそことをしへよ

と飽くまで追懷して止まぬ。俊成の歌の教を請けさせられた前齋院式子内親王のその哀歌を御覽

ぜられ

いくとせも別れの床におきふして同じはちすの露をまち見よ

面影にきくも悲しき草の原わけぬ袖さへ露ぞこぼるゝ

等の十餘首の御歌をおくらせられたのに對し、

いろ深きことの葉おくる秋風によもぎの庭の露ぞちりそふ

と返しを奉つた。愛子定家の秋風荒く雨降り注ぐ日に訪れ來つて亡き母を慕ふ歌を詠めば三首の

歌を詠じてゐる。中に

かげさりし六十路の霜にながらへてさらぬ別の遠ざかりぬる

との一首に徴すれば、釋阿とは殆ど二十歳ちがひでもあつたかと思はれる。翌年二月忌日に法性

寺にとまりて松の嵐の烈しき音を聞きては

かりそめの夜半も悲しき松風をたえずや苔の下に聞くらむ

と同情のこもつてゐる作をなし、その翌日には

いつまでか來てもしのばん我もまたかくこそ苔の下に朽ちなめ  
とさへ詠じてゐる。その六年祭には

別れては六とせへにけり六つの道いづかたとだになどか知らせぬ

と夙く同じ世界にゆくことを庶幾する程亡き妻を戀ひてゐる。その情のこまやかであつたことが  
此等の諸詠によりて十分に見られると思ふ。

### その二 親と子に對して

次に親に對する情は傳の部に述べたやうに鳥部野の父の墓所に詣でゝの哀惜、法輪寺にこもり  
ての母の追慕の吟がある。六條家の顯輔が勅撰々集の事承つたと云つて、歌の事を尋ねられた  
時、父の歌を朽果てさせる悲しみを敘した外に見えない。中に

分け來つる袖の雫か鳥部野のなくく歸る道芝の露

の一首が最も感じが深い。子に對しては相當に子煩悩であつた。永萬二年正月には左京大夫の官  
を辭し長男成家を侍從に任官させ、その後も沈淪の事を後京極攝政にうつつたへ

第二篇 俊成の作品と評釋

秋の時捨て、し谷の埋木をうれしくもとふ松の風かな

の詠を贈つたことが後京極殿の自歌合九十七番に見えてゐる。二男定家の任官に於ても長子の場合と同じやうにし、正治御百首の作者に代へられなかつた時、奏狀してこれが勅許を請ひ、またその勅勘を蒙つて昇殿をとゞめられた時には痛く心を惱まし、勅免のことがある噂を耳にして、養子寂蓮に贈つた歌には

蘆鶴の雲路まよひし年くれて霞をさへや立ち隔つべき

の如きがある。續後撰十七には述懐の歌として

今もなほ心の闇ははれぬかな思捨て、し此世なれども

の如きがある。八十七齡を重ねて病が重かつた時に民部卿範光朝臣の許に定家の中將轉任の執りなしを請ひて

小笹原風まつ露の消えやらでこの一ふしを思ひおくかな

の一首を送つてゐる。貫之が日記に子ゆるゑに親幼くなるとの言は餘の人にも同じことであるが、俊



成に於て特にその感じが深い。

### その三 友人に對して

次に友情に關する抒情歌は長秋詠藻には多く載つてゐない。親しかつた友の一朝にして罪なはれた人も少くない時代に遭遇してゐるが、世の嫌疑を被るやうなことはしなかつたであらう。前中納言師仲が下野から歸京し、配所で詠んだ歌を見せた稿本を返す時

いかばかり露しげゝければ東路のことの葉にさへ袖のぬるらん

と添へて送つたり、千載集を撰む時、西行が歌を送つて來た包紙に謙遜の態度で

花ならぬ言の葉なれどおのづから色もやあると君拾はなむ

と志しを書いてあつたに對し、

世を捨てゝ入りにし道の言の葉ぞあはれも深き色は見えける

と返した類は挨拶の歌である。妻子を失ふとか、親に別れるとか、不幸に遇ふとか、沈淪したものに同情して詠んだといふ類も殆ど見えないぐらゐで、行く道は異にしてゐたが、さすがに親し

第二篇 俊成の作品と評釋

かつた西行が辭世の如く大往生を遂げたとき、

願ひおきし花のもとにて終りけり蓮のうへも遠はざらなむ

の一首を詠じてゐる。西行に對しては特に心を惹かれたであらう。

その四 君に對して

最後に皇室に對し奉りて事に觸れて詠じた抒情歌は、世相の變移につれての感銘といふものは見られないで、祝賀奉悼の詠が僅に存するばかりである。近衛天皇の寶算十七歳で久壽二年七月二十三日崩御遊ばされ、御葬送の翌日參殿した時、日の御座の御裝束も改めて佛など懸け奉つてあるのを拜して

のぼりにし夜半の煙のかなしさは雲のうへさへかはるなりけり

と詠じ、翌保元々々年鳥羽上皇崩御あらせられ、諒闇の秋、鳥羽の北殿に美福門院のおはします頃、庭の前栽はおもしろき中に、蘭の特に萎れて見えたので折りて人に贈る時

なべて世の色とは見れど藤袴わけて露けき宿にもあるかな

の一首を添へた。蓋し門院の御心を推し奉つての作か。應保元年霜月二十親隆卿に送つた作にはにより舍利を高野に納めまつた。その御使の侍従大納言成通入道が臘月四日かの御山に着御との消息に對し、その日の深雪によせて

おくれゐて思ひやるこそ悲しけれ高野の山のけふのみゆきを

と詠んで送つてゐる。翌年御忌日に御誦經使として出で立つ時、親隆卿に送つた作には

墨染の袖をつらねて慰めし日數にさへも別れぬるかな

と歎いてゐる。その前々年平治の春内裏御會には花有喜色の題で

九重に匂ひを添ふる櫻花いく千代春に逢はんとすらん

と詠じ、當時の悲しい世相をよそに詠んでゐるのは詮方なかつたものか。

美福門院と反對な御立場で、保元の亂に讃岐に播遷あらせられた崇徳院は門院が崩じてから四年目即ち長寛二年に彼國で崩御された。そのかみ院のみいつくしみを受けてゐた西行の胸にはただ悲しい世の姿を深く刻んでゐたのであらう。

第二篇 俊成の作品と評釋

讃岐に御供申してゐた某より御宸筆の長歌一篇竝に短歌一首を贈つて參つた。長篇は百七句から成つてゐて、須磨の浦に藻汐たれ蟹の生活をした行平中納言の昔語りは嘗て聞いてゐたが、我が身の上にならうとは掛けても思はなかつたのに、前世の因縁か、事志とたがひ、鄙の地に流れてきて、習はぬ杉の板屋に夜もをちく寝られぬ歎きを重ね、劇しき嵐をかこち、消え易い露の身を侘びながら、さすがに昔のことは忘れられず、廷臣と共に雲井の月を眺め、仙院に山路の菊を分け來た人も少くなかつたが、今は誰おとづれるものもない。そこには昔の如く言葉の泉をくんで敷島の道に携はつてゐるであらう。唐土には子期が死して伯牙はまた琴をひかなかつたと聞いてゐる。友のない身には三十一文字を連ねることも止めてしまつた。心の水が淺く、胸の蓮の花さくことは難いけれども、暗き道をもたどりくつて光明の世界に出でんと志してゐる。一たび信をおこすときは救ひの光照さぬことはないと聞く。その導きに誘はれ、玉樹枝をかはし、香しき花ふりかゝる世に逢ひて、契り同じき身となりて眞如の月を共に眺めて睦まじく語り合ひたいこの心人は知るや知らずやとの意を述べさせられ、次に

夢のうちになれこし契くちもせでさめむあしたに逢ふよしもがな

の一首を添へさせられたもの。この歌は千載の後にも涙なしには讀まれない。況んやそのかみ御門の眷遇を蒙つたものは斷腸の思をなして拜讀したのであらう。俊成は心悲しく御返歌を作り、愛宕の邊に隱栖してゐた侍臣に贈つた。その長篇は百七十三句から成つてゐる。

須磨の浦に藻汐たれつゝ佗び住居をしたといふ中納言行平卿の身の上も今の世の憂きためしに比べると尙淺いものであると筆を起し、自分が夙く父にわかれ孤兒となり荒れた住居にひそまつてゐたに、忽ち大官仕をなし忝くも龍顏を拜し奉るを得、賤の身もやうやく青雲の志をのぼすことが出来るかと樂しんでゐた。然るに九重の春花秋月眺めつきせぬ紫の庭をあとにし、仙洞にお移りになり御感傷も淺からずと拜し奉つた。併し塵間をはなれた藐姑耶の山には山路の菊を手折りて幾久さにおはします御事と存じてゐましたに、一朝まがくしい嵐が吹きすすんで、しばし城南鳥羽の離宮にこもらせられ、天つ日影も闇のごとく、林の松風聲悲しく、天下の人の心もいかななる事かと惑はぬものはなかつたに、更にまた和田の原に空しき船を漕ぎはなれ、波路はるかな

第二篇 俊成の作品と評釋

る彼方に悲しき御出でましを拜聞した時の我がせまき胸中は張り裂けるばかりで、唯徒に西の空を仰ぐばかりであつた。我がなげきの雲は松山の峯の梢にもかゝつたのをみそなはせられましたか。今しかたみに御留め遊ばした大和言の葉を拜し奉ると、玉なす涙ははふり落ち、錦繡を裁つたやうな美しさ、玉音瑠々の調べ、今の世は勿論過去にも未來にも類ひがあるまいと拜します。

微臣は時にまれ／＼宮中に召され敷島の道にたづさはりましたも、花の朝夕の夜には陛下のおんうへを忍びまつることは昔も今もかはりがありません。この身は相も變らず埋木のやうに世の下積になつてゐて、仰言のやうに、私も我が弾く音を知つてゐた知己が歿してから再び琴をひかなかつたといふ伯牙の昔談と同じさまであるが、唯自分がこの一道と和歌の世界に遁れ、時にははかなき作を試みてゐますが、誰も知つてくれる人もない。世は望みになはぬことながら、御還幸のこともあるかと存じてゐましたに、遠き世界にて遂に崩御あらせられ、うつしこの世では再會の時は全くなくなりました。もし幸に後の世に蓮華の咲きにはふ極樂界に生れあふ契もありましたならば、この道に遊ぶ輩を誘ひ玉の御言を窺ふやうに誘ひまつりましようとの意を謡つた。今院

の御製並に俊成の長歌を次に引く。

崇徳院讚州にしてかくれさせ給ひて後、御供なりける人の邊より傳へられて斯ることなむ  
ありしとて、折紙に御宸筆なりける物を傳へ贈られし

いにしへの 須磨の浦には 藻汐たれ 蟹の繩たぎ いさりせし その言の葉は 聞きしか  
ど 身のたぐひに なきわたる 岩うつ波の かけてだに 思はぬほかの 名をとめて 沉  
みはてぬる われ舟の われにもあらず 年月も 空しくすぎの 板葺の ならはぬことに  
目もあはで 思ひしとけば 前の世に つくれる罪の たねならで かゝる難きに なるこ  
とは あらしの風の はげしさに 亂れし野邊の いとすゝき 葉末にかゝる 露の身の  
置きとめがたく 見えしかば そのくれ竹の よをこめて 思ひ立ちにし あさごろも 袖  
も我身も 朽ちぬれど さすがに昔 忘れねば 雲井の月を もてあそび 山路の菊を 誰  
かまた 時につけつゝ まとゐして 春秋多く 過ぎにしを いまは千年を 隔て來て 初  
かりがねも ことづてす 馴れにしかたは 音も絶えぬ 本の心も かはらずば 事につけ

俊成と抒情歌

第二篇 俊成の作品と評釋

つつ 君はなほ 言葉の泉 涌くらめど 見しはかくだに 汲みて知る 人もまれにや な  
りぬらむ 更にも云はず 悲しきは 琴を断ちにし から國の むかしの跡に ならひてや  
深きうきめに ねもたえぬ かつ身の程を 厭へども 心の水し 浅ければ 胸のはちす華  
いつしかと 開けむことは かたけれど たどるたどるも 暗き世を 出づべき道を 入り  
ぬれば 一たびなども 言ふ人を 捨てぬ光に さそはれて 玉を連ぬる 木のしたに 花  
ふり敷かむ 時にあはゞ 契りおなじき 身となりて 空しき色は 染めおきし 言の葉の  
ごとも ひるがへし まことの法と なさむまで あひ語らはむ ことをのみ 思ふ心を  
知るや知らずや

夢の中になれこし契朽ちもせで覺めむあしたに逢ふこともがな

宮におはしませし時、かやうの道にもつかうまつりし人は多かりしを、とりわきおぼしめ  
し出しけむこともいと悲しくて人知れず御返事をかきておたぎのへんになむ遣らせける



須磨の浦や 藻汐たれけむ 人もなほ 今を見るには うき波の うきためしには なほ淺  
 し あはれ憂き身の そのかみを 思ふにつけて 悲しきは 荒れにし宿の 壁におふる  
 みなし子草と なりしより ふる巢に残る 蘆鶴も 澤邊にのみぞ 年經しを はじめて君  
 が 御代にこそ 雲のかけはし 踏みかよひ たつの御顔に 近づきて 時につけつゝ 空  
 しくは すぐさず見えし あづき弓 まどひし末に つらなりて 花の春より 郭公 待つ  
 曉も 秋の夜の 月を見るにも 九重に ふりつむ雪の あしたまで 物思ふことも なぐさ  
 めし 九の重ねを 出でしだに 袖の氷もいかにありし 天の羽衣 脱ぎかへて はこやの  
 山に 移りしも 山路の菊を 手折りつゝ 過ぐるよはひも 忘れしを いかにかきにし  
 はつ秋の あらしなりけむ 山城の 鳥羽田の面に 日影くれ 森の松風 悲しみて ゆふべ  
 の空と なりし時 人のこゝろも 推しなべて 野邊のかや原 みだれつゝ 迷ひし程は  
 むば玉の 夢うつゝとも 分かざりき 更にもいはす 和田の原 むなしき舟を こぎはな  
 れ 波路はるかに 隔てつる きゝし別の 悲しきは たとへむ方も なきに似て 蜚の刈

第二篇 俊成の作品と評釋

るてふ 藻汐草 かきてもやらむ 方もなく むなしき空に 仰げども 心ばかりは松山の  
嶺の雲にも まつしけむ みえ坂 唯かたみとは とめ置きし 大和みことの 言の葉を 見れば涙  
も もろともに 玉のこゑごゑ つらなりて にしきいろく 立ち混り かゝるたぐひは  
いにしへも 今行くすゑも 如何あらむ さても年月 移りゆく 敷島の道 立ちかへり  
雲井の月に 誘はるゝ 夜な／＼稀に ありしかど 月の前には 昔おぼえ 花のもとにも  
君を思ふ 唯とことばに 嘆きつゝ いつもかはらぬ うもれ木の しづめることは こと  
の音を 昔たちけむ 緒によせむ 立てゝし道と 遁れつゝ 心ひとつの 空しさは あゆ  
む草には 袖ぬれて こと葉の露は おのづから たまるゝせより 時もあれど 淺茅が下  
に かつ消えて あはれ知るべき 人もなし さりとも稀に 立ちかへる 波もやあると  
思ひしを つひに千里の 外にして 秋のみそらに 月かくれ 旅のみ床に 露消ぬと 汐  
路へだてゝ 吹く風の はらにもこえし 夕より 今ははかなき 夢の中に あひみしこと  
は 泣く／＼も 後の世にだに 契ありて 蓮の池に 生れあはゞ むかし今も この道に

心を引かむ　もろ人は　この言の葉を　えむとして　おなじみ國に　誘はざらめや

さき立たむ人はかたみに尋ねみよ遊の上に悟りひらけむ

鳥羽法皇崩御の後、御位にありまた仙洞にて政を聽かせられた後白河院は建久三年三月崩御あらせられた。崇徳院の崩御から二十八年隔つてゐる。六條殿に親しく奉仕してゐた範綱爲保は十三日のその曉にさまをかへ法師になつた。釋阿は六條殿に參つて見れば素服の人々の中に法師になつて親盛等も加つてゐるのを見てあはれを感じるに限なく、まかり出で、後、親盛に

かなしきは人をとふべきならねども姿を見るにたへずもあるかな

の一首を贈り、親盛もそれに和してゐる。尙釋阿は盡きせない胸中の思を長歌に綴り三月晦日靜賢法印に贈つた。その長さは百四十二句に上つてゐる。これは長秋草に收めてある。その冒頭に「天の原、そらともたのみ、仰ぎしを」といひ起し、大官仕を甲斐あるものとし、「御階の庭の花のもと立ちならしつゝおのづから憂き身のほども慰めき」と謔ひ、その院宣を蒙りて名譽ある

第二篇 俊成の作品と評釋

撰集を成して奏したことを敘し、忽ち還らぬ御幸に出でましてお側の人々は釋尊の涅槃に入りました時の如く、微臣はわけて苔の袂を紅涙に絞つてそのかみを忍んでゐる。もし因縁があつて、咲き匂ふ蓮華池のほとりで悟が開けた暁には再び君に親しく従ひまつりたいと希つてゐる。その反歌には

思ひきやあるにもあらぬ身のはてに君なき後の夢をみんとは

以下斷腸の作を添へてある。法印もこれに和し、その後互に唱和があり、四十九日の御忌も過ぎ五月二日に法印より長歌を贈りて前の長篇の答禮となす。中にその身は朝日まつまの露霜の如く、闇き道よりまたくらき闇に迷ふであらうと細々の情を表し奉つてゐる。左衛門督源通親卿も釋阿が法印に送つた長篇を見て法印と前後して百七十三句から成る長歌を釋阿に贈つた。

なれし藐姑耶の 山水に み影うつりし みぎはにも かたみに咲ける 燕子花 この世の外や 隔つらん 花ばかりのみ うつろひて みのりをうつす 窓のうちも 玉の姿は 影かくし 妙なる法の 蓮葉に たてまつり置く 花ばかり とゞまるあとの 日かはらぬを

みるにつけても 云々

と優婉哀痛の情をのべ、終に五首の反歌を加へてある。釋阿は五首の短歌を卿に贈つた。それらは長秋草に收めてあるから爰には省く。

俊成は鳥羽天皇の御代に生れ土御門天皇の御代に歿したれば都合十代の御宇に存へたのであるが、崇徳天皇と後白河天皇との恩頼が身にしてみても忝かつたものか、以上の如く奉悼の二長篇をものしてゐる。そのかみ政變が屢々起り、あわたゞしい世相の裡に存へては、處世の道もむつかしかつたに違ひない。政治に携り狂瀾を既倒に挽回しようと志すか。或は信仰生活に生き民衆を指導するか、或は身を山野に隠し風月に一生を送るか。或は世と順應し異を立てず生を全うするか、藝術に一生をうち込んで他を顧みないか。その性格により才幹力量により門地に従ひ一樣でない。少納言信西入道の如きは缺點もあり、非業の終をとつたが第一型に近い人、法然上人の如きは第二型の優れた方、西行及寂然等は第三型の人、俊成の如きは第五型の人で和歌を生命とすることは西行と同じやうであるが、その間自ら區別がある。唯時世の風潮に従ひ官位の沈滞を常

にうつたへた作の多いのは今日より指斥を免れざるところ、撰集に方りても忠度の作を多く採らなかつた點など非難するものも少くない。併し類稀れな高壽を保ち建仁三年和歌所に於て九十賀を賜り、銀製の杖を戴いた。この杖には竹の葉が着いてゐて、大藏卿有家が勅により

百とせのちかづく阪につきそめて今ゆくすゑもかゝれとぞ思ふ

の歌を奉り、その竹葉の上に書かれた。釋阿は限りなき天恩の忝きに感泣し

この杖はわがにはあらず我君の八百萬代のみよの爲なり

の一首を後に奏上した。

### 三、俊成と敍景歌

俊成は顯廣時代より都の外にいか程の旅行を企てたが一向に分らない。長承元年十九歳の時、加賀守に任じられてゐるが、北地の歌を特に詠んでゐないところを見ると實際に脚その地を踏んだかは疑問である。一體に矚目の作よりは、室のうちで心を潜めて吟じた歌が多い。随つて主觀

的の詠に優れてゐるのが多い。當時は題詠や歌合の多く行はれてゐたので疵のない詠が澤山にあるが、素描の生き／＼したものは中々に撰取するも困難である。普通に敘景の作に詠まれる題でも主觀の加はつたものが多く、蚊遣火の題でも

夕立のそゞぎて過ぐる蚊遣火のしめりはてぬる我心かな  
擣衣の題でも

長き夜に衣うつなり槌の音のやむときもなく物を思ふよ  
と詠じてゐる。併し純客觀の作で人口に膾炙した歌も少くない。

崇徳院近衛殿に御幸あつた日遠尋山花といふ心を詠ませられた時の

面影に花の姿をさきだてていく重こえきぬ峯の白雲  
の如きは艶なる姿である。上句の主觀が客觀世界に没入した面白い作。

春の夜は軒端の梅をもる月の光もかをるこゝちこそすれ  
の如きは下句の主觀が上句の客觀に隨存する艶な作である。

第二篇 俊成の作品と評釋

月清み千鳥鳴くなり沖つ風吹負の浦のあけがたの空

の如きは高古の調、萬葉の粹を學びたもの。

みよしのゝ花のさかりをけふ見ればこしの白嶺に春風ぞ吹く

の如きは莊嚴な感のする作。

石ばしる水のしら玉かす見えて清瀧川にすめる月影

の如きは洗練を経た典麗な歌。

五月雨はたく藻の煙うちしめり汐たれまさる須磨の浦人

の如きは佗びしい光景を敘した吟、

またや見むかた野のみのゝ櫻狩花の雪ちる春のあけぼの

の如きは妖艶な作。

すぎぬるか夜半のねざめの郭公聲は枕にあるこゝちして

の如きは餘情こもれる詠。



夕されば野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里

の如きは幽玄調の優れた吟。

むかし思ふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山郭公

の如きは白居易の「蘭省花時錦帳下盧山夜雨草庵中」より醸された静寂な歌、桐火桶には京極中納言が歌の想が浮ばない時にはこの作を二三回吟咏するがよいと云はれ、

春くれば玉の砌をはらひけり柳の絲や伴のみやつこ

の如きは巧な作で、此の如き類が千載集新古今集に採つてある。

後鳥羽院御抄に「釋阿はやさしく、艶に心もふかくあはれなるところもありき。ことに愚意に庶幾する姿なり」と見え、歌仙落書に俊成を品して、「高くすみたるを先として、えんなるさまもあり、誠に昔に恥ぢぬ歌人なるべし。年ふりたる松の嵐はげしき夕暮におく深く琴の音のほかにせんを立ぎゝたらむとや云ふべからむ」と推稱してゐる。

#### 四、俊成と釋教和歌

俊成は幼くして父を失ひ、やゝ長じて母を喪ひ、その追善に嵯峨の法輪に籠つた時にも、「浮世には今はあらじの」など詠じたことは既に説いた如くであり、述懐の歌にも

四方の海を硯の水につくすとも我が思ふことは書きもやられじ

と詠んでゐる如く、随分苦勞症であつた。官位の昇進の遅いので時につけ折にふれてこぼした歌も詠んでゐるが、隱忍して夙く世を捨つるに至らなかつた。慈鎮和尚自歌合八王子の二番右の

ねがはくはしばし闇路にやすらひてかゝげやせまし法のともし火

の歌に對し、右歌の心又愚老が心願、やゝおこるところの趣なりと判を下してゐるが、此の如き心境は晩年のことと思はれる。而も釋教和歌を詠む機會は相當にあつた。康治の頃待賢門院の中納言の君より法華經二十八品の歌結縁のためと云つて題を送つて來たので詠んで送つてゐる。萬葉の力車の語をとつて、

世の中の苦しき道はあはれびの力車のはこぶなりけり  
と化城喻品の以大慈悲身、度苦惱衆生の心を詠んでゐる。

かりそめの夜半の煙と昇りしや鷲の高嶺にかへる白雲  
と壽量品の現有滅不滅を詠んでゐる。また

春の花秋のもみぢの散るも見よ色はむなしきものにぞありける  
と心經の色卽是空の意を詠んでゐる。以上の如き三十餘首の詠は三十歳に満たない頃の作である。久安御百首に

世の中を思ひつらねて詠むれば虚しき空に消ゆる白雲  
の如き内的經驗から無常思想を詠んでゐる。また神祇の歌は僅々二首なるに、華嚴・方等・般若・法華・大經を詠んでゐる教理の高遠な華嚴を

旭さす高嶺の花はにほへども麓の人は知らずぞありける  
と云つた風に教義を翻して詠んでゐる。歌合の判にも時には佛典の意を引くこともある。例へば

第二篇 俊成の作品と評釋

承安三年八月十五夜の三井寺新羅社歌合遙見山花の二番「白雲にひとつに見ゆる山櫻いづくか花のきはめなるらむ」に對し、「いづくか花のきはめならむといへる姿いとおかし。(中略)かの白毫の光の萬八千世界を照しゝ心地してはるかに聞ゆ」と評したり、同故郷郭公の八番の判に

左右の郭公「誰と語らふ」といへる心は同じきを猶左は詞遣少しは優れるなるべし。かやうのことはいくばく變れるとやはなどいふ人ありぬべきことなれど、かの法華の弟子品文にや、天見<sup>レ</sup>人人見<sup>レ</sup>天と釋せるを、人天交接兩得<sup>ニ</sup>相見<sup>一</sup>といひつればいますこしめでたく聞ゆるやうに詞心も少しきゝよくなりぬ云々

といへる類もあるが、永曆元年美福門院の極樂の六時讚の繪をかゝせられ、その讚の歌を召された時の十八首が優れてゐて、絢爛をきはめたるもの哀音の恻々として人の心情を捉へるものがある。晨朝の

朝に定より出づる程ほのかに天の樂を聞く

ほのかなる雲のあなたの笛の音もきけば佛の御法なりけり

日中時の

飲食畢てには座より起ちて經行せむ七重寶樹の風には一實想の理を調べ、八功德池の浪には無生滅の義を唱ふ

影清き七重のうる木うつりきて瑠璃のとぼそも花かとぞ見る

日没時の

或國界悉く白銀光さかりにて普賢大士來至す

白妙に月か雪か見えつるは西をさしける光なりけり

時に大衆法を聞きて彌歡喜瞻仰せむ即時に自然に無數妙華散亂す

色々に空より花とちりまがふこれをや法の雨といふらむ

今ぞこれ入日を見ても思ひこし彌陀の御國の夕暮の空

後夜の曉到つて浪の聲金の岸に寄するがほど曙けむと欲する風の音玉の簾をすぐる間多しを

いにしへの尾上の鐘に似たるかな岸うつ浪の曉の聲

俊成と釋教和歌

第二篇 俊成の作品と評釋

と詠めるが如き、當時惠心僧都の往生要集の影響を受けたものが少くなく、また法然上人の和讃と照合して見るべきものと云ふべく、花山院に端を發したといふ三十三番巡拜御詠歌はこれらより發生したものと考へられる。

法然の信仰は熱烈にして普く苦惱してゐる衆生を濟度しようとして誓つて安元元年淨土宗を開いたのであるが俊成はその翌年六十三歳で大患にかゝり世をはかなみ遁世した。その時

昔より秋の暮をば惜しみに今年は我ぞ先だちぬべき

と辭世めいた作をものしたが、併し平癒の後は大官人としての宮廷生活が懐しい。西行は花ゆゑに惜しくなる命といつたが、吉野の奥然らずも野山の一本櫻にでもその生命をうちこんだが、俊成はさうはゆかなかつた。

雲のうへの春こそさらに忘れね花はかすにも思ひいでしを

と紫の庭の櫻をうつくしい官女を忘れることは出来なかつたらしい。

正徹物語に「俊成卿老後になりてさても明けくれ歌をのみ詠みりて、更に當來の勤もなし。か

くて後生いかならむと歎きて、住吉の御神に一七日籠りてこのことを歎きて、もし歌は徒事ならば今よりこの道をさし置きて、一向に後生の勤をすべしと祈念ありしかば、七日満する夜、夢中に明神現じ給ひて、この道の外に別に佛道を不可求と示し給ひしかば、いよくこの道を重くし給へり」と傳へてゐる。これは歌道に執心の深かつたことを示すと同時に釋阿は釋教歌人でなかつたことを意味するものと思はれる。随つて經文を翻した歌は壯歳より佳作が多いが、血みどろな若しくは涙ぐましい宗教的の歌人ではなかつたのである。治承三年右大臣家百首の釋教歌五首中法華經方便品の歌には

量りなく數なき世々をつくしても一たび聞くは難き法なり

の如きがある。これは無量無數劫、聞此法亦難を翻したものであるが、一面には求道の容易ならざる體驗から、特にこの句に共鳴したものと見るべく、述懐五首の中に

今も尙心のやみは晴れぬかな思ひすてゝしこの世なれども

とあるのが、その心胸をうつし出したものと謂ふべく、法然の如き大なる宗教家と對照して論じ

## 第二篇 俊成の作品と評釋

たのは余の誤である。併し俊成はよくみづからを知るもので、藝術家として立ち蕪雜な歌風を一新し、高雅幽玄の調を以て天下を率ゐんと志したものの、あまり宗教に深く没入したならば歌人としてその地位には達しられなかつたのであらう。

### 五、俊成と勅撰歌集

俊成の早歳の和歌で第六勅選詞華集に採られたものは僅に一首に過ぎないが、第七撰集千載集には自詠は初は十一首であつたが、勅詠により二十五首を加へて三十六首となつたと井蛙抄に録してゐる。文治三年七十四歳までの作中、おのが意に叶つたものを心のまゝに撰んだのである。その中十首は崇徳院の仰によつて奉つた久安百首から抽いたもので、壯年時代の作に佳歌の多いことを示すもので、その一つ一つを検討することに由つて彼の庶幾してゐたものを明瞭につかむことが出来る。その最も理想とした幽玄體には

夕されば野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里



を始として「郭公聲は枕にあるこゝちして」の類がある。侘びしさの切な歌には

五月雨はたく藻のけぶり打しめり汐たれまさる須磨の浦人

の類がある。切なる戀の心を詠じたものには

思ひきや榻のはしがきかきあつめ百夜もおなじまるねせむとは

の如きがあり、又妖艶な體には

春の夜は軒端の梅をもる月の光もかをるこゝちこそすれ

の如きがあり、清澄な體には

石ばしる水の白玉かすみえて清瀧川にすめる月影

の如きがあり、心のまゝを表現した體には

雲のうへの春こそ更に忘れね花はかすにも思ひ出でじを

の如きがあり、縁語秀句を用ゐて技巧を凝したものは

奥山の岩がき沼のうきぬなはふかきこひぢになに亂れけむ

第二篇 俊成の作品と評釋

の如きがあり、子を思ふ歌の中にも

芦鶴の雲路まよひし年くれて霞をさへやへだてはつべき

の如きもその類を同じくするもの。譯經和歌としては、法華經の高原鑿<sub>レ</sub>穿の深義を詠じた。

武藏野のほりかねの井もあるものをうれしくも水の近づきにけり

の如きがあり、幽玄以下諸體を自在に詠みおほせたものを包含してゐることが了せられる。

次に第八勅撰新古今集はその門下など五人の撰にかゝり、幽玄高雅典麗さまぐの體を具し、和歌史上萬葉古今に對し陸離たる光彩を放つてゐる集にして、入道釋阿の存生中に成りたれば、新古今撰者が特別の注意を以て撰出したものと云ふべく、その作七十三首も採つてある。試にその三四に就て見るに絢爛な姿のものには

又や見むかた野のみのゝ櫻狩花の雪ちる春のあけぼの

駒とめて猶水かはむ山吹の花の露そふ井手の玉川

の如きがあり。幽玄の調には

昔おもふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山ほとゝぎす

しめおきて今やと思ふ秋山のよもぎがもとに松蟲の鳴く

の如きがあり、高古の體には

雪ふれば峯のまさか木埋れて月にみがける天の香山

月さゆる御手洗川に影みえて氷にすれる山藍の袖

の如きがあり、情の濃かなものには

我心いかにせよとか郭公雲間の月の影になくらむ

稀に來る夜半も悲しき松風をたえずや苔の下に聞くらむ

の如きがあり、佗びしいさまに詠んだものには

みしぶつき植ゑし山田にひたはへてまた袖ぬらす秋は來にけり

柚山や梢におもる雪折れにたへぬなげきの身を碎くらむ

の如きがあり、素朴な姿には大嘗會に於ける稻舂歌の如きがある。次に新勅選はその子定家の撰

第二篇 俊成の子と評釋

んだものであれば目を留めて見るべくこの集には三十五首を採つてある。以上三集に採つてあるものは悉く抽き出して評釋を加へたのはその作を鑑賞するの豫備となしたのである。

- 新勅選集 三十五 續後撰集 二十六 續古今集 二十八 續拾遺集 二十三 新後撰集 十八  
玉葉集 五十六 續千載集 十九 續後拾遺集 十五 風雅集 二十八 新千載集 十五  
新拾遺集 十三 新後拾遺集 九 新續古今集 二十一

六、勅撰集入撰和歌評釋

(一) 詞華集戀下

左京大夫顯輔の家にて歌合し侍りけるによめる

藤原顯廣朝臣

心をばとゞめてこそは歸りつれあやしや何の暮をまつらむ

(釋) 三十歳前後の作か。家集には後朝戀と附記してある。身は歸つて來ても心は女の許に留め置きたれば、さう戀しい筈はないのに、暮の逢瀬が待たれるのは怪しいと、己が心の空虚なるを殊更に自問の體に表現したもの。心を擬人法に用ゐてある。下の句にその理由を訝かつたところが面白いとしたのであらう。六條家の撰に入つたのは唯この一首だけであつた。

(二) 千載集

題しらす

前皇太后宮大夫俊成

春の夜は軒端の梅をもる月の光もかをるこゝちこそすれ

(釋) 軒端に近く梅は咲いてゐる。春の月は庭を照してゐる。花はかんばしく香を放つてゐるので、その間から洩れて來る月の光は恰も光自身が薰る感じがすると、實感を強調して詠つた作。一首艶な歌で、光もかをるといふを眼目とした。新古今調の先驅をなす歌。古今集の春の

第二篇 俊成の作品と評釋

夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るゝを展開し、理窟なしに色も見えるさまに趣向した。八代集抄には「風情優美なる歌、まことに二條家の正風體にこそ」と注してある。但し今日よりいへば、春の夜はと他の季節に比較するやうに聞きなされるのは如何のものであらう。

十首の歌人々によませ侍りける時、花の歌とてよみ侍りける。

み吉野の花のさかりをけふ見ればこしの白嶺に春風ぞ吹く

(釋) 長秋詠藻卷中に見えてゐる。上句は春たけなはの日、丁度都合よく吉野の櫻のま盛りに會したことを敘し、下句には満山が眞白くさながら雪で蔽はれてゐるやうな大觀に接し、即て常に雪でまつ白い越路の白山と見倣し、寒い北風が吹き下しさうなものだが、さはなくて、長閑な春風がそよ／＼と吹いてゐると述べた。越の白嶺としたところが、この歌の山である。井蛙抄には集中の玄の玄なる歌十一首の中と説いてある。

## 攝政右大臣家の歌合に郭公の歌とて

すぎぬるか夜半のねざめの郭公こゑは枕にあるこゝちして

(釋) 治承三年十月の作。七番左郭公の歌。郭公を待ちながら床に就いた。夜半に驚いて耳を傾けると、人をして恍惚たらしめるあの聲は枕頭に残る感じがするが、鳥は我家を早通り過ぎたのか知ら、惜らあの聲はと愛惜の心を述べたもの。餘情の深き體、過ぎぬるかと一句に切つて疑問となす所力が入つてゐる。季吟は寢覺の一聲猶枕上に残る俤、彼の「鳴つる方を眺むれば」と詠めるに劣るまじとぞと注してゐる。

## 百首の歌奉りける時よめる

五月雨はたく藻の煙うちしめり汐たれまさる須磨の浦人

(釋) 久安百首の歌。侘びしさの限をいはうとの目的にて、藻汐垂れつゝ侘ぶと答へよと古今歌

第二篇 俊成の作品と評釋

人が詠じた須磨人を捉へ、その五月雨季節の生活を敘し、藻を焼いてゐる濱邊に五月雨が降りしきり、上る煙もしめりがちで、その里人は常さへ潮水でぬれてゐる袖が一層汐の雫が落ち添ふと一首を完成してある。

宗祇は第一句五月雨の頃はといへる五文字なりといひ、幽齋は「藻などかき集めて焼くは雨濕を避けん爲なれど、うちしめりて燃え兼ねるを焼き侘びて、須磨の浦人いとどしほたれまさりたる哀をいひのぶる歌」と評してゐる。今人が須磨を過ぎりては風光の明媚なものにはがらかな氣分になるが、伊勢や源氏物語時代の昔を推想すれば佗しい土地で、よく實感を強くうち出した作と云へると思ふ。

百首の歌奉りける時、水無月の御祓をよめる

いつとても惜しくやはあらぬ年月をみそぎに捨つる夏の暮かな

(釋) これも久安百首の一首で、六月晦日を詠んだもの。この日には都の官人は賀茂川原等に到



り、御祓の祓を行ひて身の染汚を清め、清々しい心の生活に入るのである。一夜たちて風も涼しい秋となる。従來三月盡また九月盡にあたり、春・秋を惜む習であるが、季節の變移は人心を刺戟するものゆゑ、夏でもこの夕暮を送ると思へば惜しいものと強調した。みそぎに捨つる夏といふ表現が目新しい。宗祇は「年月を捨つるといへる作者の物たるべし」と評してゐる。

百首の歌奉りけるに、秋立つ心をよめる

八重葎さしこもりにし蓬生にいかでか秋のわけて來つらむ

(釋) 同じく久安百首の歌。八重葎は雜草で草叢や道の邊にも茂り、莖か車の軸のやうに四方に張つてゆく蔓狀の草で、その茂つてゐる荒庭にどうして秋がやつて來たかと、秋を人格化して云ふ。裏に淋しみをこめた作であるが、擬人の爲に表はさうにも聞えぬ。前句の靜的を後句は動的に轉じた。貫之の「とふ人もなき宿なれどくる春は八重葎にもさはらざりけり」を本歌に取つたもので等類のやうであるが、本歌の春を秋にとりなし、説明を避けて實感を詠じたところ本歌取

第二篇 俊成の作品と評釋

の要を得たものである。

百首の歌奉りける時、秋歌とてよめる

夕されば野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里

(釋) これも久安百首の中の一。俊成の最も得意の作と云はれてゐる。都の南、深草の里は鶉の名所となつてゐる。地名の草深いといふのも淋しい感じを助ける。夕方になりて野邊の秋風が冷々と身にしみ入る時、あたりの深草の里に鶉の淋しい鳴聲がしてゐるとの義、幽玄の體。俊慧法師が俊成にその秀吟を尋ねた時この歌を以て答へたといふ。然し身にしみての一句は説破しすぎて却つて餘韻が乏しと俊慧が評したと鴨長明の無名祕抄に見えてゐる。身にしむは秋風か、鶉の鳴聲か、その二者か、また野邊と深草は一つか、相隣する二處か、案じて見ると考へさせられるものがある。文法的にいへば、身にしみては秋風の人の身にしみこむと、鶉の鳴聲の感は表現してないが、身にしむ度を濃厚にするものと考ふべきであらう。八代集抄には古今「いとゞ深草野

とやなりなん」の返し「鶉と鳴きて年は經ん、と詠みし風情よりよみ給へり」と注してある。

百首の歌の中に

石ばしる水の白玉かすみえて清瀧川にすめる月影

(釋) これも久安百首の一。清瀧は京都の西北高雄の附近にあつて、その水清澄を以て聞えてゐる。河中巖石多く、溪水これに激して白玉を飛ばす。秋月河を照し白珠の緒よりこき散らされたやうに見える。清艶なる體。新古今の範歌。石ばしるは石の上を水の走り流れるをいふ。清瀧といふ名も空しからでいさぎよき歌と古人も評してゐる。詞は古體、姿は幽玄を庶幾した人の好んだ歌の一つであらう。

保延の比はひ身を恨むる百首の歌よみ侍りける時、蟲の歌とて詠める

さりともと思ふ心も蟲の音もよわりはてぬる秋の暮かな

第二篇 俊成の作品と評釋

(釋) 堀河百首題で詠んだ述懐百首の一。相當高い家筋に生れ、在官してより十餘年一向位階の昇進もない。さり乍らその中ことしこそはなど自ら期待してゐたのに、時は晩秋、鳴く蟲のほそくと弱つて來た時、自分の期待した望もきれたやうになつたと、我と自然と同一視した果敢なさ、頼りなさ、佗しさの感想を諷つてある。但し戀の歌とすればつれなき女もその中には靡くかと心細きたのみをかけた作とも見られる。

崇徳院に百首の歌奉りける時、落葉の歌とてよめる

まばらなる槿の板屋に音はしてもらぬ時雨や木の葉なるらむ

(釋) 落葉如レ雨などいふ感じを一層具象化した作で、淋しさの歌である。板葺の屋根はところ／＼剥がれて疎らになつてゐて、ともすればその透間から雨滴が落ちることもあるあばら屋である。雨の板屋を撲つ音は烈しく聞えるもの、今し時雨の音がしてゐるが洩つて來ないのはさては木葉の時雨か知らんと自ら解釋してゐる。もらぬ時雨の語が新しい。こゝにいふ眞木は檜の木を

指したものであらう。

千鳥をよめる

須磨の關有明の空になく千鳥かたぶく月はイやなれも悲しき

(釋) 長秋詠藻には左大將家の十首の題の中、曉天千鳥と題してある。須磨の關には源重之の歌にも千鳥を詠つてある。行平中納言の歌、源氏物語など物思はしめる名所、こゝに明方の空に残月が懸かつてゐる。月下には濱千鳥が鳴いてゐる。身は今こゝに立つて眺めてゐると、哀愁の念がいやが上にも湧いて來る。かういふ寂しい場合には相手を求める念が自づと生じる。おゝ曉の千鳥、お前も傾きかゝつてゐる月が淋しくて泣くのか。さらば我が伴である。互に侘しさを慰めようではないかと心の切なるときは人類以外のものでも我と同様と速了し、自然に訴へ呼び掛けるのである。第一句と第二句の連続に隙きがある感じがするのは僻目か。

第二篇 俊成の作品と評釋

百首の歌

月さゆる氷の上に霰ふりてこゝろくだくる玉川の里

(釋) これも久安百首の冬の歌。玉川の里は武藏の調布の玉川を指すか。張りつめてゐる氷の上  
に月が映つて悽愴の感がある。そこに霰が降つて一層その感じを強くし、心を傷ましめる。こゝ  
玉川の里ではと序歌の體に連ねた。地上にころががつた霰は恰も砕いた玉のやうに見える。その玉  
といふを玉川に云ひ下した。それは拾遺集にくらなし濱(豊後)を謠つた序歌に「乙女子が赤裳ひ  
づちて植ゑし田を刈りてをさめむ藏なしの濱」と詠んであるのと同巧である。唯これは玉川の里  
に於ける實感實景を示してあるから、所謂有心の序である。八代集抄には月・氷・霰まことに寒夜  
のあはれをつくしたれば心碎くるとなり、霰の玉の氷に碎くる風情より思ひよれる心なるべし」と評してある。

浦づたふ磯のとま屋のかち枕きゝもならはぬ波の音かな

(釋) これは久安百首の雑の中羈旅の歌の一つで、旅宿の侘しく心苦しい様を詠じたもの。大宮人は海人の生活などは習ひも出来なかつた。旅して浦路をたどり、荒浪の寄せては返す磯のほとり、苦で圍つた漁師の家に一夜を明すは大抵なことではない。梶を枕に代用し、聞いたこともない波の音を耳にする、その聲を聞いたびに恐しい、侘しい、苦しい思をすることだと、身をさういふ境に置いたとして詠じたもの。井蛙抄に千載集の中の玄之玄なるべき歌十一首の中の一なりとある。

### 旅の歌

あはれなる野島が崎の庵かな露おく袖に波もかけゝり

(釋) 野島が崎は淡路の地名を指すか。八雲御抄近江、萬葉東路のともいふなり。一説淡路云々。あのやうなところにある草の庵はものあはれな感じを惹起す。侘しさ恐しさに袖は涙の露に

第二篇 俊成の作品と評釋

濡される。いやそればかりでなく、波も袖にぶつかゝるであらうと、前句のあはれといふことを具象的に表し、二重の悩みを示した。井蛙抄、此集玄之玄歌十一首の一なりとある。

竹遐年友といへる心を講ぜられけるに

わが友と君がみかきの吳竹は千代に幾世の影を添ふらん

(釋) 長秋詠藻には「鳥羽院田中殿におはしまし、頃、八條院(暲子内親王)姫宮と申し、時、彼の御方にて竹遐年友といふ題を講ぜられし時よめる」との詞書がある。賀の歌で、大君の離宮のめぐりには竹の御垣があつて、吳竹(俗に淡竹はちくといふ)が榮えてゐる。竹は幹が眞つ直にして曲れるところもなく、植物中四君子の一に數へられてゐるから、御自分の友と見そなはずといふことを御垣のみに掛けた趣向で、姫宮様はあの竹の如く幾千代の影がさして榮えさせられるであらうと祝の意を述べた歌。題の意をよく詠みこなしてある。



攝政右大臣に侍りける時、百首の歌よませ給ひけるに、祝の歌五首が中により侍りける

百千たび浦島が子は歸るともはこやの山は常磐なるべし

(釋) 藐姑耶山は莊子に見えてゐて、不老不死の仙人の住んでゐるところ、我邦では仙洞御所を指す場合が多い。浦島が子は雄略紀にも載せ、萬葉集にも謡はれてゐる長壽の人、海の宮から故郷丹後の水江の里に歸つて見ると、數百年を経過したといふ。この傳説を仙宮にとり合せたのは面白い趣向で、その浦島子が百千度歸つて來ても仙宮はとこしなへの榮えが續くであらうと祝意を述べた作。浦島の子といひ藐姑耶の山といひ世離れた感を助けてゐる。

おなじ家に百首の歌よみ侍りける時、初戀の心をよみ侍りける

ともしする端山がすその下露やいるより袖はかくしをるらん

(釋) 同じ家は攝政右大臣兼實公家である。五首の初戀を詠んだその一首。ともしは狩獵の語で、獵人が夏の頃火串に松をともし、物蔭に隠れるて、鹿の火により來るを狙ひ射るをいふ。ば

第二篇 俊成の作品と評釋

つちりと立つてゐる山には獵夫は照射ともしを設けてゐる。その山の裾野に分け入ると下露で袖がこのやうに萎れるやらと、表には露で濡れるが如く装ひ、裏は招き寄せられる鹿がやがて射られると思ふと氣の毒で涙がにじみ出で袖が萎れるとした。いるに射ると入るとを秀句にしたことは云ふまでもない。戀路にいと、人のつれなさに袖のぬれることをいはうとて照射する人の端山の裾の露に濡れるのが斯くもあらうと初戀の心を寓した作。巧に工夫を凝した歌、殺生を悲しむ意にも取られぬことはないか戀が主である。

忍ぶる戀

いかにせむ室の八島に宿るかな戀の煙を空にまがへむ

(釋) これも久安百首の一。室の八島は下野にある歌枕に入つたところで、平野の中に八つの岡があり、近くでは何のかはりもないが遠くから見ると、そこから煙が立ち上り天に沖すると云はれてゐる。戀の假名はこひにて、これに火を寄せる詠むことは歌道に於ける一つの約束のやうに

なつてゐる。第一句は困惑の體、但し何の爲とは云はず自分は室の八島に宿つてゐる、そこより昇る煙は下では分らないが空では靡いてゐる。私の忍の戀はあの空の煙に紛へよう。それより道はないと室八島を一首の中心に置いて趣向した歌。詞華集には實方中將の「いかでかは思ありとも知らすべき室の八島の煙ならでは」と詠じた作を載せてある。これを本歌としたるか三段切の歌としたところが新しい體である。抄には「我戀の煙を思ふ人に見せまほしけれどもさすがに云ひがたければいかにせんと思ひ侘びて、せめて思出たる心なり。千載集秀歌十首の中の一」と見えてゐる。かくてこの地は歌枕になつてゐるので後世芭蕉の如きも奥の細道に「室の八島に詣づ。同行曾良が曰く「此の神は木花開耶姫の神と申して富士一體なり。無戸室に入りて焼け給ふ誓のみ中に火々出見尊生れ給ひしより室の八島と申す。また煙をよみならはし侍るもこの謂なり云々」と見えて神代より戀にちなみていふ所である。

法住寺殿の殿上の歌合に臨期違約戀といへる心をよめる

第二篇 俊成の作品と評釋

思ひきや榻のはしがきかきあつめ百夜もおなじまろねせむとは

(釋) 建春門院北面歌合一番右臨期違約戀の歌。按察使と合せて、當時様姿宜しき由人々定めら

れたので勝としたと斷つてある。同歌合には第三句「かきつめて」とある。長秋詠藻には法住寺殿の殿上の歌合の時、臨期變約戀といふことを」と詞書してある。榻しこは腰掛のやうなもので、車の長柄を受ける時にも用ゐる。榻のはしがきは心づくしの例に引く特別の表現で、昔或男の女に思を懸けたるに、百夜續けて來たならば許さんと云はれ、毎夜通ひて來てはそこにある榻のはしにその度数を記したるに、今一夜といふ時になりて障りが出來て行け無かつたので、遂に逢ふことが叶はずなつたといふ。一説にはしぎの羽搔きの誤にて鳴といふ鳥はよく羽を嘴で搔くより百羽搔きと續けたといふ説もある。今前説に従ふ。いろ／＼心づくしをして百夜もひとり寝をしようとは豫期しなかつた。九十九夜は約束通りで仕方がないが、百夜までも帶も解かず、一人で丸寝をしようとは豫想もしなかつた。この期に及んで約を變ずるとはひどいものである。第五句目の終より第一句にかへる句法。伊勢物語の思ひきや雪ふみ分けて君を見むとはと同句法。

法性寺殿にて五月の御供花の時、をのことも歌よみ侍りけるに、契後隠戀といへる心をよみ侍りける

たのめこし野邊の道芝夏ふかしいづくなるらむ鴟の草ぐき

(釋) 草くきとは草の莖といふに草をくぐるといふ意を兼ねさせた。古典にも手の股よりくき出でなどの語もある。一體百舌といふ鳥はすばやく草の間を潜ると云ふ。随つて百舌の草ぐきといふ語も生じた程である。何時になつたら逢はれると當てにさせた、その月日は後に過ぎ去つて、春過ぎ夏來り今は野邊に生へてゐる芝草は丈高くなつた。百舌はその繁つてゐる草間をくぐつて通つてゐた。あとは何處か分らないといふことを、豫ねて約して置きながら隠れて逢はない人を戀ひる意を自然界のそれと組合せて一首を仕立てたもの。夏ふかしといひ、いづくなるらむにその意を見るべきである。萬葉集卷十「春されば伯勞の草ぐき見えすとも我は見やらん君があたりは」の歌を據とした。鴟の草ぐきに就き、奥儀抄には草ぐきは草莖にて、鴟の居たる草の莖をい

第二篇 俊成の作品と評釋

ふと見えてゐる。北村季吟は二條家の正風體の歌だと云つてゐる。

後朝戀

忘るなよよの契をすが原やふしみの里のありあけの空

(釋) こゝに見える菅原も伏見も共に大和の地名でそのむかし菅公の祖先土師氏のゐた地。菅原は大字、伏見は小字である。菅原の頭音すにするの意をかけるは和歌作法の傳統的の手法。この一首も右大臣家に於ける百首詠の一つで、後朝の戀を詠んだものである。この世ばかりでなく後々の世も違へまいぞと契を結んだ、伏見の里の在明方の氣持は決して忘れて呉れるなど堅める意地名に臥して見る意を掛け、有明の空を忘るなどいふに、後朝の戀を詠じたことを示してある。これも第一句切の歌、中世歌人の好んだ句法。少し秀句縁語にかゝはり過ぎてゐる。

崇徳院に百首の歌奉りける時、戀の歌として詠める

戀をのみ飭磨の市に立つ民もたえぬ思に身をやかへてむ

(釋) 久安百首の一。飭磨の市は播磨にあり、姫路の南に位する。昔は物の賣買が盛んでその市場に四民が絶えず往來してゐた。繁昌の地。飭磨の頭音いに爲の意を兼ねさせるも傳統的の手法で、飭磨の市に立つ商人もいろく心配ごとが絶えないやうに、戀する身は始終たえない心配にこの身を取り代へて見たいと絶えぬ思の戀を詠じた。秀句にて仕立てた歌。第三句立つ民のと異本にあるのを面白いと思ふ。

攝政右大臣家の歌合に戀の心をよめる

逢ふことは身をかへてとも待つべきによゝを隔てむ程ぞ悲しき

(釋) 逢はれることなら、この身を捨てゝも宜しいときへ切に思つてゐるに、またこの身があゝの世に参り、戀する方と幽明道を異にするとならば、更に悲しいことであると、隔てゝ逢はぬ戀を歎く。よゝには世々と夜々とを掛けてある。ひたぶるの心から生じた詞である。

勅撰集入撰和歌評釋

戀の心を

奥山の岩がき沼のうきぬなは深きこひちになに亂れけむ

(釋) これも久安百首の一、浮名の立つたのを歎く歌。蓴菜は古名ぬなは、ぬる／＼と滑かなものであるより然かいふ。泥中に生じ、水上に浮く。泥土のことを古語こひちといふよりこれを戀路にとりなし、浮き蓴に浮き名をかけ、一首を秀句によりて仕立てた作。奥山の岩で圍んだ沼に浮いてゐる蓴がどうして深い泥土に亂れたことやらといふを表にし、御互に祕してゐる二人の間に浮名がどうして立つたことかと技巧的の作。序は古今集の詞に據る。

同じく

しき忍ぶ床だに見えぬ涙にも戀はくちせぬ物にぞありける

(釋) 久安百首には上句しきしのぶ床には堪へぬ枕にもとある。千載集を撰む時改めたものと見



える。古今集には「涙川枕ながるゝうきねには」の如き詠があつて、古來涙の多く出ることを強調した作が少くない。これらにより絶えず忍んで忍びきれず流す涙に床は見えない程であるといひ、斯うればその中にあるもの朽ちさうなものであるが、戀は消滅しないものだと言説した手法を用ゐた。古語に絶えないで次々に來ることをしきと云ふ。しき波のしきに於けるが如し。こゝではそのしきを床の縁語としてゐる。

山家月といへる心をよみ侍りける

住みわびて身をかくすべき山里にあまり隈なき夜半の月かな

(釋) 浮世は厭はしいと云つて、山里にこもつてゐるが、明月は隅から隅までを照し、身の隠れ場所もないと、題意を詠みおほせた。多少不平がましく述べて月の飽くまで明きことを示した主觀の勝つた作。伊勢物語に「住みわびぬ今はかざりと山里に身を隠すべき宿求めてむ」の詞を用ゐて詠じたもの。

第二篇 俊成の作品と評釋

二條院の御時四代まで侍りつることをおもひて詠み侍りける

いかなれば沈みながらに年をへてよゝの雲居の月をみるらむ

(釋) 詞書に四代までとあるは崇徳天皇の御代に敍爵し、それより近衛・後白河・二條の四帝に仕へたことをいふ。當代に於ては從四位下まで進んでゐた。よゝといふに四代を指したことは云ふまでもない。平氏の人々など年若き人々に官位を躰されたりして、意平かならず、消極的に懷を敍したるもの。當時官途の遲滯を歎く歌が彼是に少くない。六條家の顯輔朝臣の「難波江にうつろふ月の影見れば我が身一つは沈まざりけり」の秀吟に比べては遜色がある。

遁世の後花の歌とてよめる

雲のうへの春こそさらに忘れね花はかすにも思ひいでじを

(釋) 病重くして遁世したものゝ、平癒の後は大官人として官廷を立ちならしてゐた昔が忘れら

れぬのは人情の常、當時の遁世は深い／＼求道心から起つたものでないのが多かつた。釋阿もその一人である。下旬は連歌の附句のやうに春といふ花を以てし、左近櫻は自分どもも人數にも思つてゐてくれないに、自分は宮中に執心が残るとした。かくて餘情を添へようとしたのである。

花ざかりに法成寺にまゐり金堂のまへの花のちるを見てよみ侍りける

ふりにけむ昔をしらば櫻花ちりの末をもあはれとは見よ

(釋) 法成寺は近衛の北、京極の東にあり、御堂關白道長の邸宅を改めて寺觀となしたところ、俊成はその玄孫である。その金堂の櫻に向つての述懐、人はいまさすなつても、花は昔の園に匂ふなれば古い關係も知つてゐるだらうとし、御堂殿のかすかな末流でもあはれを掛けよと同情を乞うたのである。花の散るといふちりを塵の義にとり、自然物を擬人していふは和歌に於ける常套手段である。感傷的な心から出た作。

第二篇 俊成の作品と評釋

述懐百首の中に夢の歌とてよめる

うき夢は名残までこそ悲しけれこの世の後も猶やなげかむ

(釋) 上三句は憂き夢は覺めた瞬間までひどく悲しいことを述べ、下句は人生をこれに比し、この世を夢に、この世の後をその名残に配し、現時のみならず、將來も歎くであらうと悲觀した。この述懐は壯時の作に拘らず、百首とも果敢ない氣持を詠じたものに満されてゐる。上句は自然で、下句はそれに托して趣向ある句。八代集抄には「幽玄の心ばへ實に二條家の正風體なるべし」と注してある。

今上の御時、五節の程、定家過ちあるさまに聞し召すことありて、殿上除かれ侍りけるその年も暮れにける又の年の彌生の朔日比院におほんけしき給ふべきよし左少辨定長がもとに申し侍りけるに添へて侍りける

あしたづの雲路まよひし年くれて霞をさへやへだてはつべき

(釋) 今上は後鳥羽院。芦鶴は定家を指す。愛子定家が雲上の籍を除かれたことを芦鶴の落付くべきところもなく、雲路にまよつてゐるといひ、春になつて聽許になる噂を耳にして、春霞はさ迷つてゐる芦鶴を隔てはすまいと自然の上にとりなした。親として夜鶴の情あまりまでとまで覺える。その師左衛門佐基俊が我子のことしも東大寺の維摩會に講師にならなかつたのを歎じて「契おきしさせもが露をいのちにてあはれことしの秋もいぬめり」の秀吟と意は同じくて、これは夜鶴の心情を歲月の冬より春に移りても待遠しき意を結構した。

法師品漸見濕土泥ニ決定知レ近レ水の心をよみ侍りける

武藏野のほりかねの井もあるものをうれしくも水の近づきにけり

(釋) 法華經第十法師品の高原穿鑿の要文(偈)で、四尊が「諸の懈怠を捨てんと欲せば當に此經を聽くべし。この經は聞くことを得難し。信受する者亦難し。人の渴して水を須ひんとして高原を穿鑿するに、猶乾燥ける土を見ては水を去ることを尙遠しと知る、漸く溼へる土泥を見ては云

## 第二篇 俊成の作品と評釋

々の義を翻せるもの。萬葉に見える武藏の入間郡堀兼井を點出して逆に水の近づいたことを喜ぶ意となす。阿含方等般若の經は乾ける土にて猶遠い。法華經に至りて濕へる泥の水に近きを知るが如く、成佛に近い心を寓した喩。堀兼の井とうれしく水に近づく趣向が凡でない。

### 勸發品の心をよめる

更に又花ぞふりしく鶯の山法のむしろの暮れ方の空

(釋) 法華經第二十八品勸發品の大莊嚴菩薩以下の菩薩たちが世尊の慈恩を感謝してゐる時三千大千世界が六種に震動し、上空の中より種々の天華以下いろ／＼の無價の寶がふつて來た條を翻したもので、鶯の山は印度の靈鷲峰山で、釋尊のそこにて說法された席の夕方の光景をうつしたもの。二十八軸の終なれば、「法の席の暮方の空」と詠じたのである。

いたづらにふりぬる身をも住よしの松はさりとあはれ知るらむ

(釋) 嘉應二年十月五十七歳の時、住吉社歌合十番右の歌。自判に上の句斯様の心常のことに侍るべし。下の句又少し心をやれる所あるやうに見え侍れど云々とある。上二句は自家の心境を敘し、然し我が常に念する住吉の社の松は氣の毒と思つて呉れるであらうといひ、神と云はず松とし婉曲の味を存す。ふりぬるに住吉の松と連ねることは、古今集にも例がある。

賀茂の社の後番の歌合の時、月の歌とてよめる

貴船川玉ちる瀬々の岩波に氷をくだく秋の夜の月

(釋) 貴船は山城の西北にあつて、雨を司る貴船明神の鎮座ましますところ、その川が岩に激して珠玉を散らす瀬々の波に秋のさやかな月が映じて宛ら氷を碎くやうだと清絶の状を謡つた。美を鑑賞する眼肥えてゐる。八代集抄には、「彼玉ちるばかり物な思ひその貴船の神詠にて、玉ちる波に月影の氷をくだく氣色淨く妙なる風情にや」と評してゐる。

第二篇 俊成の作品と評釋

以上は自撰の勅撰に收めたもの、自家得意の作とゆるしたもののばかりであらう。

(三) 新古今集

入道前關白太政大臣、右大臣に侍りける時、百首の歌よませ侍りけるに、立つ春の心を

今日といへば唐土までもゆく春を都にのみと思ひけるかな

(釋) 入道前關白太政大臣は藤原基房公でその右大臣であつたのは應保元年から長寛の間の事である。立春は東から來て段々西へ及ぶ。それは自分は平の都に住んで、その長閑な氣分を味つてゐるので、青帝の恵が、我よりずつと遠い西の唐土にまで及ぶことをふと忘れてゐたと都の春をことはぐ主觀的な作。今日といへばと起首に文字あまりにしたのも立春のこの日を強く指すにどつしりとした趣がある。我が都と唐土と對して見て宜しい。立春には霞をあしらつたり、まだ春のしるしは見えないなど云ふ紋切型を離れた歌。ゆく春をとおさへてあるので末のかなの重しもきく。



述懐百首の歌をよみ侍りけるに、若菜

澤におふる若菜ならねどいたづらに年をつむにも袖はぬれけり

(釋) この述懐百首は百首ながら悉く我が身を歎く意に詠じてある。徒に年を重ねることを思ふと涙が流れて袂が濕ふと悲觀した作。水邊の若菜といへば水芹などを指す。正月七日に若菜を粥に和して食べる節供であるから、人々が澤畔などにそれを摘む。積むの縁となし、澤邊であるから袖が濡れるの縁となす。この百首は保延六年二十七歳の時の作であるから老を歎じたと見るは中らない。京官は正月に司召とて敍任がきまつて行はれてゐたに、俊成は敍爵してから十數年を重ねて一度も昇敍がないので、それを婉曲に寓したものであらう。さういふ意味を離れると、下三句をいふ爲め技巧を用ゐたに過ぎないことである。當時下官のものが昇進が出来なくてそれを歌に寓して上に陳状した作が多く見られる世相であつた。これもその一つである。但し若菜ならねどつむにと縁にすがりたるところ平弱を免れないであらう。

第二篇 俊成の作品と評釋

日吉の社によみて奉りける子日の歌

さざ浪や志賀の濱松ふりにけり誰が世にひける子日なるらむ

(釋) 平安朝には支那の風俗をうつして正月には子の日の遊を行つた。野外に出で小松を引く遊びで、この小松は移し植ゑたものと思はれる。延曆寺の地主神として上下の崇敬措かざる日吉社に奉る歌とて、その濱松の亭々と高く聳えてゐるのを見て、この長高き松はいつの昔の子日に引いて植ゑたものかと、悠久な相を想ひやつた歌。子日の下には松といふ語を補つて見るべきで前は實相、後は推定の相である。前句にはふりにけりと云ひ後句にはなるらんとしふ時相の上に一致を缺いてゐるやうにも思はれるが、けふも子日であるより昔の子日を繼いだものゝやうになして詠じたものと助け見るべきか。志賀の濱は天津市の西北琵琶湖の沿岸で、日枝官幣大社の參道に當つてゐる。さざ浪は志賀の枕詞と考へられて古くより使はれて來た。こゝにはすわりが宜しい。

刑部卿頼輔歌合し侍りけるに、よみて遣しける

聞く人ぞ涙は落つる歸る雁なきてゆくなるあけぼのゝ空

(釋) 從三位刑部卿頼輔家で催した歌合の歌。晩春の鳥は古來雁を第一のものと考へてゐる。春暖にして百花咲き亂れるに先ち、北の方へ歸つてゆく。その聲は櫓をきしるが如く、哀感を催す。まだ明け切らない空を列をなしてこの土から去つてゆく。景物の最たる鳥に別れるのは自然を愛する國人にはつらい。寢坊の人は知らないが、その啼聲を耳にしたものは涙をこぼすと人と鳥といふ限界を撤した表現、雁の鳴くを泣くにとり涙と照應させた。第二句で切れるのは古い調子であるが、第五句を名詞どめとしたのは新古今時代に喜ばれた句法。きく人の人を我の義に解すれば、俊成の面貌が一層明かとなるであらう。

千五百番歌合に春の歌

いく年の春に心をつくしきぬあはれと思へみ吉野の花

勅撰集入撰和歌評釋

第二篇 俊成の作品と評釋

(釋) 千五百番歌合は建仁二年に行はれた我國最も大きな最も優れた歌合で、俊成は八十九歳の時で、作者となり判者ともなつてゐる。咲くを待ち、風を氣にし、散るを惜み、春は花の爲に心をつかつて來た。春また春を重ねて身は老いはてた。西行は「花のもとにて我れ死なむ」と希つた。釋阿は年々心にかけて來た吉野の花に對し、私をあはれと思つてくれと、さも生きた人間に訴へるやうに冀つた。詩人の心腸は花のやうで、これも自己と我とを同境界のものとしての作。力強い歌。花は數ある中、櫻を第一とし、櫻は到る處にあるが吉野をその名所とするより、吉野の花と呼びかけた。併し他所の花を疎にして云ふのではない。俊成の歌は優麗な作が多いが、これは力をも具してゐる作。

攝政太政大臣家に五首の歌よみ侍りけるに

またや見むかた野のみ野の櫻狩花の雪ちる春のあけぼの

(釋) 後京極攝政良經は定家の保護者。月清集の作者、六百番歌合は公がまだ左大將であつた時

に行つたもの。交野かたのは河内國の御獵野で、桓武天皇の頃より御料の鷹野として聞えてゐ、山城の西南境に近い。狩は明方のまたほの暗い時に出で立つ。さうしないと鳥が捕れない。後世には櫻狩といへば櫻を見ることを指すが、ふるくは櫻の咲く頃に狩をすることで、普通は十一月十二月に行ふのであるが、花の咲く頃に行ふ狩を櫻狩といつたのである。曙しらむ春の日に交野の禁野に狩衣姿で出で立つと花がはら／＼と雪の如く散り來る。この艶なる光景は繪を見ても心が動く。沉んやその雰圍氣の人の心地は格別で、一度こゝに參つてはまた重ねてこの光景に逢ひたいと希はぬものはない。落花の雪に踏み迷ふ交野の御野の櫻狩と太平記の道行に引かれる程艶なる歌である。

駒とめてなほ水かはむ山吹の花の露そふ井手の玉川

(釋) 山城南部の井手は山吹の名所となつてゐて、そこを流れる玉川の水に花の影を映する状は見事なものである。駒に跨り遠乗してこの地に到る。河畔に馬を駐めて水を飲ませながら山吹を

第二篇 俊成の作品と評釋

眺めてゐる。氣をつけて見ると花にもつてゐた露の玉があつた清い氷の上にぼたり／＼と滴一滴と此の枝彼の枝から落ちてゆく。この景は匆々に見捨て、去るに忍びない。猶馬に河水を飲ませ、その間に飽くまで賞翫しようとする。瞬間の快い感じがほがらかに表れてゐる。客觀世界の美に身も没入したい狀がある。花の露そふは繊細な美しさがよく現されてゐる。

入道前關白、右大臣に侍りける時、百首の歌よませ侍りける時、郭公の歌

むかし思ふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山ほととぎす

(釋) 人も訪ひ來ぬ片山かげの粗末な草葺の庵にひとりゐて、昔のことをつく／＼と考へてゐると、夜の雨が蕭々と降つて來て一入寂寥を感じさせる。これだけで今の自分には淋しさを味はせるに十分である。然るに豫期しない山郭公があたり近くに飛んで來て血を吐くやうな聲で啼く。その初音を待つてゐる人とは異なり、自分は一聲を聞いただけで胸一ぱいである。どうぞこの上に鳴いて我をして涙を流させないやうに頼むぞとわびしさを諷つた作で、白樂天の廬山夜雨草庵

中の句から思ひついたもの、さびを喜ぶ一の作である。三五記を見ると、想の浮ばないときはまづこの歌を幾かへしも詠めと云つてある。俊成の物のあはれを知る作として古くから注意されてゐる作。上句は詩をさながら翻した趣がある。

雨そゝぐ花橋に風すぎて山ほとゝぎす雲に鳴くなり

(釋) 庭前の花橋に五月雨がそゝいで、風はその梢を吹き過ぎて多少の香を送つてゐる。この瞬時姿はさやかに見えないが、郭公は雲間にテツペンカケタカと啼いてゐる。庭前の光景と雲間の聲とを對結して身にしむ感興を敍したものである。客觀を描寫しただけで、彼是と主觀は示してないが美しき自然の動きを描寫してある。繪ではかけない表現の境。レツシングのラヲコーンの詞を思ひ浮べられる。

後徳大寺左大臣の家に十首の歌よみ侍りけるによみて遣しける

勅撰集入撰和歌評釋

第二篇 俊成の作品と評釋

我心いかにせよとてほとゝぎす雲間の月の影になくらむ

(釋) 五月雨頃は月も隠されがちで心が自ら暗い感じがするに、珍しく月が雲間から姿をあらはして來たので、空を仰いであると、折しも郭公が月下に朗々の聲を立てゝ啼く。この瞬間に於ける我が氣持は何とも云へぬ感じが湧いてくる。一體あの郭公は私の心をどうさせる積でなくのやらと昂揚した心を友に呼びかけるやうに郭公に聞く體に詠じたもの。

述懐によせて百首の歌よみ侍りける時

今日はまたあやめの根さへかけそへてみだれぞまさる袖の白玉

(釋) この百首には悉く悲歎の意をこめてあることは前に述べた通で、五月五日端午の節供には上流の家庭に於ては香料を丸く玉のやうに包み、美しい帛をつけた薬玉といふものを柱に懸けこれに根のついたまゝの菖蒲をも懸ける習俗が長く行はれてゐる。日頃もふさがちであつたに、この佳節に際し、人は得意で楽しんでゐるに引かへ、自分の袖には白玉が散りみだれると新愁の



加はつたことを詠じてゐる。根は哭なの音に通ふより涙のことを袖の白玉と詠んだ。さへの助辭により藥玉の上に菖蒲までもとの意をこめることとなる。材料は藥玉といひ、白玉といひ、あやめといひ艶なるものが多いが一つに統一され悲しみの具となつてある。

## 題しらす

誰かまた花橋に思ひ出でむ我も昔の人となりせばない

(釋) 花橋は田道間守の故事により古を追憶させるものと、歌人の間には常識になつてゐる。古今集に「五月まつ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」とも詠まれてある。花橋を嗅ぐと古人が思ひ出される。併し生あるものは死し、遠ざかるものは忘れられ易いのは人生の常である。時劫の波にはすべてが洗ひ去られ、一切が忘れられてゆく。我も命きはまりて古人になつた時には、誰が花橋により田道間守を忍ぶやうに私のことを誰が思出してくれようか、蓋し多くはあるまい。思へばはかないものである。あはれを詠じた作。我も人も皆同一律であるが、我云々と云つ

第二篇 俊成の作品と評釋

て概念的宗教的となるを防いだ。

千五百番歌合

大井川かゞりさしゆく鶺鴒舟いく瀬に夏の夜をあかすらむ

(釋) 山城は嵐山の裾を流れてゆく大井川に、夏の夕闇に篝火を焼きつゝ鶺鴒が幾筋の紐をさばきて鶺鴒をつかふ状況がちらくと見えてゆく。下流から上流にのぼる。幾多の瀬々を掉す中に夏の短夜が明けるだらう。繪のやうな美しさであるが、夜の明けるまで續ける鶺鴒の辛勞が想ひやられる。と前半敍景後半主觀を加へた。

百首の歌奉りし時

伏見山松のかげより見渡せばあくる田面に秋風ぞ吹く

(釋) 古今集の歌人は「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ」と詠んだが、これは田面

には秋風がそよ／＼と吹いて稻葉をわたつてゐる。これを見た場所は伏見山の松の下、見た時は朝のやう／＼明けた頃、段々明るくなつた時にひろ／＼と鳥羽あたりの景を望んだ作。よく客觀を捉へた歌。雄大な場面が眼前に展開される。平淡の作のやうで非難のない歌。

崇徳院に百首の歌奉りける時

みしぶつき植ゑし山田にひたはへて又袖ぬらす秋は來にけり

(釋) 農民の身になりてその苦しみを敍した歌。春耕し夏の初田植をする時は水垢が手や足にも附いてその皮膚のあれるのも厭はずに働いた。秋の實の時がやがて來たが、刈收めるまでに鳥や鹿が穂を啄むので、それを防ぐ爲にも淋しい山田の畔に番小屋を設けそこから田の面に繩を張りその端に鳴子を附け置きて來るたび毎に鳴らして追ひやる苦しみは大抵でない。その淋しい夜番には袖をぬらすことだと秋の喜びを述べないで却つて苦しさ淋しさを敍した。ひたは引板のことで、板に竹を割らずに短く切つたものを幾本も紐で着け、繩を引く毎に音を立てるやうにし

第二篇 俊成の作品と評釋

たもので、鳴子と普通に呼ばれてゐる。萬葉の「衣手に水澁つくまで植ゑし田を引板われはへて守れる苦し」と等類のやうであるが、それは質感、これは立秋にあたり農民の上を題材とした相違がある。萬葉の力強い作に比しては弱いが農民の勞を思ふ歌として取るべきか。

崇徳院に百首の歌奉りける時

萩の葉も契ありてや秋風のおとづれそむるつまとなるらむ

(釋) 水邊に叢生してゐて人の身長よりも高く伸びてゐる萩の葉に風の訪れるのは佗しいもので誰もよく氣がつくものである。空より吹き來る秋風のまづ訪れるのは萩の葉のやうに思はれるよ  
り、つまといふ字を働かして妻の儀にとり、かねての契約があつたと技巧を用ゐ、風を夫、萩の葉を妻の如くに仕立てた。自然ではないが技巧の勝つた作。中世の歌の姿。

七夕の歌

たなばたのと渡る舟の梶の葉にいく秋かきつ露の玉づき

(釋) 牽牛星と織女星とは、一年の中、七月七日頃になると天の川をさし挟んで近接する。これを相逢がたき相愛の男女の情に喩へたのは古き支那思想で、我邦にも夙くよりその流を受け、萬葉にはその歌が少くない。牽牛星を彦星といひ、織女星を棚機と云つて來たのをこの頃はどちらでも指す語となつた。我が邦にては女の子は手業が巧になるやうに七夕祭をする。この乞巧奠には梶の葉に願の文字を書いて供物と共に捧げる。五色の紙に歌などを書いて竹の枝に吊して立てる習俗は今も都鄙に見られる。この紙はもとはその原料のかうぞより製したもので、梶の葉とはその葉を指したものらしい。棚機が天の川の水門を漕いで向岸に渡るには舵を用ゐる。舵梶同音なるを利用し、梶を引起す爲に門渡る舟のかちと序の體にして一首を仕立てた。梶の葉におく露の如きはかない玉章を幾年かいて捧げたことか。その願のこゝろも一向きゝめがないと片戀の心を寄せたもの。後拾遺集の「天の川と渡る舟のかちの葉に思ふことをも書きつくるかな」を本歌とし、幾秋とし露の玉章としたところに多少の進展を見るばかり。但しはかないあはれを歌つて

第二篇 俊成の作品と評釋

ある。習俗を序とした戀の心ある歌。

入道前關白、右大臣に侍りける時、百首の歌よませ侍りけるに、

いとかくや袖はしをれし野邊に出て昔もあきの花は見しかど

(釋) 野に出て秋の草花を見て、袖を濡らしたことはこれまで度々あつたが、今日のやうに袖がしをれるぐらゐしんみりしたことは嘗ては無かつたと、老來の感じを過去に比べて述べたもの。かくやと反語を用ゐて、その強度を示してある。三四五句より一二句へ返る。

入道前關白太政大臣の家に百首の歌よみ侍りけるに、紅葉を

心とや紅葉はすらむ立田山松はしぐれにぬれぬものは

(釋) 紅葉の名所として名高い大和の立田山には時雨のするごとに色を増す。併しその間にまじる松はさるけはひが見えない。蓋し心の中で紅葉して外にはあらはさぬのか知らぬ。時雨のふる

たび毎に松も濡れないものかと怪しみ云へる體、旁のものを擧げて眞の楓は紅に染めたことを示してある。心とやと松を擬人してある點よりいへば、底意には人の靡かぬさまを指した趣もある。

千五百番歌合に初冬の心をよめる

おきあかす秋の別の袖の露霜こそむすべ冬や來ぬらむ

(釋) 古人は四季の中、夏冬を喜ばないで、春秋を好んだ。随つて三月盡、九月盡の日を、惜む情は今よりは一層切であつた。こよひ一夜で秋が終るのかと思ふと、名殘惜しく、寢ずに明した歌人の感想を強調した作である。一體秋の末になるとおく露は繁く、冬の日になると、それが凝りて霜となるより、過ぎゆく秋を人間の如く見做し、別れに臨み涙を流す。それが袖の上の露で、それが結んで霜となり今早くも冬の來たのかと敍した。季に對する觀念は古人が強かつたより、今日では不自然なと思ふまでに表現する傾向のもの。今の歌人はあまりに賞美しない歌風か。

第二篇 俊成の作品と評釋

題しらす

かつ氷りかつは碎くる山川の岩まにむせぶ曉の聲

(釋) 山間を流れる川が冬の曉方にしみ入る寒さの爲に、うはつづらが氷るかと思へば一方ではそれがめら／＼と碎けてゆく。その破片を浮べた水が水中に立つ岩と岩の間で悲しき聲で唸るやうな音を立てゝゐる。咽ぶといふ語がこの歌の眼である。名詞留めも力強い。その下にかなの辭を補つて見れば、一層はつきりする。

守覺法親王家五十首の歌よませ侍りけるに

ひとりみる池の氷にすむ月のやがて袖にもうつりけるかな

(釋) すさまじいものといふ冬の月が庭の池の氷の上に冴えてゐる。ひとり立つて眺めてゐるとその光がしみ／＼と身に迫つて來るやうで、そぞろに哀感を催し涙は袖にたまつたと見え、氷上



の月はそのまゝで袖上に映じてゐるのに驚いた。ひとりの箇は成り立たない。矢張自然と關聯をもつてゐる。我が身の上を敘して冬月の感じを大きくはつきりと寫し出した作。

雪のあした後徳大寺左大臣のもとに遣しける

けふはもし君もやとふと詠むれどまだ跡ばいもなき庭の雪かな

(釋) 地位は異なるが、我が甥に當る後徳大寺實定公に贈つて、美しい今日の雪を共に眺めて賞したいと思つて人待ち顔にしてゐるが、庭の白雪に跡つけて訪ねて下さらないのは淋しい感じに堪へないと消息の歌である。今日はおもしろかしたらといふに昨日もその心構へがあつたことが知れ、餘情のある作である。もしといふ文字に旨と使ふ副詞がよくおちついてある。怨じないで心のたけを述べてある。

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに

勅撰集入撰和歌評釋

第二篇 俊成の作品と評釋

雪ふれば峯のまさか木埋れて月にみがける天の香山

(釋) 月に照された雪山の感じを強く美しく表はした作で、大和平野の中に横たはる大和三山の一つである天の香山はさほど高くはないが、神聖な山として古くから知られ、大切な神事にはその嶺の眞榊をとりて用ひた例は國史に見えてゐる。二句は降雪の度を具象的にあらはし、月に磨けるは全山一白の上に月光が照りそひて、玉玲瓏の狀を呈してゐる。この瞬間の感じは世ばなれた氣高いの一語に盡きてゐる。高雅體の一首。

千五百番歌合に

けふごとにけふや限りと惜めども又もことしに逢ひにけるかな

(釋) 年老いた身はことしがこの世の御暇乞だと感じつゝ、また除夜に逢ふたことだと八十九歳の年の述懐である。けふといふ語を二つ繰り返してあつて、病犯でなく、この場合にはふさはしく、音律的の響が添つてゐる。別に奇をたくまないで、ありのまゝの感じを録してある。俊成晩

年の作にはかゝる平淡でつくろはない歌が多い。

文治六年女御入内屏風歌

山人の折る袖にほふ菊の露打ちはらふにも千代は經ぬべし

(釋) 後鳥羽天皇の御時月輪關白兼實公の第一女任子が入内して女御になられた御祝の屏風に書いた畫讀の一首で、菊は盛久しき花で、千世見草といふ異名がある程のめでたい花。古今集には「濡れてほす山路の菊の露のまにいつか千歳を我は經にけむ」とさへ歌つてある。不老不死の仙人に菊はふさはしいから、右の歌を本歌にふまへての作。仙人が菊を折るとき、袖にはその高いかをりがうつる。それと共に香にしめつてゐる露が袖に着く。これを拂ふには仙界の事とて千代を經る程だと長久を祝ふ心をよせた作。祝歌の範とすべきものゝ一つ。

祝の心をよみ侍りける

勅撰集入撰和歌評釋

第二篇 俊成の作品と評釋

君が代は千代ともさゝじ天の戸やいづる月日の限なければ

(釋) 聖壽の無疆をことほいだ作。千代といへば長いことであるが、今は千代と指し定め申しますまい。空にかゞやく月日の無窮と同じことであるからと、祝意をのべた作。我が國民の皇室に對する情は一つの宗教のやうに誰も信じて疑はない。この心を率直に詠じたもの。

仁安元年大嘗會の悠紀の歌奉りけるに、稻舂歌

近江のや坂田の稻をかけつみて道ある御代の始にぞつく

(釋) 六條天皇の御即位に際し、皇祖天神を祭り、天皇親ら申告遊ばされる大嘗會に方り、朝の御饗を奉らせられる悠紀の神殿の神饌の稻舂く時の歌。卜定によりたる近江國の風俗歌十首の中、最初に論はれるもの。長秋詠藻に仁和元年大嘗會云々とあるは仁安の誤。悠紀方にもあれ主基方にもあれ、定められたる國郡の地名を詠み入れる習にて、その歌風は古風の素朴なを貴んだもので、こゝは近江の坂田から出來た稻を舂く時の祝意をこめた歌である。近江のやのや文字

は調を整へる爲に置いた辭、かけつみては杭に掛けて乾しそれを積む義。稻舂の時に音おもしろく囃して謡はれた中の一首。

母の思に侍りける秋法輪寺にほどいこもりて嵐のいたく吹きければ

憂世には今はあらしの山風ほどいにこれや馴れゆく始なるらむ

(釋) 法輪は山城の嵯峨にあり、嵐山の麓渡月橋の向に見える。今は虚空藏を以て聞えてゐるところ。母の喪にあたり、菩提所に籠つてゐれば、はかないこの世にもう居ないとの決意を以てゐるが、こゝ嵐山のきつい風も段々馴れてゆく後には氣にかゝらなくなる第一歩かも知れぬ。思へば人の心は如何ともしがたいとつく／＼身の上の佗しさを啣つた作。あらしを嵐山と云ひかけた。秀句であるが、歌がらによりさほど耳たゝぬ。

定家の朝臣母みまかりて後秋頃墓所近き堂にとまりてよみ侍りける

稀に來る夜半も悲しき松風をたえずや苔の下に聞くらむ

(釋) 亡き妻の菩提所に詣で、深く思をつくした歌。亡き骸を斂めた當時は一七日、三七日など繁くお参りをしてゐたが、忌も明きての後は参詣も稀になる。墓畔の松に夜ふけて吹く風の音が淋しさを通りこして悲しき音がして堪へにくい。亡き魂は苔生した墓石の下でこの哀音をいつも聞いてゐるだらう。同情に堪へないと。稀にとたえずと對照して見るべきである。長秋草に收めてある悼歌の一つである。

權中納言通家の母かくれ侍りにける秋、攝政太政大臣のもとに遣しける

限なき思の程の夢の中はおどろかさじと歎きこしかな

(釋) 閣下は今夫人を喪はれて無限の憂愁にとざされ、夢かうつゝか儚き世界をたどつてお出になると信じ、御吊問を申しては濟まぬとさし控へひとり蔭で歎いてゐましたが、いつまでも黙してゐるのも本意でないと存じて心の一端を申すと挨拶の歌である。引き締つた句柄は強く哀悼の

意を示す範としてよろしからう。通家は攝政良經の子。

題しらす

かりそめの旅の別れと忍ぶれど老は涙もえこそとゞめぬ

(釋) 子息などの遠く任につく爲に、自分の許から離れて行く時などの作か。このたびの別れはホンの一時的のものだと我慢はしてゐるものゝ、老の涙はとゞめることは出来ない。いつ死ぬるかも知れないと思ふより自然氣が弱くなつてと心の姿をたゞ素直に敘した歌である。深みのある作。

守覺法親王の家に五十首の歌よませ侍りけるに、

夏刈の蘆のかりねも哀なり玉江の月のあけがたの空

立ちかへり又も來て見む松島や雄島の苦屋波にあらすな

(釋) 始の一首、玉江は越前の名所。旅して宿なきときは夏刈の蘆の上に假寝をするも風流であり、興である。水澤の邊にはいづこにも蘆は叢生してあるが、名もうるはしい玉江の浦に有明の月がうすく残つて夜の明けんとする瞬間刈蘆の上にて眺める感じはまた格別である。玉江の地名も月にふさはしき感じがあつて艶なる歌である。讀下して音律的の快調を覺える。但し上句と下句は獨立して恰も連歌の如き趣きがある。

(釋) 後の一首。八百八島様々の姿をなす松島の勝景、その正面の陸つゞきと思はれる雄島に宿り、うたゝ自然の偉觀にうたれた。今旅路の事とて一たびは立ち去るが、再び立ち歸つて又もこの大景に接したい。あの雄島の苦でかこつた海人の住家を立寄する浪も荒さないやうにして呉れと希つた。佗びの苦屋で勝景を賞鑑して尙餘情のつきないものがある。元祿に於ける芭蕉が奥の細道に「道祖神の招きにあひて取る物手につかず、股引の破をつゞり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより松島の月まづ心にかゝりて」と云つてゐるのは古今皆同じくこの大觀に同化しようとする騷人墨客の翼はぬものはないのである。



## 入道前關白の家の百首の歌に旅の心を

難波人あし火たくやに宿かりてすゝろに袖の汐たるゝ哉

(釋) 都と違ひ難波の里は薪の代りに海邊に叢生してゐる蘆を燃料とする習である。あの煤の立つ一夜の宿にては佗びしさに袖がひどく濡れたことたとその時の旅情を述べた。酌む汐水のしたゝりで海人の袖はぬれがちである。佗しさに我が涙を催したことを場所がらにより汐たるゝと云つたのはふさはしい。すゝろはそゝろに同じく、知らずくにの意。萬葉に「難波人蘆火たく屋のすゝたれど己が妻こそとこめづらしき」を本歌とし、戀の本歌の上を序にとり旅の歌とした。すゝろには讀して煤の音が含まれるやうな語感がある。さびしく餘情ある體。

## 述懐百首の歌よみ侍りける旅の歌

世の中はうきふし繁し篠原やたびにしあればいも夢に見ゆ

第二篇 俊成の作品と評釋

(釋) 當時の世相が人をして不安を感じしめた。時世の寵兒となりえないで、怏々として世にあまされたやうな人は何につけても憂き節が多い。都を出でひとり旅に遁れてゐるとまた故都に遺した妻女のこと、伊勢物語の昔男の如く、夢に見えて旅も物思はしめると旅中に於ける實感を詠じたさまであるが、ふしといふ語と篠とは互に縁語である。東海道には近江路に篠原がある。彼地にこの吟でなくして仕立てたる作なるべく、下句は萬葉の風調を襲ふたもの。而も上下連接上新味ある歌と云ふべきである。俊成の作としては下句の語法が珍しいやうに思ふ。

隠名戀といへる心を

蛭のかるみるめを波に紛へつゝ名草の濱を尋ねわびぬる

(釋) 一たびは逢ひながら、その身分を愧ぢてか、或は後の逢瀬を避ける爲か、兎に角相手の人が名を顯はさないで、心中のもどかしさを詠じたもの。作意は名といふを紀伊の名所の名草の濱に託し、さういふ地には蛭が住んでゐて、海松みまといふ海草などを刈つてゐるのが常であるから、

それを點出し、その邊を尋ねるけれども、刈つてある海松のあるあたりと思つて近寄ると打寄せる波であつて、その所にたどり附けないので困まるとした。これは海松みまつ藻もに見目を秀句とする傳襲と波の頭音に無の義を兼ねさせ、隱喩の體に表したもので、趣向はあるが、第三句が實感にそぐはないやうであるが、象徴化が少し過ぎたものと云ふべく、當時の達磨宗の風と評すべきであらう。

雨の降る日女に遣しける

思あまりそなたの空を眺むれば霞をわけて春雨ぞふる

(釋) 相思の中で、まだ一所に共棲しない中は戀の惱みに苦しみ易い。別れてゐて思に堪へないので、妹のゐる方角に向ひ、空を見つめてゐると、春の霞がとぎしてはつきり見えなかつたが。春雨は霞の間を分けてシト／＼と降つて來る實感實境を直寫して使にもたせて送つた歌。霞は覺束ない感を伴ひ、春雨は淋しい感を表すと共に涙を冥想させる。上句は自家の事を敘し、下句に

第二篇 俊成の作品と評釋

自然を描きて、自家の感想を寓してある。しみぐとふる雨に情緒の限りなき纏綿があり、餘情に満ちた作。

百首の歌奉りし時

逢ふ事はかたのゝ里の笹の庵しのに露ちる夜半の床かな

(釋) 逢ひ難い戀を詠じたもの。難いを河内の御狩場交野かたのに云ひかけた。交野の里の篠葺の庵に宿つてゐるとし、逢へない人を思つて夜もおちく寝られぬ上に、荒れた住居とて夜寒の露が篠の上にはろりくと散りかゝり、寝れない身を一層悩ますと、佗しい氣持を具象して謡つたもの。表現は秀句を用ゐたり、しのに露ちるなど云つてあるのが艶に聞える。餘情ある作。しのは篠の庵から引き出されたもの。

入道前關白左大臣に侍りける時、百首の歌の中に忍戀

散すなよ篠のは草のかりにても露かゝるべき袖の上かは

(釋) 忍戀の意を詠むのであるから、相思のことを世間へばつと散さないやうにと相手にまづ誂へた。はぐさといふ雜草は葉は篠に似て細長く、粟のやうな穂を着ける、植ゑたものもこの草の爲にちゞけてしまふ。農夫はその蔓衍を嫌ふて刈取る。爰はさういふ草を刈るといふを假りといふ詞を引起す序とし、やがて涙を露といふ習より、その露を袖の上に散りかゝらないやうにせねばならぬ、大切な袖であるといふを歌の表とし、意は人目を包む爲に我と我が涙を制し、いかなる場合にも涙をこぼすな。御互の袖は涙に朽ちさせるものと違ふと堅く戒めた。内には強き戀の意を外にはあらぬものを用ゐて幽玄の體となした。

かた思の心をよめる

憂身をば我だに厭ふいとへたゞそをだに同じ心と思はむ

(釋) 諦めのつかないのを諦めようとする。如何にしても人の靡かないので、つくづくこの身が

第二篇 俊成の作品と評釋

嫌になつた片思は實に堪へられぬ。厭世は我が今の志であると捨鉢にいふ。もうこの上は我に靡けとは云はぬ。甚だ矯飾のやうであるが、今後は我を厭へと申さう。然らばあなたと私とは對象は違つてゐるが、厭ふといふ點が一致するから、せめてこれを慰藉にしようと思智を弄した表現。厭ふと厭へ、及二つのだにの助詞を重ねて用ゐたのは作者の意識して効果を多からしめようとの手法である。これも三段切の歌で、小刻みにしたところに情緒の切迫を示してゐる。

女に遣しける

よしさらば後の世とだに頼めおけつらさに堪へぬ身ともこそなれ

かへし

藤原定家朝臣母

頼め置かむ唯さばかりを契にて浮世の中の夢になしてよ

(釋) 贈答の歌で、實感を背景としての作。どうしても別れなければならぬとの事なら拵けてそ

の意に任すが、せめて來世は一蓮托生の身となると盟つて置いてくれ。さうでないといは平氣では生きてゐられない。思ひ死をさせないやうにと要求した。あはれの深い歌、餘義ない事情があつたと見える。婦人は若狭守親忠の女で、美福門院に仕へ加賀局と云つた人、長子成家も定家も同じ腹である。答の歌を見ればそれを諾した意を述べてある。俊成には丹後守爲忠の女もその室となつてゐる。加賀局は正夫人のやうに見える。この夫人と相添ふことが數十年、建久四年三月に歿した。その墓所に詣で、「稀に來る夜半も」の歌を詠じてゐる。

## 千五百番歌合

あはれなりうたゝねにのみ見し夢の長き思にむすぼゝれなむ

(釋) 逢うて遇はざる戀を詠じた歌で、最初にあはれなりと結果を述べ、下に事件と感想とを並べ舉げてある。假寝に見た夢といふのは一たび逢つた事をいひ、その短い夢のやうな會見以後は全く遇ふ機會がないので、長い苦の種となつてゐる。これは哀れに切ないことゝ第一句にかへる。

第二篇 俊成の作品と評釋

斯の如き一句切の歌は古い形式を破つた手法で、中世以降漸次好み用られるやうになつた。思ふに漢文學などの影響もあらう。

崇徳院に百首の歌奉りける時、戀の歌、

思ひわび見し面影はさておきて戀せざりけむ折ぞこひしき

(釋) 忘れられた戀の苦しさを詠じたもので、第一句のわびにて句を切るべく、相見た時の嬉しかつた追懷は今は何にもならず、むしろ戀しなかつた昔がなつかしいと、過去の快心を詛ふやうな口調で粘り強く敘した歌。戀せざりけむ折ぞ戀しきの句は想にふさはしい表現である。

入道前關白太政大臣、家の百首の歌よませ侍りけるに、立春の心を

年くれし涙のつらゝとけにけり苔の袖にも春や立つらむ

(釋) 立春を喜ぶ歌、僧侶の服を苔の衣と詠み習はして來た、苔の袖もまた同じ義に用ゐる。昨



年の暮の憂愁も去りて佛門に歸したこの身にも喜ばしい春が訪れるのか知らんと意。涙のつららが解けるとは誇張の表現であるが、東風解凍と詩にも諷ひ、古今集には「鶯の水れる涙今やとくらん」とあるに本づきて句をなせるもの、年くれし涙とあるは暮れゆく年を惜むばかりでなく、一身一家の上に心を碎くことがあつたのを指したと見るべきか。涙のつららは去年苔の袖に張つてゐたとした。但し誇張度を過ぐれば滑稽となり易し。典據があればさほどには感じられないが巧んだ歌作りものゝ歌であることは免れない。

世を遁れて後百首の歌よみ侍りけるに、花の歌とて

今は我吉野の山の花をこそ宿のものとも見るべかりけれ

(釋) よろづの人の憧れをもつ吉野の櫻も仕官の身には好機がなくて賞翫することがむづかしかつたが、遁世した今はそれが思ふに任せる。花時吉野を訪れて、我が庭の花を賞するやうな氣持で、心のまゝに眺められる。白氏文集に勝地本來無<sub>二</sub>定主<sub>一</sub>、大都山屬<sub>二</sub>愛<sub>レ</sub>山人<sub>一</sub>とあれば、大自然

第二篇 俊成の作品と評釋

を我宿のものとなし、その中に我も融け合つてしまふとした。蓋し自然美の強い憧から來たのである。

入道前關白太政大臣の家の歌合に

春くれば猶この世こそ忍ばるれいつかは斯る花を見るべき

(釋) 松殿關白基房家にての歌合の作、基房が入道したのは治承二年である。備前から歸洛した後のことで、俊成もその頃は入道して釋阿といつた時代と思はれる。一旦遁世したものゝ公の邸の美しい花を見ると、矢張この世が戀しくなると、花の美に刺戟されて、道心も姿を隠し、遙か遠い世界の極樂淨土のことを忘れた。一面挨拶の意もあるが、唯美的な心情に壓倒された觀がある。

同じ家の百首の歌に

てる月も雲のよそにぞゆきめぐる花ぞこの世の光なりける

(釋) 景物の尤として並稱される月と花を對比した作で、天上の花と見るべき月は美しい極みに見えるが、雲の外をゆきめぐつてゐて我等に親しみが少い。地上の花は我等の生活してゐる世界の光のやうで、この方が一層懐しいとした。一方は動的、一方は靜的の差があるが、月には照るといひ花には光といひ、二者の比をうつくしく敘した。靜かなこの世の美を味ふことを好む作者の心胸が窺はれる。

述懐百首歌中に五月雨

五月雨はまやの軒端の雨そゝぎあまりなるまで濡るゝ袖かな

(釋) 青年時代の作。切妻造りの屋根の端の方から雨がぱたぱたと落ちて来て、袂のぬれ方は一方でないといふ五月雨を表に詠じて佗しさを述べてある。中古によく謡はれた「東屋のまやのあまりの雨そゝぎ我立ちぬれぬこの戸開かせ」とある催馬樂を本歌としたもので、従つて袖の格段に濡

第二篇 俊成の作品と評釋

れるといふ裏に涙のことをこめたもので、戀の心も匂はせてある。雨そゞぎのあまの音を繰返しあまりと調をなしたもので、上三句は有心序である。まやは二方葺きおろしの屋根で、漢字では兩下の字を宛てる。建築學上切妻造の名を用ゐる。二三句は何となしに侘しい感じがある。あはれのこもつた歌である。

永治元年讓位近くなりて夜もすがら、月を見てよみ侍りける

忘れじよ忘るなとだにいひてまし雲居の月のこゝろありせば

(釋) 集によると、霜月十日餘のことゝある。霜月頃の月は悽愴の感があるものであるが、日頃眷遇を蒙つてゐた崇徳天皇が父鳥羽院の強請により御齡若くして御讓位になるといふので、名殘惜しく終夜月を見あかした時の作で、その時の實感は肝に銘じて忘れられない。終夜相對してゐた禁中の月もせめて忘れずにあつてくれと云ひかけた。若し我等と同じ心をもつてゐるならばと反轉法を用ゐ、その表現を強くした。忘れじよ忘るなと反覆した形は俊成の好んで用ゐた手法で

ある。

崇徳院に百首歌奉りけるに

いかにして袖に光の宿るらむ雲居の月は隔てこし身を

(釋) 雲の上の月とは自分はいつも隔たつて來た身である。さればその影は自分の身のどこにもささない筈である。然るに我が袖の上に月光の宿るのはどういふ譯か知らぬと自ら訝かつた意を表とし、裏には昇敝がいつも自分は後れがちでまだ昇殿を聽されない身、それを歎く涙で袖が濡れてゐる、そこに月の光が映るとした。自己の心情を翹へて傷るに至らざるもの。字句の上には一寸矛盾があるやうで實は當然の表現である。

秋の暮に病に沈みて世をのがれ侍りにける又の年の秋九月十餘日つきくまなく侍りけるに  
よみ侍りける

第二篇 俊成の作品と評釋

思ひきや別れし秋に廻りあひて又もこの世の月を見むとは

(釋) 人は死が近づくと思ふと、如何なる人でも物慾を離れ、宗教にたよるのが常である。一旦病の爲に覺悟した身が全快すると再び娑婆氣が出る。月日のめぐりが早く一年を經過したその日に過去を思ひ今を考へ案外の感を生じるのは萬人共通の心理である。それを秋月に對する感じとしたところに詩情がある。その意外の感を表すにふさはしく倒裝法を用ゐた。思ひきやの一句切、業平の小野詣の歌の型を襲用したるもの。

八十に多くあまりて後百首の歌召しによみて

しめおきて今やと思ふ秋山の蓬がもとに松蟲のなく

(釋) 秋の蟲の中、松蟲は待つといふ語と同じ響を有するので、何となしに親しみを感じる。八十以上の老境に入つては枯淡の生活が一層望ましいので、寂しい荒れたあたりを終焉の地ときめて、今や入らうと志した時、時は丁度秋のことゝ蓬の下に松蟲が鳴いて我を迎へてゐる感じが

する蓬の一語が荒れた侘しさを具象して餘あるもの。その述懐百首の鹿を詠じた「山の奥にもしかぞなくなる」と比べて心境の變化の著しいものがある。

千五百番歌合に

あれわたる秋の庭こそあはれなれまして消えなむ露の夕暮

(釋) 梢の紅葉も吹き拂はれとか、草花もしをれるとかいふ如く、一面に荒れわたる庭は哀れを感じしめる。まして結んだと思ふとやがて消える夕暮の露は果敢ない限であるといふに消え易い我が命のはかなさを寓してある。秋深く荒れた庭を老い衰へた身にもよそへられ、露を命に比し、夕暮は命終を想起せしめる。哀音の満ちた作。自然を主とし人生を従とし、二者一如となして餘韻を有せしめた。

雪によせて述懐の心をよめる

勅撰集入撰和歌評釋

第二篇 俊成の作品と評釋

柚山や梢におもる雪折れにたへぬ歎きの身をくだくらむ

(釋) 歎きに木を寄せるのは我が古い時代よりの歌人の常である。我慢も辛抱も出来ない悲しみの境遇にありては身を破滅に終らしめる。これを主想とし、梢に積んでゐる雪の重さに折れてしまふ柚山の木に喩へこれを客想とし、序とし、主想に結びつけた。雪折れはいづこにても起り得るが、柚人が斧を入れる柚山は大抵は奥深く、雪も多く積り、大木の梢などがほつくりと折れることが多いので、特にそれを出した。柚山やとやの助辭を置き、柚山のと云はないのはまづ柚山を提出し、その全景を豫想せしめる働がある。その重くるしい感が堪へぬといふによくきくのである。

題しらす

老いぬとも又もあはむとゆく年になみだの珠を手向けつるかな

(釋) 歳暮の歌である。年がよると、明日死ぬるかも知れぬと思ひながら、又來む年に逢ひたい



と思ふ。それに附けても珠なす涙が落ちる。これはすべての老人の同じ境地であらう。物を頼むときは何か捧げ物をする習俗であるから、自分は澁ぐ涙の珠を歳徳神に手向けたことだと第四五の句にそれを趣向とした。悲しい涙が艶に聞える表現である。

太神宮に奉りける百首の歌に若菜をよめる

けふとてや磯菜つむらむ伊勢島や一志の浦の蟹の少女子

(釋) 春になると若菜を摘む。正月七日若菜節供にはそれがなくてはならぬ。海邊の人は波うち際などに生へてゐる防風の如き磯菜を摘むであらう。と地方にても古史にゆかりの多い伊勢の一志の浦の蟹の乙女がと指した。俊成が特にその地を指したのは太神宮に奉る若菜をその邊より奉る故實などを聞きての事と思はれる。尙「いそ」「いせ」「いち」と音を重ねて節奏の美をなしてゐる。都にゐて遠きわたりの七日若菜節供を想ひよせたもの。下句は萬葉風のもの、當時にありては新味を有したものと見られたであらう。

第二篇 俊成の作品と評釋

山家松といふことを

今はとてつま木こるべき宿の松千代をば君となほ祈るかな

(釋) 後撰集雜の「住み侘びぬ今は限りと山里に爪木こるべき宿もとめてむ」を本歌としての作か。併しそれには世を厭ふ哀音があるが、これはその詞だけを利用して祝の歌となしたるもの。文選の古詩に松柏摧爲薪の語もあり、老木はやがて枯れる、さらばもう切つて薪となしてよいと實利主義の立場から考へるものも少くないが、松は榮え久しくめでたき例に引かれるものであるから、残し置く庭の松に君の千代をかけて祈るとした。哀音を轉じて樂音のひびくやうにせしところその手腕と見るべく、これを隱遁せむとてなど説くのは作者の意圖であるまい。唯山家にある松を題としたるもの、利用一點張でなく、歌人は風流に扱ふのである。

述懷百首の歌よみ侍りけるに

いかにせむ賤が園生のおくの竹かきこもるとも世中ぞかし

(釋) 遁れようと思つても、この世は絶対に思ひのまゝになる所はいづこにもない。よし賤民の庭のおくまつた所に竹垣を結びわたして籠居しても、浮世の風は吹いて來て生死の喜悲を始めもろ／＼の塵事がつき纏ふもので、それは何とも致し方ないと述べた歌。第一句にいかにせむと困惑の敘述をなしたのは強い表現、奥の竹よりかきと跨げて竹垣の奥を思はせ、竹の縁にて世の詞を點出した。一體に屈折の句が多く調姿はなだらかでない。音律的でもないが、ねばり強い歌とみるべく、この二三四句の如き實景が今も嵯峨あたりには見られる。唐國の竹林七賢を諷した意味も多少こめたるか。

題しらす

うきながら久しくぞ世をすぎにける衰れやかけし住吉の松

(釋) 憂いつらい境遇にありながら、自分は高齢を保つて今日に至つた。平生祈願をこめてゐる

第二篇 俊成の作品と評釋

住吉の社の松の木が私に對しなさをかけたお蔭かとの意を表した作。俊成が住吉神に詣で、歌の爲に祈願をこめた話は正徹物語などにも載つてゐる。住吉の松と久しいとの語は古今集の「我見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾世經ぬらん」などの歌に見る如く、互に聯想され來つたのを襲用した。哀れやかけしは疑問の體にしたところ却つて餘韻を生ずるか。

述懷百首の歌よみ侍りける時、紅葉を

嵐吹く峯の紅葉の日に添へてもろくなりゆく我が涙かな

(釋) 事の由は擧げてはないが、日一日と涙もろくなるといふことを主想とし、第一第二句は脆くを引起す序であるが、同時にその詠んだ季節も暗示してゐる。所謂有心の序。秋にあひて愁に沈み、山の紅葉が嵐に吹かれ、日を透うて脆く落ちるやうに涙が落ちる狀を喩を假りなだらかに云ひ下した。

## 曉の心を

曉とつげの枕をそばだてゝきくも悲しき鐘の音かな

(釋) 夕の鐘の音は淋しいもので、無常を聯想させるが、曉鐘を寢床にありて耳を立てゝ聞いても今は佗しく悲しい。その理由は云つてないが、枕をそばだての語は白氏文集の「遺愛寺鐘欬枕聽」に據つたので、きぬくの別でなくて、草庵の淋しさや年老いて行先きの短きを思ふ情などから、悲しいとしたものゝやうである。欬枕は枕から頭を擧げ聞き耳をすること、古は枕は黃揚つげの木で造つたのが多かつたので、こゝは曉を告げを黃揚つげに云ひかけた秀句で、白樂天の詩句に近づけたところは技巧である。

## 百首の歌よみ侍りけるに、懷舊の歌

むかしだに昔と思ひし垂乳根の猶こひしきぞはかなかりける

(釋) 年老いて亡き親を思ふ歌である。保延五年法輪に籠つて母をしのんだ歌は前にも擧げた。

第二篇 俊成の作品と評釋

昔でさへ故人となられた母を思慕したのは遠い感じがしたに、今はいよ／＼遠くなつて戀しさが一段と募つて来る。この切ない情が如何ともすることが出来ない。昔といふ語を重ねて年月の推移を強調し、「戀し」「はかなし」と相似た心境を示す語を用ゐて調をなす。用語單純にして想には深みがある。

病かぎりに覺えける時、定家の朝臣中將轉任の事申すとて、民部卿範光が許に遣しける

小笹原風まつ露の消やらでこの一ふしを思ひおくかな

(釋) 建仁の始、俊成八十七歳頃の作か。愛子定家の近衛中將に轉任が出来るやう、民部卿に取なしを乞うた歌で、自分の命は且夕に迫つてゐる。子の一條が氣にかゝつて極樂往生が遂げられさうにもないとの意を叢生してゐる篠の葉に置いてゐる露の風が吹けば忽ち消えて了ふ。吹かない間を我が命を喩へ、此の竹の一節といふに子を秀句とし、併せて轉任の一事を匂はせてある。死に臨み執念を遺すは涼しき佛國にゆく障ともなる。その意を汲んで戴きたいと言外に暗示して

る。

千載集撰び侍りける時、ふるき人々の歌を見て

行末は我をも忍ぶ人あらむむかしを思ふこふるイ心ならひに

(釋) 集を撰むに方り、故人の作を味ひて、屢昔なつかしい感じを起した。この集の出來たにつけて、私が古人を慕ふ癖があるやうに、私のことも今後忍ぶ人が出來て參るであらうかと、謙退の上にも自家の信念を述べた。表現が自然で、永遠の時の流れの上に自己を浮べて見た心が窺はれる。

崇徳院に百首の歌奉りける無常の歌

世中を思ひつらねてながむれば空しき空にきゆる白雲

(釋) 過去から現在、現在から未來といろく世の中を眺めてみると、終に無に歸する。白雲は

勅撰集入撰和歌評釋

第二篇 俊成の作品と評釋

たなびいてゐると見えてゐるが、はてしもない大空の中に消えゆきて、今は一點の塵も留めない。歎きながら空を見つめてゐた時の實景を素描して、やがて無常を暗示した作で、限りなき廣さと眇たる我身のたよりなきとが漂うてゐる。

入道前關白の家の百首の歌よみ侍りけるに

神風や五十鈴の川の宮柱いく千代すめとたて始めけむ

(釋) 我が國民の最も崇敬する伊勢神宮をたゞへまつた神祇の歌である。神橋をわたりて五十鈴の川の清き流にて手洗ひ口すゞぎして千歳を重ねた大木の蔭に立つ時、神威のいやちこにまして、おごそかな宮殿の幾千代の久しきに互つて皇神がこゝにお住まるになるやうにと宮柱をお立てになつたであらうとの念は自ら涌出する。すめば住めの意なるが、上の五十鈴の川とあるので澄めの意をかけてある。神風は伊勢にかける枕詞で、やがて五十鈴にも冠らせる。宮居の出來た起原の悠久を述べて、神威の尊さを暗示してある。



文治六年女御入内の屏風に臨時の祭かける所をよみ侍りける

月さゆるみたらし川に影みえて氷にすれる山藍の袖

(釋) こゝにいふ臨時祭は山城賀茂の臨時祭で、十一月の下の酉の日に行はれる。この祭は今でも古式で取り行はれる。奉仕の人は小忌衣を装束の上に着る。これは單の白布で、山藍をもつて模様を摺りつけてある。神事は夜間に取り行はれるので、月光を帯びてさながら氷にすつたやうな青摺の衣の袖が月光の冴え渡つた神前の御手洗川に映ると實景を敍した。塵を離れた莊嚴の意が言外に溢れる感がある。畫讃の歌として上乘のもの。

春日野のおどろの道の埋れ水末だに神のしるしあらはせ

(釋) 大和の春日神社は天兒屋根命以下四柱の神を祀つてあつて、藤原氏の祖神と仰ぐところ、俊成もその立派な家筋である。春日野に茂つてゐるおどろの下に木の葉や草などの蔭になつて見

第二篇 俊成の作品と評釋

えない水も同じ流の末と靈感あらたかな神がよく見えるやうにして戴きたいと祈願の歌である。大臣のことを漢語には棘路といふより、おどろの下といふをおどろの路と翻して大臣家の流れといふことを下にもたせたのである。

待賢門院の中納言人々に勸めて二十八品の歌よませ侍りけるに、序品廣度諸衆生、其數無有量の心を

渡すべき數も限らぬ橋ばしらいかに立てける誓なるらむ

(釋) 大乘佛敎の妙典である法華經の序品中の要文を翻した歌で、その文句は靈鷲山の釋迦の御前で、文珠によつて語られた彌勒菩薩の前生の經歷中の語句である。衆生濟度の數限りないことを、渡すといふより橋を聯想し、橋杭の數も無數であると思想的に謡つたものである。

美福門院に極樂六時讚の繪に書かるべき歌奉るべき由侍りけるに詠侍ける。大衆法を聞き

今ぞこれ入日を見ても思ひこしみだのみくにの夕暮の空

(釋) 「極樂六時讚といふは晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜の六時に分けて彌陀の淨土の依正二莊嚴を讚嘆したもので、これが和讚は惠心僧都の作と云はれてゐる。長秋詠藻下卷に收めた六時讚歌三十四首の中、こゝには日没讚を詠つた最後の一首である。みだは阿彌陀の略、無量壽佛と譯する。作者は經文にある金の色白銀の光まばゆき淨土の夕映えの空を常にあこがれ來つた。今この入日の美しい色相を見ては大衆が喜んで瞻仰するとある如く、淨土の現出と思ふと、娑婆の世界と極樂淨土とを一つに見なした歌、量りなく妙華が天より散亂し來る繪面を思はしめる。

同

曉いたりて浪の聲金の岸によするほど

古の尾上の鐘に似たるかな岸うつ浪のあかつきの聲

第二篇 俊成の作品と評釋

(釋) これは前の六時讚の後夜讚を詠じたものの一首で、金の岸は極樂界の海岸をいふ。この和讚の始にも念佛を七遍唱へて、次に

頭 曉到てなみの音

和 こがねの岸によするほど

あけなむとすれば風の音

珠のすだれをすぐる間

後夜の時分來りては

佛法僧を念すべし

と謡つてゆくのである。岸うつ浪の繪に曉の聲を歌で加へ、これは娑婆世界に於ける播磨の尾上の寺の鐘聲に似たと感嘆した。尾上の鐘は高砂の浦より引きあげたと傳へ、天女の像が彫つてあり、すぐれた鯨音を發すると云はれ來つてゐる。一首畫讚、有聲の畫を以て無聲の詩を補つてゐるもの。

(四) 新勅選集

立春の歌とてよみ侍りける

天の戸をあくる氣色も靜にて雲井よりこそ春は立ちけれ

(釋) 第一句「天の戸を」は開くるといふを夜の明くるにうつして枕詞の如き用をなす。雲居は高き義を有するので禁中の意に用ゐるのが常である。昨日にかはり今日は明けた空の氣色が靜で立春といふにふさはしい。後の俳句文學に「元朝や神代のことも思はるゝ」といふ如く、立春の朝は人界の喧擾もなく、空も靜謐である。この靜かな春の雲の上から立ち始めて一般に及ぶであらうとした。前句は風景をいひ、下句はその由つて來るところをいふ。日神天の岩屋戸におこもりになつた時、手力雄命が岩戸を開き天地があかくなつたそのかみを匂はしてであると共に雲井を禁中によせ、そこより一般の春が立つと皇室尊崇の意をも含ませたるが如し。

第二篇 俊成の作品と評釋

後徳大寺左大臣十首の歌よみ侍りけるに、遠村霞といへる心を詠み侍りける

朝戸あけて伏見の里にながむれば霞にむせぶ宇治の川浪

(釋) 題詠であるが、都の南、伏見の里に宿つて、早曉戸をあけて眺めた心持で詠んだもので、東南三里も隔てゝ流れてゐる宇治川を豫想し、遠き彼方には霞がかゝつて見えないが、滔々と流れる宇治川が岩にあたり咽ぶが如き音を立てゝゐるとし、霞の中にも音は隠れないことを云つてある。伏見では宇治の川音は實際は聞えないが、そこは趣向としたのである。後撰集の「菅原やふしみの暮に見渡せば霞にまがふ小泊瀬の山」の歌を踏まへての作。但し後撰の伏見は大和の地名である。

梅が香も身にしむ頃は昔にて人こそあらね春の夜の月

(釋) 正治二年二月五日守覺法親王家の御室撰歌合の三番右の歌で、もとは第四句「人こそとはね」となつてゐたのを判詞より考へて定家の改めて入れたもので、伊勢物語の在五中將が「月や

あらぬ春やむかしの春ならぬ」の歌を踏まへての作なることは作者の自らことわれるやうである。梅花のかんばしく身にしむ程面白くあつたのは青年時代のことで、今来て見ると、春の夜の月は昔のやうに梢にかゝつてゐるが、懐しい人はゐないと追懐した作で、想は業平の詠に由つて詞句を改めたものである。古歌を離れて見ると、餘情のある體で、上二句は艶なところがある。

崇徳院近衛殿に渡らせ給ひて遠尋ニ山花ニといふ題と講ぜられ侍りけるによみ侍りける

面影に花の姿をさきだてゝいくへこえ來ぬ峯の白雲

(釋) 壯時の作。遠い山の櫻の美しいさまを心に描いて、幾つかの高い山を躓えて來た。山に分け入るには案内者が必要だ。こゝには豫想した花の姿を先達とした表現が巧みで、一首の調が明朗で、上三句にはまだ見ぬ花を心眼にゑがき、下二句は白雲とまがふ高峯の花を分けゆきて、ふり顧みた時を敘してある。新古今時代歌人の好む體である。

第二篇 俊成の作品と評釋

正治二年百首の歌奉りけるに、春の歌

雲や立つ霞やまがふ山櫻花より外も花と見ゆらむ

(釋) 山一面が櫻が咲いてゐるやうだ。そのあてやかな美しさはあたりをも照らして花と見せるのか知らん。見渡したところ、白雲が山一面に立ち渡つてゐるのか、或は春霞がそれと紛ふのか。あまりに大きな美しい光景に接し恍として疑つた心持を述べた。上二句に對句を用ゐたのは「春や疾き花や遅き」などの調に倣つたもの。花より外の語は行尊大僧正の歌にも見える。

故郷山吹といへる心を詠み侍りける

ふりぬとも芳野の宮は川きよみ岸の山吹かげもすみけり

(釋) 故郷といふに芳野の宮を出した。萬葉卷一柿本人麿の長歌にも詠まれてゐるところ。いはゆる瀧のみやこである。そこをめぐりて流れてゐる川に岸の山吹のうつゝてゐるのを賞美した作。建仁元年三月土御門内大臣家歌合の歌にて、それには第一句が「ふりぬれど」となつてゐる。世



世の御門が大宮人を従へて屢々行幸ならせられた吉野行宮は年移り物かはりて舊觀はないやうであるが、河の流は昔のまゝ清くて、岸の山吹の影のうつゝてゐるのが澄みて見えるとの意。影もすむといふのが一首の眼、古今集貫之の「芳野川岸の山吹ふく風にそこの影さへうつろひにけり」を本歌としたもの。「ふりぬとも」と改めて假定としたのは吾人の贅せざるところ、矢張歌合の加く、「ふりぬれど」を是とする。

久安百首の歌奉りける時三月盡の歌

行く春の霞の袖をひきとめてしをるばかりや恨かけまし

(釋) 人の心をとらへてゐた九十日の春光もけふで終つてしまふかと思へば、一方ならず惜しいことである。この心を戀人のにげゆく袖をとらへて泣きて訴へ恨むやうにおかしく言ひなしたのも。霞のことを霞の衣、または霞の袖などいふ。而して露や涙で袂のぬれることをしをるといふので、こゝにゆく春の霞の袖のしをると云つたのは技巧である。巧に擬人法を用ゐてある。願ふ

第二篇 俊成の作品と評釋

に俊成の師基俊の詠んだ俳諧歌「露深き尾花が袖をひかへつゝなく／＼秋をとどめつるかな」の歌に據り、秋を春に轉じ、露を霞に換へたもの。

同じ百首夏

さらぬだにふす程もなき夏の夜をまたれても鳴く郭公かな

(釋) 夏の短夜にも郭公の鳴くのを待つのはもどかしい感じがあつたに、やう／＼聞き得た時の嬉しい感じはまた格段であることを述べたもの。古今集の「夏の夜は臥すかとすれば郭公鳴く一聲にあくるしののめ」を本歌に踏まへての作。續古今集の覺性法親王の御歌「さらぬだに見る程もなき夏の夜をまたれて出づる夏の月かな」の一首は月と郭公と變つてあるばかり、詞句は相似てゐることは、契沖の新勅選評註に云つてある通りである。

法性寺入道前關白百首の歌よませ侍りける時、五月雨をよめる

降りそめて幾日になりぬ鈴鹿川八十瀬も知らぬ五月雨の頃

(釋) 幾日も降り續いた五月雨頃、伊勢の鈴鹿川の氾濫を思ひやつた歌、人麿の弓月嶽の歌などに則つた作か。第三句以下はいづくの川でもよいが、嘗て矚目したこの川を思ひ出したとしても、或は實景を見たとしても善いが、無論題詠であらう。八十瀬も知らぬと云つたところが、降り續く五月雨にふさはしい。全體に勢づよく雄渾の作ではあるが、尙作者は第一句の「ふりそめて」のふりに振りを思はせ、その縁語の鈴鹿川と相應じた纖巧も見逃してはならぬ。それは當時歌人の常套手段ではあるが。

久安百首の歌奉りける秋の歌

衣うつ響は月のなになれや冴えゆくまゝにすみのぼるらん

(釋) 月下に婦女が砧をうつてゐる。夜が更け月の冴えるまゝに、きぬたの響もすんで來る。すると、その響と月とは如何な關係があるものかと、本質的に關繫のないものを同時關係からくつ

第二篇 俊成の作品と評釋

つけた趣向である。家隆卿の

冴えのぼる響や空にふけぬらん月の都も衣うつなり

の一首は師の歌を本に答へた趣がある。俊成は何なれやと疑ひて抑へ、らむと推量法にて結ぶ手法を好んだと見え、「我袖は秋のうは葉の何なれやそよめくからに露こぼるらん」の如き類が少ない。何なれやととぼけた風に云つたのが爰にはふさはしい。

後法性寺入道前關白の家の歌合に紅葉をよみ侍りける

しぐれゆく空だにあるを紅葉葉の秋はくれぬと色に見すらむ

(釋) 季節の推移は人心を刺戟する。時雨模様は隱鬱を感じしめる。暮秋の自然は人をして悲哀を感じしめる。空のしぐれるだけでも佗しいのに、地上の紅葉は段々色濃く染めて一たび木枯がうち過ぎると皆散り盡しさうで、秋の終になつたことをわびしさうに知らせると、時雨と紅葉と二段に重ねてその意をあらはしたものの。

## 久安百首の歌奉りける時、冬の歌

月きよみ千鳥鳴くなり沖つ浪ふけひの浦のあけがたの空

(釋) 月光のさやかな下で千鳥の鳴く清絶の光景を思ひ浮べた作。ところは和泉の吹負ふけひの浦、時分は夜明け方。千鳥の名所として聞えたこの浦に夜も次第に更け明け方の空にその聲を耳にする感じを豫想した歌。地名のふけひに夜ふけをもたせ、それが曉に移る間を思はせる。貫之の佐保川邊の千鳥を聞いた歌などを則として作したものか。

## 久安百首の歌奉りける旅の歌

我が思ふ人に見せばやもろともにすみだ川原の夕暮の空

(釋) ひとり阪東に旅して業平の都鳥の歌で名高い隅田川原の夕景を豫想しての作。この頃もまだ僻遠の地、ものゝあはれさを沁々と感じさせたに違ひない。この夕暮の空を愛人に見せたい。願

第二篇 俊成の作品と評釋

はくは諸共にそこに住んで見たいと隅田のすみの音に云ひかけた。渺茫たる平原に銀蛇のうねるが如き隅田川に夕日を望んだ景は艶なところもあるが、ひとり旅の淋しさは寂寞を感じしめる。

同

遙かなる蘆屋の沖のうきねにも夢路は近き都なりけり

(釋) 都から遠く隔たつてゐる蘆屋の浦の沖合に船かぶりして、梶などを枕として寝てゐて戀しい都の夢を見たが、その道中は實際とちがつて極めて短い距離であつたの意を述べた歌で、遙かなる蘆屋と近き都とを對照してある。蘆屋は攝津にもあるが、歌から見て筑前の蘆屋の浦を豫想したものであらう。

待賢門院中納言人々すゝめて法華經二十八品の歌よませ侍りけるに、譬喩品其中衆生悉是

吾子の心を

孤子となに歎きけむ世の中にかゝるみ法のありけるものを

(釋) 親に別れ、自分はひとり頼りないものだと思つたものが、もろ／＼の人々は悉く佛子であるとの有がたい佛説を聞いて、今までどうしてさう歎いたのかと、悟を開くにつけて過去の迷を顧みた意を詠んだもの。窮子が親の許を離れ、さまよふこと五十餘年にして救はれたことを詠じた作。譬喩品といふのは、方便品で説いた説を譬喩及因縁談を以て解説した第三品で、三界を火宅に、三乗を羊鹿牛の三つの車に喩へ、火に溺れようとするものを救出すなどの譬喩を以てした。下句は抽象的ではあるが一首として調つた歌である。譯和歌ではあるが、俊成も夙く父にわかれ、不遇を歎じ感傷的な歌を多く詠んでゐた時、この經文に接し、みづからにも悟るところが有つて、かくの如き詠をなし得たのであらう。

隨喜功德品

谷川の流の末をくむ人もさくはいかゞはしるしありける

第二篇 俊成の作品と評釋

(釋) 隨喜功德品は法華經二十八品中第十八品で、佛の功德の廣大なことを述べ、五十展轉して最後の第五十人目に到つた時の功德すら無量なることを述べ、佛壽長遠を説いたこの經を隨喜する功德の無邊なることを細かに説示されたもので、南陽鄺縣の人が川添の菊の香をうつした谷水を汲んで常に飲んでゐた爲に長壽を保つと支那でも一つの傳説となつてゐる。上三句は最後の第五十人目に當つた人を指す。きくは菊水のきくに經文の教を聽くと云ひかけたもの。いかゞは如何に五十の古語「いか」を通はしてある。さうしていかゞは反語でなくて、非常にの義にとつたものと見えるが、下句は流暢を缺いてゐる。

美福門院極樂六時讚を繪にかゝせ侍りて、かくべき歌つかうまつりけるに、虚空界をとび  
すぎて歡喜國をさしてゆかむ

手折りつる花の露だにまだひぬに雲の幾重を過ぎて來ぬらむ

(釋) 六時讚の中の晨朝讚の一首で、被化を蒙りて、十方諸佛を供養する時の狀況で、短い時の間



に虚空界を飛去るすばらしい疾さを謡つたものである。

白銀光さかりにて普賢大士來至す

白妙に月か雪か見えつるは西をさしける光なりけり

(釋) 六時讀中日没時の光景の一部で、金色世界の文殊菩薩が限りない菩薩と來至された後、國界悉く白銀光にかざられ、普賢菩薩が來至される時の狀を喩へたもので、普賢は禪定を代表し白象に騎して來ることを示したものの。

ちらばちれ磐瀬の森の木枯に傳へやせまし思ふことの葉

(釋) 久安百首の歌で、戀の歌にとりたると、異本には無常の歌としたものもある。今戀歌と見る。我が思ふ人へ送つた心づくしの歌は世間に散つても今は構はないと、忍んだ戀を通りこして捨鉢のか、或は大膽に述べた歌で、歌をことの葉といふより、それを木の葉にとり、特に山城の磐

第二篇 俊成の作品と評釋

瀬の柱を黠出し、そこに吹く風に自分の思ひのたけを書きつくした言葉を吹き送つて貰ひたい。方々へ散つて行つても今は自然に任せるとした。磐瀬に云はせ、森に洩りの義を兼ね複雑味をもたせた表現。古今六帖に「吹風になびきもしなん思ふこと我にいはせのもりのことの葉」を本歌とした。

涙河袖のみわだにわきかへり行く方もなき物をこそ思へ

(釋) これも久安百首の歌である。涙の流れるのを河と見、その溜るところの袖を海と見做す古歌は例しがある。古今集に「涙川枕流るゝ」また「涙川なに水上を尋ねけん」等一々擧げられない。涙川袖のみ和田海をわだといふに浪立てる三句は行く方もなきの序であつて、また實境を匂はしある所謂有心序である。主想は下二句にありて、途方に暮れ、處置に困つてゐる物思ひをし、心配してゐると哀情を敘した。

戀の歌よみ侍りけるに

みしめ引く卯月のいみをさす日より心にかゝる葵草かな

(釋) 逢日をかねて契つて置くが、もしや間違があつてはときめたその日から氣にかゝるとの戀の心を、毎年四月に行はれる山城の賀茂の葵祭の行事の上で謡つたもので、この祭は京都に於ける祭中の大祭で、すべての人の心を湧き立たせる。さうしてこの祭の著しい例として然るべきあたりには葵草を家の柱から乗る車等に至るまで懸けわたすより、葵に逢日を秀句とし、懸けるといふ語を物と心とにうちわたして一首を仕立てたもので、表面には不淨のものゝはいつて來ない爲に御注連を引き、修禊を行ひ小忌衣に忌緒をさし入れる當日から、愈々本祭の行はれる中西の日にかけ渡す葵草のことが心にかゝりて心配するといひ、裏に戀の心をこめたもので、行事を知らないものにはむづかしい歌であるが、よく謡ひおほせてある。

刑部卿頼輔歌合し侍りけるによみて遣しける忍戀の歌

勅撰集入撰和歌評釋

第二篇 俊成の作品と評釋

いかにしてしるべなくとも尋ね見むしのぶの山のおくの通路

(釋) 信夫山は陸奥の歌枕に入つてゐる名所で、今は磐代に屬してゐる。その奥山に通ふ道を案内者がなくとも、どうぞして尋ねて見たいものだといふを表面にし、奥深いところにこもつてゐられるわたり忍んでゆく道を知りたいとの戀を裏に含めた作で、作者の本旨は裏に存するのである。

よと共に絶えずも落つる涙かな人はあはれもかけぬ袂に

(釋) 夜ごとにいつも人のつれないことを思つて涙が落ちると歎きしてゐることをまづいひ、次に涙のとまる場所とその原因を擧げた。よといふを世にとれば、世人が我に同情しないのを恨む意ともなるが、戀の方が本意である。

崇徳院の御時うへのをの子ども忍戀の歌つかうまつりけるに

わが戀は浪こすいその濱楸しづみ果つれど知る人もなし

(釋) 上三句は序、二句は主想を示す。濱楸は濱邊に生ずる喬木にて、萬葉の「波間より見ゆる兒島の濱久木」の歌に據つたもの。但しいかに波の高い磯でも、その喬木が沈み果てることわりは考へられないと契沖が既に云つてゐるとほりて、強調するにも事實が承引出來にくい。或は濱楸そのものにつき平安末期の頃には別の植物を想定してゐたのではあるまいか。斯くて今よりいへば無理な序歌となつたのかも知れない。

後法性寺入道前關白の家に百首の歌よみ侍りける、初逢戀

思ひわび命たへすばいかにして今日と頼むる暮をまたまし

(釋) 契沖はこれは待戀の歌であつて、題意に叶はない。たとひ今日逢ふと約束して置いてもちて違ふことがあれば初逢戀の歌とは云ひがたいと云つてゐる。その説は正しい。併し契沖は第一二の句を思ひ侘びずして命のたへて存へつればこそ云々と説いてゐるが、命たへすばのすを上

第二篇 俊成の作品と評釋

のわびまで及ぼすとするのはこの歌ではいかゞであらう。思ひ侘びて消えさうに思ふ命が、それに堪へたからこそ今日の逢瀬が期せられる。もし堪へなかつたならばどうして今日の夕暮が待たれようかと逆に云つたものと解すべきではあるまいか。頼むるは頼ましめるに同じく、人にあてにさせるといふこと他に多くの例がある。

月前戀といへる心をよみ待りける

戀しさの詠むる空にみちぬれば月も心のうちにこそすめ

(釋) 戀の苦しさに大空を見つめてゐると、その思ひは空一面に擴がる。して見ると大空を渡る月も我が心の中に宿ると大きく擴がりをもつた作ながら、前後の關係が緊密でない。契沖も下旬今少し足はぬやうだとしてゐる。

いかにせむ天の逆手をうちかへし恨みても猶あかずもあるかな

(釋) 恨戀を詠じた歌、熱烈な戀情を謡ふので、いかにせむと第一句切を用ゐた。上代人は恨のあるときは相手に狂事のあるやうに呪詛する。呪詛の一つの方法として兩手を體のうしろにまはし逆手を打つ習のあつたことが古事記等に見えてゐる。逆手を打つと裏が見える、それを恨みに轉じた。うちかへしく恨んでも悔しさが霽せないと執拗く述べてある。契沖はあまのさか手をうちて呪ひをすることは伊勢物語に見えてゐて、あまのは天のなるを此作者は海人逆手と心得てよんでゐるのは宜しくないと思ふ。併しあまを海人にとりなし、うらみに浦見をかけたとするも一つの解説であると思ふ。作者は兩方をかけて技巧となしたと自分は見てゐる。

世をのがれて後栖霞寺に詣で、歸り侍りけるに、大内の花の梢さかりに見え侍りけるを忍びて窺ひ見侍りて、頼政卿のもとに遣しける

古の雲居の花にこひかねて身を忘れても見つる春かな

返　し

從三位頼政

第二篇 俊成の作品と評釋

雲居なる花も昔を思ひいでば忘るらむ身を忘れしもせず

(釋) 大宮仕をして紫宸殿前、左近櫻を賞美したことが忘れられないで、法體となつた。今の身の上も憚らず、忍びて眺めたことを風月の友なる源三位に贈つたもので、一首の義隠れたところはない。頼政の歌は忘るといふ語を重出してあやとなす。贈答の體。

春日山いかに流れし谷水のすゑを氷のとちはてつらむ

(釋) 大和の春日山は藤原氏祖神の鎮座してある山、そこより流れた谷川の末を氷が鎖して了つてゐるは何故かと敘景のさまを表面にて、底には藤氏の裔なる自分の仕途の塞がれたのを追懐した作。それが歌の本旨である。因に云ふ、記紀萬葉集等にはかすがの枕詞に「はる日の」を置いた。春日山に春をこめて、春風に氷は解けると古今集の歌人は詠んでゐる程なのに、氷のとちるのは如何なることかといふ意をも含ませたものか。



四方の海を硯の水につくすとも我思ふことかきもやられじ

〔釋〕 述懐百首の中の述懐の歌。我が思のはてしのないことを敘した作。前句は四方の海を硯の水に用ゐるとしても、我思のたけを人に書いて表すことは不可能であると誇張して述べた作。後世にはこの歌により己が隨筆に四方の海と題した人もある。

西行法師自歌を歌合につがひ侍りて判の詞あつらへ侍りけるに、書き添へて遣しける

契りおきし契のうへに添へおかむ和歌の浦路の蟹のもしほ木

〔釋〕 西行は御裳濯川自歌合三十六番を作つて、俊成に判を乞つた時、判詞の終に添へて贈つた歌。

春日の社に百首の歌よみて奉りけるに、橋の歌

都いで、伏見をこゆる明方はまづうちわたす櫃川の橋

第二篇 俊成の作品と評釋

(釋) 實景を敍した歌。櫃川は北山科から出て音羽川を併せ、六地藏のあたりで宇治川に注ぐ小流である。六地藏の邊にある櫃川橋は源平盛衰記などにも落武者の過ぎ行つたことが見えてゐる。伏見街道は古は今よりも山の方を通つたのである。

久安百首の歌奉りける長歌

しきしまや 倭島根の 風として 吹き傳へたる ことの葉は 神の御代より かは竹の  
世々に流れて 絶えせねば 今もはこやの 山風の 枝もならさず 静けさに むかしの跡  
を たづねれば 峯のこするも かげしげく 四の海にも 波立たず 和歌の浦人 かすそ  
ひて 藻汐のけぶり 立ちまさり 行末までの ためしをぞ 島の外にも 聞ゆるなる これを  
思へば 君が代に あふぐま川は うれしきを みわだにかくる 埋木の 沉めることは  
唐人の みよまであはぬ なげきにも 限らざりける 身のほどを 思へば悲し 春日山  
峯のつゞきの 松が枝の いかにさしける 末なれや 北の藤なみ かけてだに いふにも

足らぬ しづえにて したゆく水の こされつゝ いつゝのしなに 年ふかく 十とてみつ  
 に へにしより よもぎの門に さしこもり 年の芝草 生ひはてゝ 春の光はこととほく  
 秋かわが身の うへとのみ 露けき袖を いかゞとも とふ人もなき まきの戸に なほあ  
 り明の 月かげを まつことがほに ながめても 思ふ心は おほぞらの むなしき名をば  
 おのづから 残さんことも あやなきに 難波のことも 津の國の 蘆のしをれの かり捨  
 てゝ すさびにのみぞ なりにしを 岸うつ波の たちかへり かゝるみことの かしこさ  
 に 入江のもくづ かきつめて とまらんあとは みちのくの しのぶもちずり 亂れつゝ  
 忍ぶばかりの ふしやなからむ

## 反歌

山川のぜゝのうたかた消えざらば知られむ末の名こそ惜しけれ

(釋) 「かはたけ」は女竹の異名で、吳竹よりも葉が廣い。竹の節と節の間をよといふ。それを

世に通はせて枕詞とする。かはの音により流れの縁語がきいてゐる。「はこやのやま」は菟姑耶

第二篇 俊成の子と評釋

山の字音をさながら假字にうつしたもので、その出典は莊子に見え、仙人の居る所をいふので仙洞御所を指す。「藻汐の煙」は浦人が潮水を汲み掻き集めた藻を焼いて鹽を取る、その煙の義にて、煙の縁にて立ちまさるの序となす、上に歌人のことを和歌の浦人と云つてあるのに應じ、書き集めた歌が多くなるに喩へてある。「島の外」は八島の外の意で、海外までを指す。「阿武隈川とみわだ」逢隈川は陸奥にある名所で、上の君が代に逢ふと云ふに言掛け、みわだは水曲で水が滯り曲るところ、川より云ひ下す。「春日山峯のつゞき」春日山は藤原氏の祖神を祀つてある。

俊成は藤原氏であるので然かつけた。「北の藤波」は藤原冬嗣が奈良に北圓堂及南圓堂を建てその一門の繁榮を祈り、補陀落や南の岸に堂たて、今や榮えむ北の藤波と詠じたことは有名な話で、俊成は藤原北家の裔、御堂關白の曾孫に當るのでその沈滞不遇を啣つてゐる。藤波は懸るの縁語。「唐人のみよまであはぬ歎」俊成の師藤原基俊が堀河院百首に「唐國に沈みし人も我が如くみよまで遇はぬ歎きをばせし」と詠じた述懐のに據つた。基俊の歌は漢武故事に「上至<sub>三</sub>郎署舍、見<sub>一</sub>一老郎鬚眉皓白、問何時爲<sub>レ</sub>之、對曰、臣姓名駟、文帝時爲<sub>三</sub>郎文、帝好<sub>レ</sub>文而臣好<sub>レ</sub>武、景

帝好<sup>レ</sup>老而臣尙少、陛下好<sup>レ</sup>少而臣已老、是以三葉不<sup>レ</sup>遇也、上感<sup>ニ</sup>其言、擢爲<sup>ニ</sup>會稽都尉<sup>一</sup>とあるに據つたもの。「秋は我が身のうへ云々」拾遺集戀詠人不知の「秋はわが心の露にあらねども物なげかしき時にもあるかな」の歌により、君の御惠のうすいことを「春の光はこととほく」と云つてあるのに對した。「とふ人もなき槓の戸に云々」は新古今戀部式子内親王の「君待つと聞にも入らぬ槓の戸にいたくなふけそ山の端の月」とあるに由つた。

俊成の長歌は自分の見たのは四篇である。中にこの一篇は久安六年百首詠を召された時に奉つたもので、三十七歳の作にかゝつてゐる。起首より六句はその裔孫がこの道はひとの國より傳はらでと謡つたやうに、和歌は神代の昔から傳へて絶えないことを述べ、次の十八句は仙洞の治政に吹く風も枝を鳴さず泰平の御代つゞきて、歌人輩出し優秀な作品をとゞめ、後の今の代を見るものは嘸驚嘆するであらうと海外まで申してゐることをたゞへ、次の十三句は今日の盛時に遭遇しながら、埋木の如く沈淪してゐる我が身の悲しさを述べ、次の三十三句は身は藤氏しかも北家の流であるに、五位に敘せられて十三年その間一たびの昇敘もなく、荒れたる庭に徒に年老草を

第二篇 俊成の作品と評釋

茂らせるのみで、春の光は身に疎く、秋の露は袖に冷く、ひとり淋しく有明の月を眺め、何に付けても悄然として萎れてゐるばかりであつたにと沈淪を具體的に詳述し、最後の十二句は測らざるに恩命下りて愚詠を召されたので光榮として奉るにつけ、貧しき歌が後に止まらば、却つて慚愧の念が發するとの意を述べたもので、古今集時代の長歌と同じく、意義は七五調をなしてゐるが、言はんと欲するところを十分に述べ盡してある。俊成と互に唱和された、讚岐院の御製と左衛門督源通親、後白河院の側近に仕へてゐた靜賢法印また具佛上人など、共に當時の長歌歌人として相應の地歩を占めるものと謂はれようと思ふ。

七、十三代集撰者と俊成の作品

十三代集中、新勅撰集は定家の撰んだもので、三十五首を採つてある。今定家以後世々の勅撰の撰者が俊成の作をいかに見たかといふ上に觸れて見ようと思ふ。

新勅撰集の成つた後二十年を経た後深草天皇の建長三年に大納言爲家が奉撰した第十番目の勅

撰、續後撰集には二十六首を採つてある。集中作の多いのは定家、常盤井相國、後京極攝政の順で、俊成の作は後京極攝政に次いでゐる。爲家は尊敬してゐた祖父のことゝて當時の代表作家よりも多く採つたのであらう。併し穩健主義わるく云へば平凡主義を奉じてゐた撰者のことゝて、その傾向の作を多く選んだ。暮秋重病を煩つてゐた時、近親後徳大寺實定卿に贈つた

昔より秋の暮をば惜みしをことしは我ぞさきだちぬべき

の如き悲しい歌や、長壽を保つて建仁三年和歌所で九十賀を行はせられ、銀の杖を賜つた時の奉答の歌や、阿彌陀四十八願の歌の中の聞名見佛を齣した

秋風の峯の白雲はらはすば有明の空に月を見ましや

の類が吾人の意に合ふもので、一般のやさしいなだらかな歌の外、久安百首の旅の一首

しはつ山ならの下葉ををりしきて今宵はさねむ都こひしみ

の萬葉風なのが特に目につくばかりである。」この集の後十五年を経て龜山天皇の文永二年に成つた續古今集には二十八首ぬかれてある。歌数の多い順位から云ふと十一番目に當り、定家爲家

第二篇 俊成の子と評釋

よりも少く、後京極攝政や藤原信實朝臣と同數である。撰者が九條内府基家・民部卿爲家・侍従行家・左大辨光俊等の撰んだ爲に標準が一つにゆかなかつたのであらう。戀や冬の歌を多く採つてあるが、作者の會心の作は

郭公まつ夕暮の村雨はきなかぬさきに袖ぬらしけり

の如き幽玄味のあるものであつたであらう。哀傷の部では美福門院崩御の後、御骨を高野に納め奉つたよしを前大納言成通のもとより消息のあつた時送つた歌や、戀の歌では女の許に書いて送つた

何となく落つる涙にまかすればそことも見えぬ筆の跡かな

などが想の深いものとして私の心を捉へる。また釋教の歌では壽量品の心を詠んだ

かりそめの夜半の煙とのぼりしや鶯の高嶺にかゝる白雲

の一首が調が高い。

第十二番目の勅撰は後宇多天皇の弘安元年に成つた續拾遺集で、撰者は爲家の子二條爲氏で、



中に俊成の歌は二十二首で、歌數の多い作家の順を考へると、爲家・後嵯峨院・西園寺相國實氏定家の次になつてゐる。この集には詞書のある歌に人の意を引くのが多い。近衛院の御時御物忌にこもつてゐた夜、遣水に映つてゐた月を見て詠んだ

いにしへの雲居の月はそれながらやどりし水の影ぞかはれる

の如きは感慨に満ちた作である。崇徳院に書きて奉つた御草子の包紙に記した歌も思出の深きものであつたに違ひない。千載集を撰むに方り、西行法師から送つて來た歌やその返しもこの集に採られてある。前右近中將資盛家の歌會に詠んだ

五月雨は雲間もなきを河社いかに衣を篠にはすらむ

の一首も環境の取入れが面白い。若い時の不遇を陳べた作にも、人口に膾炙するものが入つてゐる。

次の新後撰集は後宇多院の院宣により二條爲氏の子爲世が一人で撰んだもので、嘉元二年奏覽が終つた。中に俊成の作は十八首で、數の多い順によると第八番目で、宗尊親王を始め衣笠内府

第二篇 俊成の作品と評釋

津守國助等當時代表作家より多い。十八首の中には釋教神祇の歌が比較的多く採られてあつて、五社百首の中佳吉社へ奉つた

和歌の浦の道をば捨てぬ神なればあはれをかけよ住吉の神

の一首は何等の作意もないが、和歌が往生の障になるか否かを神慮に窺つて、斯道に精進したと云はれる人の奉納の作として人の記憶に留まつてゐる。賀茂重保社頭歌合に述懐の題で詠んだ一首も子煩惱の心のあらはれであり、釋教の中には六時讚の七重寶樹の風には一實相の理をしらべて影清き七重のうゑきうつり來て瑠璃の扉も花かとぞ見るの一首が淨土の莊嚴をよく謡つてある。

第十四代目の勅撰は伏見院の院宣を蒙つて、京極爲兼が應長元年より二年の間に撰んで正和元年に奏覽に供し奉つたもので、勅撰集中異色ある集である。爲兼は同じ御子左の流であるが、二條家と對立關係をなし、爲氏爲世と相軋つてゐた。撰歌の標準を異にし、二條家が大覺寺の皇統及その信賴ある人々の作を多く取るに反し、持明院皇統及その周圍に隨ふ作家の什を多く取つ

た。この集には俊成の作は五十六首を収めてあつて、歌數の多い作家を順次に擧げると、伏見院定家、從二位爲子、後西園寺相國、俊成といふことになる。西行の如きも、相當多く取られてあるが、俊成には及ばない。爲兼は二條派よりは異端として斥けたが眼識のあつた人で、俊成の歌の撰にもそれがあらはれてゐる。

玉柳匂ふともなき枝なれどみどりの色のなつかしきかな

櫻ちり春のくれゆく物思ひもわすられぬべき山吹の花

世をうしと何思ひけむ秋ごとに月は心にまかせてぞ見る

の如きは舊來の型にとらはれてゐない歌である。この集には五社百首等の晩年の作も大分とつてある。戀の歌には

よそながらさてもやみなむ憂きものは慣れてもつらき契なりけり

恨みても戀しき方やまさるらんつらさはよわるものにぞありける

の如きは想の深い方である。正治百首より抜いた

第二篇 俊成の作品と評釋

風さやくぐさ夜のねざめのさびしきははだれ霜ふり鶴さはに鳴く

の如きも下の句が新しい。

第十五の勅撰續千載集には十九首をぬいてある。玉葉集撰後六年目に二條爲世の勅を奉じたもので、京極家との對時から成つた集で大覺寺皇統をめぐる人の作が多い。俊成の歌數は第十位になつてゐる。中に待賢門院中納言の勸めによつて詠んだ法華二十八品の歌等が誦すべきである。

述懷の歌には

我袖は萩のうは葉の何なれやそよめくからに露こぼるらむ

が面白い。

この集の後四年にまた勅撰集が出来た。これも二條家の爲定が叔父爲藤の後を繼ぎて業を終へたもので、新拾遺集といひ、正中二年奏覽に供し奉つた。この集には俊成の作は十三首。中に述懷の百首に

最上河ぜゝにせかるゝ稻舟の暫しとぞだに思はましかば

の如き、五社百首の中、太神宮に上つた

かけまくも畏きとよの宮柱直き心はそらに知るらむ

の如きが佳什であらう。

第十七番目の勅撰を風雅集といふ。萩原法皇の御撰と傳へられてゐるが、近時は看聞御記により光嚴院御撰を唱へるものもある。京極爲兼の流風を受けさせられたことゝて、持明院皇統をめぐる方々の作を多く採つてあり、俊成の作をぬいてあるもの二十九首に上つてゐる。歌数の多き方より數へると第九位に當つてゐる。御入内屏風和歌小朝拜の讚に

九重や玉敷く庭にむらさきの袖をつらぬる雲のうへ人

の如き美しいけ高いさまを謡つたもの。六時讚の歌にも同じ趣のがある。花に執着して詠んだ

花にあかでつひに消えなば山櫻あたりをさらぬ霞とならむ

の如きも西行の辭世と偶ふべき作。贈答の中にはその師左衛門佐基俊に古今集を返す時の歌、定家の母の喪に比叡の山に籠つた時の作や、平治の亂に與した別當惟方が晩年に及んで俊成が千載

第二篇 俊成の作品と評釋

集を撰ぶことを聞き

藻汐草かきあつめたる和歌の浦のその人數に思ひ出ですや

と云ひ贈つて來た時

今も猶なれし昔を忘れぬをかけざらめやは和歌の浦波

と答へてその一首を採つたのは薩摩守忠度のことも聯想される。仁安元年大嘗會の賀の歌もふさはしい作である。

第十八回の勅撰新千載集は京都朝の光嚴院の論旨によりて延文三年（正平十三年）に二條大納言爲定の撰進したもので、俊成の歌は十五首ぬかれ、足利尊氏などより少く、阿佛尼等と同數に過ぎない。而も卷頭にはその

春や立つ雪げの雲はまきもくの檜原に霞たなびきにけり

の歌を擧げてある。古くは卷頭の歌だと云つて特別な扱はなかつたが、後には卷軸と共に事々しく云ふやうになつて來た。俊成歿して百四五十年も経た後もかゝる歌を卷頭にする當時歌壇の

狀勢を察すべきである。

この集の成つて後四年を経て後光嚴院の貞治元年（正平十七年）二條民部卿に御沙汰があつて新拾遺集勅撰の企てが始り、三年を重ねて四季六卷を成し、中道にして歿したので頼阿上人がその業を繼いで完成した。この集には俊成の歌は十三首で、中に美福門院の六時讀の半夜讃歌

深き夜の光も聲も靜にて月のみ顔をさやかにぞ見る

が好調で、詞書のある歌には九十賀の歡びがあり、斯道に於ける信念のあらはれた作には夙く承安二年廣田社の歌合を判じた時の奥に書きつけた

敷島や道はたがへずと思へども人こそわかね神は知るらむ

の如きがある。歌としては格別もないがその志は見るべきである。

第二十代の勅撰は前集の後十三年経た永和元年（天授元年）に二條爲重が勅を奉じて撰したもので、新後拾遺集といふ。俊成の作は僅々九首採つてあるに過ぎない。中に敍景の歌には

難波潟芦の枯葉に風さえて汀のたづも霜になくなり

十三代集撰者と俊成の作品

第二篇 俊成の作品と評釋

瀧つ瀬の玉ちる水やかゝるらむ露のみしげき山吹の花

の如きがあり抒情歌には

秋の夜の深きあはれは有明の月見しよりぞ知られそめにし

が優れてゐる。但し説明となるのは當時のことゝて爲ん方もない。釋教には華嚴教義の高山頓説の心を詠じた

朝日さす高嶺の雲は匂へどもふもとの人は知らずぞありける

の如きは教訓歌として上乘のものであらう。

第二十一代目の新續古今集は前集より五十年を経て後花園天皇の永享五年に飛鳥井中納言雅世が勅を奉じ、同十一年に全部完成を見た勅撰最後の集であつて、俊成の作のこの集に入つてゐるものは二十一首で、四百餘人の作家中、飛鳥井雅縁と後小松院を除きては最も多く撰まれた方で、世々の勅撰に採らない集は新葉集ばかりである。この集にとられた歌は、文治六年の御入内屏風和歌、極樂六時讚の歌、千五百番歌合、崇徳院御百首等より佳調の歌を採つてあるのが、前



集に出てあるのは入れないとの方針が一般であるので、後の集に至るに随ひ秀歌が段々少くなるのは止むを得ない。

紫のねばふ横野のつぼすみれ眞袖につまむ色もむつまじ

の如きは可憐な歌、寄源氏戀の歌

恨みても猶たのむかな身をつくし深きえにあるしと思へば

の如き整つた歌、

和田の原漕ぎはなれぬる舟路には心もえこそつながざりけれ

の如きも海上眺望に心の腔子の裏よりぬけいで、ゆく程と謡つたもので、比較的語を盡さないでその心もちを述べた作である。

以上により世々の歌匠がいかに俊成を重んじたかが想像されると思ふ。

八、十三代集入撰和歌

(一) 新勅撰集 既出

(二) 續後撰集

年の内に春立つ心をよみ侍りける

年のうちに春立ちぬやと吉野山霞かゝれる峯のしら雲

久安六年崇徳院に百首の歌奉りける時若菜をよみ侍りける

霞立ち雪も消えぬやみ吉野の御垣が原にわか菜つみてむ

大原野の社にまうで侍りけるに、霞をみてよみ侍りける

春霞立ちにけらしな小鹽山小松が原のうすみどりなる

正治百首の歌奉りけるに

名に高き吉野の山の花よりや雲に櫻をまがへそめけむ

春の暮の歌とて

行く春はしらすやいかに幾返りけふの別を惜みきぬらむ

五月雨を

下草は末葉ばかりになりけりうき田の森の五月雨の比

六月祓を

鳴瀧や西の河瀬にみそぎせむ岩こす波も秋やちかきと

月の歌の中に

月きよみ都の秋をみわたせば千里にしける氷なりけり

蟲を

身のうきも誰かはつらき淺茅生に影さへよわる有明の月

秋の暮の歌とて

山路をば送りし月もあるものを捨てゝもくるゝ秋の空かな

十三代集入撰和歌

第二篇 俊成の作品と評釋

老の後に年の暮によみ侍りける

なか／＼に昔は今日も惜しかりき年やかへると今は待つかな

太神宮によみて奉りける百首の歌の中に

宮柱下つ岩根の五十鈴川萬代すまむ末ぞはるけき

法華經譬喻品號日幸光如來の心を

行末の花の光の名をきくにかねてぞ春にあふこゝちする

阿彌陀四十八願の歌よみ侍りけるに、聞<sub>レ</sub>名見<sub>レ</sub>佛

秋風の峯の白雲はらはすばあり明の空に月を見ましや

忍戀の心を

いかにせん忍の山に道絶えて思入れども露のふかさを

後法性寺入道前關白の家の百首の歌よみ侍りけるに、忍戀

人間はゞ袖をば露といひつべし涙の色をいかゞ答へむ

題しらす

谷ふかみ岩かた隠れ行く水のかげばかりみて袖ぬらせとや

戀の歌の中に

恨みわび猶かへせどもさ夜衣夢にも同じつらさなりけり

戀の歌の中に

乾しわびぬ蜚のかる藻に汐たれて我からかゝる袖の浦波

久安百首の歌の中に

露むすぶ眞野の小菅のすが枕かはしてもなぞ袖ぬらすらむ

後朝戀の心を

曉の別をしらで悔しくもあはぬつらさを恨みけるかな

忍びて物申しける女ことさまになりぬべしと聞きて遣しける

人しれぬ入江の浪にしほたれていかなる浦の煙とか見む

第二篇 俊成の作品と評釋

戀の歌の中に

浪こさば恨みむとこそ契りしかいかゞなりゆく末の松山

久安百首の歌の中に

人をもみ何恨むらむうきを猶こふる心もつれなかりける

重く煩ひ侍りける秋の暮かぎりに覺えければ後徳大寺の左大臣のもとに申し遣しける

昔より秋の暮をば惜みしを今年は我ぞさきだちぬべき

述懐の心を

うき身をば我心さへイからふり捨てゝ山のあなたに宿求むなり

久安百首の歌に旅の歌

しはつ山ならの下葉ををりしきて今宵はさねむ都こひしみ

建仁三年和歌所にて釋阿に九十賀給はせける時、銀の杖の竹の葉にかきつくべき歌召されけるに

大藏卿有家

百年のちかづく坂につきそめて今行末もかゝれとぞ思ふ

かの杖を給ひて後に奏し侍りける

この杖はわがにはあらず我君の八百萬代のみよの爲なり

(三) 續古今集

正治二年奉りける百首の春の歌

早蕨は今をりにもなりぬらむたるみの氷岩そゞぐなり

百首の歌よみ侍りけるに

明石瀉繪島をかけて見渡せばかすみの上も沖つ白波

題しらす

郭公まつ夕暮の村さめはきなかぬさきに袖ぬらしけり

守覺法親王の家の五十首の歌に

匂ひくる花橋の袖の香に涙つゆけきうたゝねの夢

第二篇 俊成の作品と評釋

同

秋はこはいかなる時ぞ我ならぬ野原の虫も露になくなり

崇徳院の御時百首の歌奉りける時

露しげき花の枝ごとに宿りけり野原や月のすみかなるらむ

百首の歌の中に

雲となり雨となりてや立田姫秋のもみちの色をそむらん

初冬の心をよみ侍りける

いつしかとふりそふけさの時雨かな露もまだひぬ秋の名残に

氷留水聲といふ事を

冬くれば氷と水の名をかへて岩もる聲をなど忍ぶらむ

後徳大寺左大臣家十首に閑中雪を

降りそめて友まつ雪はまちつけつ宿こそいとゞ跡たえにけれ



後法性寺入道前關白の家の歌合に

たづぬべき友こそなけれ山かげや雪と月とをひとり見れども

炭竈を

小野山や焼く炭竈はこりうづむ爪木とともにつもる年かな

年の暮によみ侍りける

一とせは一夜ばかりの心ちして八十あまりを夢に見るかな

壽量品の心を

かりそめの夜半の煙とのぼりしや鷲の高嶺にかゝる白雲

和歌所にて六首の歌合侍りけるに、旅泊聞鹿といふことを

船とむる明石の月の有明に浦よりをちのさを鹿の聲

海路時雨を

袖ぬらすをじまが磯のとまりかな松風さむみ時雨ふるなり

十三代集入撰和歌

第二篇 俊成の作品と評釋

後法性寺入道關白の右大臣に侍りける時の百首に

見るまゝに慰みぬべき海山も都の外は物ぞかなしき

崇徳院百首奉りけるに

戀しともいはゞおろかになりぬべし心を見する言の葉もがな

後法性寺入道前關白の右大臣に侍りける時の百首

身のうさの涙になれぬ袖ならばいかにいひてか戀を包まむ

寶治二年百首歌に寄煙戀

いかなりし戀のけぶりの消えやらで室の八島の名を残しけむ

女の許にかきて遣しける文に

何となく落つる涙にまかすればそこも見えぬ筆のあとかな

寄松戀を

ふりにける河原の上の松の根のふかくはいかゞ人を頼まむ

題しらす

頼めずばなか／＼世にもながらへて久しく物は思はざらまし  
もろこしの人まで速く尋ねばやかばかりつらき中はありやと

美福門院かくれ給ひて後高野の御山に納め奉りける頃、前大納言成通のもとより消息して侍  
りけるによめる

後れゐて思ひやるこそ悲しけれ高野の山の今日のみゆきは

述懐の百首の歌よみ侍りける時

春日野の松の古枝のかなしきは子日にあへど引く人もなし

千五百番歌合の歌

おちたぎつ千々の流は積れどもかはらぬものは沖つ白波

崇徳院の百首の歌に

君が代は斧の柄くちし山人の千たびかへらむ時もかはらじ

十三代集入撰和歌

第二篇 俊成の作品と評釋

(四) 續拾遺集

久安六年崇徳院に百首の歌奉りける時春の始の歌

春立つと空にしるきは春日山峯の朝日のけしきなりけり

千五百番歌合に

白妙にゆふかけてけり柳葉にさくら咲きそふ天の香山

守覺法親王家に五十首歌よみ侍りける時

よし野山花のさかりや今日ならむ空さへ匂ふ峯の白雲

前右近中將資盛の家の歌合に五月雨

五月雨は雲間もなきを河社いかに衣を篠にはすらむ

述懐の百首の歌の中に

藤袴あらし立ちぬる色よりもくだけて物は我ぞ悲しき

老の後月を見てよみ侍りける

詠むれば六十の秋もおぼえけり昔をさへや月は見すらむ

年の暮によみ侍りける

行く年を惜めば身にはとまるかと思入れてや今日を過ぎまし

四位の後、崇徳院の還昇いまだ許されざりける頃、百首の歌部類して奉りけるついでに  
雲井よりなれし山路を今さらに霞へだてゝなげく春かな

五社に百首の歌よみて奉りける頃、夢の告新なるよし記しはべるとて書きそへ侍りける  
春日山谷の松とは朽ちぬとも梢にかへれ北の藤波

述懐百首の歌の中に

神山にひき残さるゝ葵艸とぎに逢はでも過ぎにけるかな

永治元年讓位の後籠り侍りけるに、新嘗會の日皇后宮の御方に侍りける人に遣しける

珍しき日蔭を見ても思はずや霜枯れはつる草のゆかりを

正治百首の歌奉りけるに戀の歌

第二篇 俊成の作品と評釋

戀衣いかに染めける色なれば思へばやがて移る心ぞ

未對面といへる戀の心を

人しれぬ心やかねてなれぬらむあらましことの俤に立つ

題しらす

もらしても袖やしをれむ數ならぬ身をはづかしの杜の雫は

後法性寺入道前關白の家の百首の歌に後朝戀

別れつる涙のほどをくらべばや歸る袂ととまる枕と

高野山に侍りける頃、皇太后宮大夫俊成千載集えらび侍るよし聞きて歌を送り侍るとてか

きそへ侍りける。

西行法師

花ならぬ言の葉なれどおのづから色もやあると君ひろはなむ

返し

世を捨てゝ入りにし道のことの葉ぞあはれも深き色ぞみえける

崇徳院に書きて奉りける御草子の包紙に

數ならぬ名をのみとこそ思ひしか斯かる跡さへ世にや残らむ

近衛院の御時御物忌にこもりて侍りける夜遣水に月のうつれるを見て思ひ出づること多く

てよみ侍りける

いにしへの雲居の月はそれながらやどりし水の影ぞかはれる

諒闇の年の秋鳥羽殿に美福門院おはしましける比、前栽に蘭のしをれて見えけるを折りて人に遣しける

なべて世の色とは見れど藤ばかりまわきて露けき宿にもあるかな

美福門院の御事の後皇太后宮大夫俊成にあひて日數の過ぐるも夢のやうなることなど申して又の日遣しける  
久我内大臣

定めなきこの世の夢のはかなさをいひ合せても慰めしかな

返し

第二篇 俊成の作品と評釋

かなしきの猶定めがたき心にはいひ合せても夢かとぞ思ふ

美福門院かくれさせ給ひける頃、素服の人あまた参りあひたりけるを見て、皇太后宮大夫

俊成がもとに遣しける

清輔朝臣

人なみにあらぬ袂はかはられど涙は色になりけるかな

返し

墨染にあらぬ袖だにかはるなりふかき涙の程はしらなむ

無上寶聚不求自得

迷ひける心もはるゝ月影にもとめぬ玉や袖にうつりし

(五) 新後撰集

高倉院位におはしましける時、家の梅を召されけるに奉るとて結びつけ侍りける

九重に匂ふとならば梅の花やどのこずるに春をしらせよ

久安百首の歌奉りけるに



櫻花思ふあまりに散ることのうきをば風におほせつるかな

住吉の社よみて奉りける百首の歌の中に

いかなれば日影のむかふ葵草月の桂の枝をそふらむ

千五百番歌合に

橋にあやめの枕匂ふぞよ昔をしのぶかざりなりける

建仁元年八月十五夜和歌所撰歌合に月前松風といへることを

月の影しきつの浦の松風にむすぶ氷をよする波かな

住吉の社よみて奉りける百首の歌の中に

明石瀉月の出しほや満ちぬらむ須磨の波路に千鳥と渡る

正治百首の歌に

旅衣しをれぬ道はなけれども猶つゆふかしさやの中山

法華經方便品、其智慧門難レ解難レ入の心を

第二篇 俊成作品と評釋

入りがたく悟りがたしと聞く門をひらけば花の御法なりけり

寂莫無人聲讀誦此經典

とふ人の跡なき柴のいほりにもさしくる月の光をぞまつ

久安の百首の歌に

常にすむ鷺の高根の月だにも思ひしれとぞ雲かくれける

美福門院に極樂六時の讚を繪にかゝせて書くべき歌つかうまつりけるに、七重寶樹の風には

一實相の理をしらべむ

影清き七重のうる木うつりきて瑠璃の扉も花かとぞ見る

久安百首の歌に

いくかへり波の白ゆふかけつらむ神さびにけり住吉の松

住吉の社よみて奉りける百首の歌の中に

和歌の浦の道をば捨てぬ神なればあはれをかけよ住吉の波

## 久安の百首の歌に

思ふこと三輪の社に祈りみむ杉はたづぬるしのみかは

日吉の社に百首の歌よみて奉りけるに、皇太后宮大夫俊成我もよみて奉るべきよし申しながら、さも侍らざりければ、遣しける  
前大僧正慈鏡

いかでかは君も匂を添へざらむ神に手向くる百くさの花

返し

手向くべき心ばかりはありながら花にならべむ言の葉ぞなき

賀茂重保社頭にて歌合し侍りけるに、述懐の心を

立かへり捨てゝし身にも祈るかな子を思ふ道は神もしるらむ

住吉の社によみて奉りし百首の歌の中に

秋の野の萩のしげみに臥す鹿のふかくも人に忍ぶ頃かな

建仁元年三月歌合に、遇不逢戀

第二篇 俊成の作品と評釋

初瀬川又見むとこそたのめしか思ふもつらし二もとの杉

(六) 玉葉集

賀茂の社によみて奉りける百首の歌に同じ心を(子の日)

君が代を野べに出でゝぞ祈りつる初子の松の末をはるかに

千五百番歌合に春の歌

鶯も千世をや契る年をへてかはらぬ聲に春を告ぐなり

賀茂の社に奉りける百首の歌の中に、梅をよみ侍りける

色につきにほひにめづる心とも梅が枝よりやうつりそめけむ

二條院の御時内裏にて禁庭柳垂といふことを

春くれば玉のみぎりをはらひけり柳の糸やとものみやつこ

賀茂の社によみて奉りける百首歌に柳

玉柳にほふともなき枝なれどみどりの色のなつかしきかな

久安六年崇徳院に百首の歌奉りける

詠めするみどりの空もかきくもりつれくまざる春雨ぞふる

春日の社に奉りける百首の歌に春雨をよめる

春雨はくる人もなくあとたえぬ柳の門の軒の玉水

賀茂の社へよみて奉りける百首歌に山吹を

櫻ちり春のくれゆく物思ひもわすられぬべき山吹の花

年をへて春の惜しきは増れども老は月日の早くもあるかな

更衣の心を

いつしかとかへつる花の袂かな時にうつるは習なれども

伏見にて近聞郭公といふ事をよみ侍りける

あはれにもともに伏見の里にきてかたらひあかす郭公かな

山家五月雨といふことを

十三代集入撰和歌

第二篇 俊成の作品と評釋

都人こともやとふと松の門雲とちはつる五月雨の頃

遠郷萩といふことを

この里の眞萩にすれる衣手をほさで都の人に見せばや

賀茂社へ奉りける百首の歌の中に鹿を

嵐吹きまがきの萩に鹿なきてさびしからぬは秋の山里

日吉の社へ奉りける百首の歌の中に

歸る雁またしも逢はじと思ひしにあはれに秋の雲に鳴くなる

家に十首の歌よみ侍りけるに月を

世をうしと何思ひけむ秋ごとに月は心にまかせてぞ見る

守覺法親王の家の五十首の歌の中に

あはれとは我をも思へ秋の月いくめぐりかはながめきぬらむ

建仁元年八月十五夜の歌合に、古寺残月といへることを

又たぐひあらしの山のふもと寺すぎのいほりに有明の月

賀茂の社へ奉りける百首の中に擣衣を

月きよみ千里の外に雲つきてみやこのかたに衣うつなり

題しらす

いつしかと冬のけしきに立田川紅葉とぢますうす氷せり

賀茂の社へ奉りける百首の歌の中に千鳥を

川千鳥なれもや物はうれはしきたゞすの森をゆきかへり鳴く

題しらす

雪ふれば道たえにけり芳野山花をば人のたづねしものを

後法性寺入道前關白右大臣に侍ける時、家に百首の歌よみ侍りけるに、雪を

巻もくのたまきの宮に宮に雪ふれば更にむかしのあしたをぞ見る

文治六年女御御入内の屏風に、十一月五節のまつりの所

第二篇 俊成の作品と評釋

乙女子が雲のかよひ路雲はれてとよのあかりも光ぞへけり

後法性寺入道前關白の家に百首の歌よませ侍りける中に、歳暮

あはれなり數にもあらぬ老の身を猶たづねてもつもる雪かな

二條院の御時花有喜色といへることをよみ侍りける

九重に匂をそふる櫻花いく千代春にあはんとすらん

正治二年後鳥羽院に百首の歌奉りける時、祝の心

玉椿はつねの松をとり添へて君をぞいはふ賤のこやまで

守覺法親王の家の五十首の歌の中に經の心をよみ侍りける

君が代は高野の山の岩のむろあけむあしたの法にあふまで

千載集奏覽の時いれて侍りける手箱にあしでにまきたりける歌

和歌の浦に千々の玉藻をかきつめて萬代までも君が見ん爲

仁安元年大嘗會の悠紀方の己の日の樂、急、木綿園



ゆふ園の日影のかづらかざしもて楽しくもあるか豊の明の

賀茂の社へ奉りける百首の歌の中に別

入江漕ぐ小舟に磨く芦の穂は別ると見れば立ちかへりけり

禰中霞といふ事をよみ侍りける

何となくものあはれにも見ゆるかな霞や旅の心なるらん

旅の歌の中に

假初と思ふ旅寝のさゝの庵も夜やながゝらむ露のおきそふ

二條院の御時聞増戀といふ事を人々によませさせ給ひける時仕うまつりける

妹がうへは柴の庵の雨なれやこまかにきくに袖のぬるらん

初遇戀の心を

ときかへしるでの下草ゆきめぐりあふせ嬉しき玉川の水

太神宮へよみて奉りける百首の歌の中に旅戀

十三代集入撰和歌

第二篇 俊成の作品と評釋

夢路にはなれし屋とみるうつゝにはうつつの山邊の蔦ふける庵

四月一日頃雨ふりける夜忍びて人に物いひ侍りて後とかくびんあしくて過ぎけるに、五月雨の頃つかはしける

袖ぬれしその夜の雨の名残よりやがて晴れせぬ五月雨の空

後法性寺入道前關白の家に百首の歌よませ侍りけるに、遇不レ逢戀

よと共に面影にのみ立ながら又見えじとはなど思ふらむ

よそならばさてもやみなむ憂きものは慣れてもつらき契なりけり

恨むることありて暫し云はざりける女に文遣すとて

恨みても戀しき方やまさるらんつらさはよわるものにぞありける

恨むることありける女に遣しける

戀しさも忘るばかりのうき事によわきは袖の涙なりける

保延の頃述懐の百首の歌よみ侍りけるに、殘雪を

春しらぬ越路の雪もわれればかりうきに消えせぬ物は思はじ

述懐の百首の歌よみ侍りけるに、鶯

花咲かぬ宿の梢になかくに春とな告げそうぐひすの聲

賀茂社に奉りける百首の歌に春雨を

草も木もあまねく恵む春雨に袖はぬれてぞかひなかりける

述懐の百首の歌の中に、更衣の心を

花の色はけふぬぎかへついつか又苔の袂にならんとすらん

前中納言師仲下野國より歸京して後、配所にてよめりける歌どもを見せに遣したりけるを返

すとてそへて侍りける

いかばかり露しげければ東路の言の葉さへに袖のぬるらん

正治百首歌奉りけるに

風さやぐさ夜のねざめのさびしきははだれ霜ふりつるさはになく

第二篇 俊成の作品と評釋

春日に奉りける百首の歌の中に、野を

春日野は子の日若菜の春のあと都のさがは秋萩の時

題しらす

草の庵に心はとめついつか又やがて我身もすまんとすらん

物の名を隠題にてよみ侍りけるに、月、鈴虫、紅葉

峯つゞき山べはなれすすむ鹿もみちたどるなり秋の夕霧

母の喪に侍りける頃、山里にこもりあて侍りけるに、正月司召など過ぎて雪の降りたるあした、人のとぶらひて侍りける返事のついでに

思ひやれ春の光もてらしこぬ深山の里の雪のふかさを

九條内大臣隠れ侍りにけるをとひ侍らで、四月になりて後法性寺入道前關白のもとに申しつかはしける

いかにいひいかにとはんと思ふまに心もつきて春もくれにき

權中納言俊忠の遠忌に鳥部野の墓所の堂にまかりて歸り侍りけるに、露のしげかりければ、  
分け來つる袖のしづくか鳥部野のなくく歸る道芝の露

前中納言定家、母の喪に侍りける比、玉ゆらの露も泪もとどまらず亡き人こるふ宿の秋風  
とよみて侍りける返事に

秋になり風の涼しくかはるにも泪の露ぞしのにちりける

顯輔卿訶華集撰び侍りける時、歌を尋れて侍りければ、まづ權中納言俊忠の歌を遣すとて  
よみてそへける

木のもとに朽果てぬべき悲しさにふりにしことのはを散すかな

待賢門院中納言人々すゝめて、法華經二十八品の歌よませ侍りけるに、提婆品、探薪及菓  
藏隨時恭敬興

薪こり峯の木のみを求めてぞえがたき法は聞き始めける

後法性寺入道前關白、右大臣に侍りける時、家に百首の歌よませ侍りけるに

第二篇 俊成の作品と評釋

しき波に頼みをかけし住吉の松もや今は思ひすつらむ

同、神祇の心を

そのかみに祈りし末は忘れじをあはれはかけよ賀茂の川波

(七) 續千載集

久安六年崇徳院に百首の歌奉りけるに、花の歌

山ざくら咲くより空にあくがるゝ人の心や峯の白雲

百首の歌よみ侍りける中に

ふる里にいかに昔を忍べとて花たちばなの風に散るらむ

久安の百首の歌奉りける時

五月こそなれが時なれ郭公いつをまてとて聲惜むらむ

百首の歌よみ侍りける中に

水上に秋や立つらむ御祓川まだ宵ながら風の涼しき

述懐の百首の歌よみ侍りけるに萩

我袖は萩のうは葉の何なれやそよめくからに露とこぼるイこぼるらむ

百首歌よみ侍りけるに

月を見て千里の外を思ふにも心ぞかよふ白川の關

久安の百首の歌に

山川の水のみなかみ尋ねきて星かとぞ見る白菊の花

冬の歌の中に

積れたゞ道はたゆとも山里に日をふる雪を友とたのまむ

藤原隆信朝臣出家して侍りける頃のもろともに年の老いぬる事を思ひイ侘びて、昔今の事など申して、せめての心ざしに、歌に一句をそふるよし申しつかはし侍りける

みどり子と思ひし人も老いぬとて背く世をみる悲しさは夢かうつゝか

返し

隆信朝臣

十三代集入撰和歌

第二篇 俊成の作品と評釋

ありてなき 夢も現も 誰にかくとはれまし 君が見る世に 背かざりせば  
正治の百首の歌奉りける時、たくみ鳥

難波人あしの若葉をほさでたく緑にかすむゆふ煙かな

江上月を

思ひいでよ神代も見きや天の原空もひとつの住の江の月

待賢門院の中納言人々勸め侍りて法華經二十八品の歌よませ侍りけるに、授記品、於未來  
世感得成佛の心を詠み侍りける

いかばかり嬉しかりけむさらでだに來む世のことは知らまほしきを

安樂行品、深入禪定見十方佛

靜かなる庵をしめて入りぬれば一方ならぬ光をぞ見る

涌出品從地而涌出

池水の底より出づる蓮葉のいかで濁りにしますなりけむ



一品經を書寫山に贈るとて添へ侍りける歌の中に

種まきし心の水に月すみてひらけやすらむ胸の蓮も

久安の百首の歌に

思ふよりやがて心ぞうつりぬる戀は色なるものにぞありける

百首の歌よみ侍りけるに

難波女の芦のしのやのしの薄一夜のふしも忘やはする

久安の百首の歌に

忘草つみにこしかど住吉のきくにしもこそ袖はぬれけれ

崇徳院位におはしましける時、雪庭樹花といへることを講ぜられけるに

百敷やみかきの松も雪ふれば千代のしるしの花ぞ咲きける

(八) 續後拾遺集

正治二年後鳥羽院に百首の歌奉りける時

十三代集入撰和歌

第二篇 俊成の作品と評釋

霞立つ四方の山邊を見渡せば春は都のものにぞありける

久安の百首の歌奉りける時

千早振神の社の葵草かざす今日にもなりにけるかな

正治百首歌たてまつりける時

誰が爲の手枕にせむ小牡鹿のいる野の薄ほにいでにけり

久安百首奉りける時、霞、柳、櫻

花の色の飽かず見ゆれば歸らめや渚の宿にいざ暮しなむ

正治二年百首歌奉りける時、深山つぐみ

大和路を絶えず通ひし折のみや先汲み見けむ井手の玉水

同じ時、離別

曉ときゝて出でつる別路をやがてくらすは涙なりけり

夜思瞿麥といふことを

草枕旅寝の程もいかならむ宿を見置きし常夏の花

述懐百首中に氷雪

埋もれて消えぬ氷室のためしにや世に存へばならむとすらむ

正治百首の歌奉りける時

恨みても何にかはせむあはでのみ越のみづうみみるめなければ

述懐の百首よみ侍りけるに、河

最上河ぜゞにせかるゝ稻舟の暫しとぞだに思はましかば

美福門院かくれさせ給ひて後、後忌の日に御誦經の使にて、参議親隆がもとに云ひ送りける

墨染の袖をつらねてなぐさめし日數にさへも別れぬるかな

久安の百首の歌に

はるかにも匂ひけるかな法の花のちの五百とせ猶さかりなり

十三代集入撰和歌

第二篇 俊成の作品と評釋

太神宮よみて奉りける百首の歌の中に

かけまくも畏きとよの宮柱直き心はそらに知るらむ

(九) 風雅集

文治六年正月女御入内の屏風に小朝拜

九重や玉敷く庭にむらさきの袖をつらぬる雲の上人

住吉の社に奉りける百首の歌の中に若菜を

いざやここ若菜つみてむ根芹おふる浅澤小野は里とほくとも

題しらす

我が園に宿りはじめよ鶯のふるすは春の空につけてき

春の歌の中に

梅が枝にまづ咲く花ぞ春の色を身にしめそむる始なりける

往吉の社に奉りける百首の歌の中に、春雨を

春雨は軒のいと水つくづくと心細くて日をもふるかな

春日の社に奉りける百首の歌の中に歸雁を

何となく思ひぞ送る歸る雁ことづてやらば人はなけれど

大炊御門右大臣まだ納言に侍りける時、三條の家の櫻盛になりける頃、人々歌詠み侍るに

君がすむ宿の梢の花ざかりけしきことなる雲ぞ立ちける

その後いくばくの年も隔てず近衛太皇太后宮立后侍りけるとなむ

花留客といふことを

尋ね來る人は都を忘るれど根にかへりゆく山櫻かな

太神宮へ奉りける百首の歌に、山吹を

昔たれうゑ始めたる山吹の名を流しけむ井手の玉水

彌生の晦に花はみな四山の嵐に誘はれてひとりや春のけふはゆくらむと法印靜賢申して侍

りけるに

十三代集入撰和歌

第二篇 俊成の作品と評釋

惜しと思ふ人の心し後れねばひとりしもやは春のかへらむ

千五百番歌合に

ますらをや端山わくらむともし消ち螢にまがふ夕暗の空

和歌所にて暮山遠雁といふことを講ぜられけるに

小倉山ふもとの寺の入相にあらぬ音ながらまがふ雁がね

月夜旅を

清見瀉波をかたしく旅ごろも又やはかゝる月をきて見む

日吉の社へ奉りける百首の歌の中に爐火を

埋火にすこし春あるこゝちして夜ふかき冬をなぐさむるかな

文治六年女御入内の屏風に、十二月内侍所の御神樂のところ

ことわりや天の岩戸もあけぬらむ雲井の庭の朝倉のこゑ

賀茂の社に奉りける百首の歌の中に霞を

立ちかへり昔の春の戀しきは霞を分けし賀茂のあけぼの

法勝寺にて人々花の十首の歌詠み侍りけるに

花にあかでつひに消えなば山櫻あたりをさらぬ霞とならむ

花の歌の中に

埋木となりはてぬれど山櫻をしむ心は朽ちずもあるかな

述懐の百首の歌の中に、ともしを

ますらをば鹿まつことのあればこそ繁きなげきもたへしのぶらめ

皇太后宮大夫俊成千載集をえらび侍りける時申しつかはしける 前左兵衛督惟方

藻汐草かきあつめたる和歌の浦のその人数に思ひ出ですや

返し

今も猶なれし昔を忘れぬをかけざらめやは和歌の浦波

基俊に古今集をかりて侍りけるを返しつかはすとて

十三代集入撰和歌

第二篇 俊成の作品と評釋

君なくばいかにしてかははるけましいにしへ今のおぼつかなさを

前中納言定家母のおもひに侍りける比ひえの山の中堂にこもり侍るに、雪のいみじうふりけるつとめて覺束なさなど書きて奥に

子を思ふ心や雪に迷ふらむ山のおくのみ夢にみえつゝ

返し

前中納言定家

うちも寝す嵐のうへの旅枕みやこの夢にわたる心は

極樂六時の讚を歌によみけるに、晨朝を

朝まだきつゆけき花を折るほどは玉しく庭に玉ぞちりける

勝負しるしつけて遣しける歌合の奥にかきつけ侍りける

藤波もみもすそ川の末なればしづ枝もかけよ松の百えに

文治六年女御入内の屏風の歌、春日の祭の社頭儀

春の日も光ことにや照すらむ玉ぐしの葉にかくる白ゆふ



目吉の社に奉りける百首の歌の中に櫻を

山櫻ちりに光を和げてこの世に咲ける花にやあるらむ

慶賀歌とてよめる

誠にや松は十かへり花さくと君にぞ人のとはむとすらむ

仁安元年大嘗會の辰の日の退出の音聲音高山

吹く風は枝もならさで萬代とよばふ聲のみ音高の山

(10) 新千載集

春立つ心をよみ侍りける

春や立つ雪げの雲はまきもくの檜原に霞たなびきにけり

春の歌の中に

春きぬと御垣が原はかすめども猶雪さゆる三吉野の山

春の歌の中に

十三代集入撰和歌

第二篇 俊成の作品と評釋

心あらむ人のとへかし梅の花かすみにかをる春の山里

正治二年百首の歌奉りける時

幾かへり春の別を惜みきぬみどりの空もあはれとは見よ

久安の百首の歌に

秋の月又もあひみむ我が心つくしなはてぞ更科の山

雨後月といふことを

吹きはらふあなしの風に雲はれてなごのとわたる有明の月

後法性寺入道前關白右大臣に侍りける時、家に百首の歌よみ侍りけるに、旅の歌

日數ゆく草の枕をかぞふれば露おきそふるさやの中山

久安の百首の歌奉りける時、戀の歌

年ふれど人の心はつれなくて涙の色のかはりぬるかな

題しらす

忍ばずば乾きでも袖を見るべきにしぼりぞかぬる夜半の狭衣

二條院の御時、思出戀といふことを

昔みし野中の水を尋ねきてさらに袖をもぬらしつるかな

濱邊蘆といふことをよめる

ともすれば汐みつ濱の芦の根の沈みてからく老いぬべきかな

題しらす

この世には又慰めもなきものを我をば知るや秋の夜の月

述懐の百首の歌の中に炭竈

煙たつ小野の炭がま我ながら歎きをつみて下にもゆらむ

二條院隠れさせ給ひて後月の隈なかりけるを見てよめる

雲の上はかはりにけりと聞くものを見しよに似たる夜半の月かな

文治六年女御入内の月次の屏風に田中に人家あるところ

第二篇 俊成の作品と評釋

秋ふかき山田のなるこおしなべて治れる世の例にぞ引く

(一一) 新拾遺集

望<sub>レ</sub>山待<sub>レ</sub>花といふことをよめる

山櫻咲きやらぬまは暮ごとにもたでぞ見ける春の夜の月

二品法親王守覺の家の五十首の歌に

影うつす井出の玉川そこ清み八重に八重そふ山吹の花

題しらす

野邊におく同じ露とも見えぬかな蓮のうき葉にやどる白玉

秋の歌の中に

秋の野は心もしのに亂れつゝ苔の袖にも花やうつらむ

冬の歌の中に

うちしぐれ人の袖をもぬらすかな空もや今日は秋を戀ふらむ

建仁三年十一月和歌所にて九十の賀給はりける時仕うまつりける

もゝとせに近づく人ぞ多からむ萬代ふべき君がみ代には

この歌を賀せられむとて、召されて参りて終夜見侍りて、なべてならぬ道の面目いみじく  
覺えけるあまりに、つとめて申し遣しける

建禮門院右京大夫

君ぞ猶けふよりも又算ふべきこゝのかへりの十の行末  
返　　し

龜山の九返りの千とせをも君がみよにぞ添へゆづるべき

羈旅の心を

隅田川ふる里思ふ夕ぐれに涙をそふる都鳥かな

後朝の戀の心を

暮にもと契りおけども柚川の筏の牀はおきぞわびぬる

十三代集入撰和歌

第二篇 俊成作品と評釋

戀の歌の中に

うつゝには思ひ絶えゆく逢ふことをいかに見えつる夢路なるらむ

承安二年廣田の社の歌合を判じける奥にかきつけ侍りける

敷島や道はたがへずと思へども人こそわかね神は知るらむ

美福門院に極樂六時讚の繪に書かるべき歌奉るべき由侍りけるに、夜のさかひ靜にて漸く中

夜に至るほど

深き夜の光も聲も靜にて月のみ顔をさやかにぞ見る

正治の百首奉りけるに、鳥の五首の中にはやぶさ

恨みかね絶えにしことは昔はや臥すなりにき夜半のさむしろ

(一一) 新後拾遺集

爲忠朝臣の家に百首の歌詠ませ侍りける時、瀧下山吹を

たきつ瀬の玉散る水やかゝるらむ露のみしげき山吹の花

百首の歌よみ侍りける中に

種まきし早稲田のさ苗うゑてけりいつ秋風の吹かむとすらむ

法性寺入道前關白の家の百首の歌に

清見瀉波路さやけき月をみてやがて心やせきをもるらむ

爲忠朝臣の家の百首の歌に有明月

秋の夜のふかきあはれは有明の月見しよりぞ知られそめにし

百首の歌よみ侍りけるに

初霜はふりにけらしなしながら鳥猪名の笹原色かはるまで

冬の歌の中に

難波瀉芦の枯葉に風さえて汀のたづも霜になくなり

百首の歌よみ侍りけるに

御狩するかた野の小野に日は暮れぬ草の枕を誰にからまし

十三代集入撰和歌

第二篇 俊成の作品と評釋

爲忠朝臣の家に百首の歌よませ侍りける時、後朝隱戀

飽かなくに起きつるだにも有るものを行方もしらぬ道芝の露

華嚴經の高山頓説の心を

朝日さす高嶺の雲は匂へどもふもとの人は知らずぞありける

(一三) 新續古今集

文治六年女御入内の屏風に人の家ありて、花の中に鶯木つたふ所

谷を出でゝ高きにうつる鶯は花咲く宿のあるじなりけり

崇徳院に百首の歌奉りける時

散る花のをしさをしばし知らせばや心かへせよ春の山風

文治六年女御入内の屏風に澤のほとりに春駒あるところ

春駒の野澤になるゝけしきにて葦の若葉のほどぞ知らるゝ

崇徳院に百首の歌奉りける時、葦菜を



紫のねばふ横野のつぼすみれ眞袖につまむ色もむつまじ

題しらす

待つとしも今はなけれど郭公なれし心の空にもあるかな

崇徳院の御時、六月朔更戀<sub>ニ</sub>郭公<sub>一</sub>といふ心を詠ませ給ひける時

尋ね見むまぼろしもがな郭公ゆくへも知らぬみな月の空

文治六年女御入内の躰風に河のほとりに六月祓したる所

君が爲今日のみそぎに泉川萬代すめと祈りつるかな

初秋の心を詠み侍りける

草も木も色づく秋の初風は吹そむるより身にぞしみける

崇徳院の御時奉りける歌の中に

七夕はうらめづらしく思ふらむこよひは雲の衣かへさで

建仁元年撰歌合に河月似<sub>レ</sub>氷といへるを

十三代集入撰和歌

第二篇 俊成の作品と評釋

千鳥なく河風寒み月冴えて氷は秋のものにぞありける

久安の百首の歌奉りける時

元結の霜おきそへて行く秋はつらきものから惜しくもあるかな

妙音品、及衆難處皆能救濟

荒き海きびしき山の中なれど妙なる法はへだてざりけり

美福門院に極樂六時讚の繪に書かるべき歌奉るべきよし侍りけるに、あしたに定より出づる

程ほのかに天の樂を聞く

ほのかなる雲のあなたの笛の音もきけば佛の御法なりけり

春日の社に奉りける百首の歌の中に別を

別てふ名こそつられ旅衣たちはなれては日數經すとも

人におほする戀といふ事を

眞柴こる賤のつま木と名らせて我人しれぬ思ひにぞたく

千五百番歌合の歌

尋ね入らむ道も知られぬ忍山袖ばかりこそ葉なりけれ

後法性寺入道前關白太政大臣の家の百首の歌に、初逢戀の心を

頼まずば飾磨のかちの色を見よ逢ひそめてこそ深くなるなれ

後徳大寺左大臣の家に十首の歌よみ侍りけるに、寄源氏戀といふことを

恨みても猶たのむかなみをつくし深き江にあるしと思へば

承安二年廣田の社の歌合に、海上眺望

和田の原漕ぎ離れぬる舟路には心もえこそつながざりけれ

正治の百首の歌奉りける中に、かはら雀

大澤の池のけしきはふりゆけどかはらす澄める秋の夜の月

諸社の奉幣使立てられけるに、三品に敘して後、始めて賀茂に向ひて、下の御社より夜ふけて上の御社にまうで侍る程、むかし百度詣しける事など思ひ出でらるゝに、河原の有縁

第二篇 俊成の作品と評釋

も早く見しにはかはりたる心のしければ、思ひつゞける

昔我が祈りし道はあらねどもこれも嬉しな賀茂の川波

九、長秋草

かすが山たにのまつとはくちぬとも

五社百首和歌

哀ともうしとも思ふ藤の花などかしづえに我をなしけん

年のはのくちせぬ松のみどりかなこすゑにかへれきたのふちなみ 又立歸

り春を見せばや

立かへる春を見せばやふちなみはむかしばかりのこすゑならねど

不逢戀

太神宮

いたづらにゆけどもあはで歸るかな君はふせやにおひぬ物ゆへ

賀茂社

逢事は渚によするうつせ貝むなしき波にぬるゝ袖かな

春日社

契あらば世々の哀もいふべきにあはずば何か恨しもせん

日吉社

身をなげて生田の川にしづみても逢瀬なくては何にかはせむ

住吉社

ぬる夜有りて夢だにみえばおのづからあはする人もあらましものを

初逢戀

くちはてし夜の衣をかはすかなしほとけしとやあはれなるとや

錦木の千束のかずにけふみちてけふの細布むねやあふべき

長秋草

第二篇 俊成の作品と評釋

契あれやこよひ伏見の里にきて草の枕をかはしそめぬる  
あふ阪の關守神に手向せしぬさのしるしはこよひなりけり  
ひとりのみ歎きし床を君が爲うちはらふにも袖はぬれけり

後朝戀

わかれつる床に心はとゞめ置て霞にまよふ春のあけぼの  
暮にもと契りおけども柚川や筏の床はおきぞわびぬる  
くれをまつ命さりとものなからめや今朝の別れのなどや悲しき  
あはでこし道の露にもまさりけりきぬくゝになる東雲の空  
浦千鳥入江の波に起きわびてなきでぞ出づる有明の空

遇不逢戀

移り香はかさねし袖にありながらぬれぎぬとやはいひ放つべき  
うつゝには逢はぬけしきにつれなくて見しをば夢にいひなさんとや

あさましや袖ぬれてこそ結びしか又影みせぬ宿のまし水

名を立てゝ我つらきともいふべきに唯こひしきぞわりなかりける

うらやましあたちの峰のそりま弓そりはてましを引かへしけむ

旅

夢路にはなれし宿みゆうつゝにはうつつ山邊の蔦ふける庵

露ふかき野原の草の枕こそ戀の涙もしのばざりけれ

忘るなよ契りしやとはいかゞあらん野にも山にも佛にたつ

夢にこそ都の方もみるべきに袖に波こそすちかの鹽釜

難波女の芦のしのやのしのすゝき一夜のふしも忘れやはする

思

深からぬ澤の螢のおもひだに身よりあまるとは哀ならずや

戀しきも思ふゆへこそ戀しけれこひと思ふも何かことなる

長秋草

第二篇 俊成の作品と評釋

戀しともうきをつらしと恨るもおもふ心の深き成けり  
まとりすむ杜の神にもとひてきけ思へばこそは思ふともいへ

片思

續後

夜とともに我のみ思ひくだくらむ岩うつ磯の波ならなくに

あちきなやつれなき人をいたづらに思ふおもひのおしくもあるかな  
さきの世の我身ぞつらき君が爲かゝりければやむくひなるらん  
中々にうるまの島の人ならばうきに思をかへまし物を

浪かくる岩根につけるあはび貝こや片戀のたぐひ成らん

恨

浪こさばうらみむとこそ契しかいかゞ成ゆくすゑの松山

心あらん人をぞ人は恨むべきうらみけるこそはかなかりけれ

恨わびなをかへせども小夜衣夢にもおなじつらさなりけり



何せんとうしとも人を恨けむさてもつらさはまさる物ゆへ

曉

いつとても有明がたは露けきを猶かぎりなし長月の空  
明ぬるか有明の月はかたぶきて賀茂の河原に千鳥なくなり  
あし鴨のはがひの霜や置つらん尾上のかねもほの聞ゆなり  
旅の空残の月にゆく人も今や越らんあふ阪の關  
曉は鐘のこゑより鳥の聲千どり友よび鳴のはねかき

松

人しれず百枝の松をたのむかな藤の末葉もあはれかけゝん  
たらちねの昔の跡を思ふにも頼みぞわたる松の尾の蔭  
をしほ山小松が原はしげくともたのむ梢は神もわかれん  
霜の後ひとり残れる谷の松春の光のさす時もがな

第二篇 俊成の作品と評釋

うきながら久しくぞ世を過ぎにける哀やかけし住よしの松

竹

竹のみや籬にうゑて千世までと祝ひそめけむ此君ぞこれ  
百敷やみかきにならぶ竹の子の末の世までも神のまに〜  
くれ竹のかはらぬ色を友とせし人の心のうちを知るかな  
もゝしきや流れ久しき川竹の千世の緑は君ぞみるべき  
窓に植て我ともと見る吳竹は袖にかはらす露も置けり

鶴

興津波あはれをかけよ和歌の浦の風に引そふたつの行末  
松の本千とせの鶴の夜のこゑ龜のみ山にさぞかよふらん  
雲はれてつるこそあまた聲すなれ君が千とせを空にするとや  
子を思ふ事はかはらじ夜の鶴いかで雲るに聲聞ゆらむ

難波がたむれたる田鶴の上毛こそ千とせも消えぬ霜にはありけれ

## 苔

古のみほの岩屋は苔むしてみれどもあかずとこめづらなり  
あはれにも苔よ衣となれく／＼て終には下にくちむとすらん  
にほへども花は春のみよしの山こけの緑ぞ常盤なりける  
おく山の岩根のこけぞあはれなる終には人の衣とおもへば

## 山

たけちほのくしふる峯ぞあふがるゝ天のをすめの初思へば  
月みればなぐさめがたし同じくは姨捨山の都なりせば  
世を捨てば吉野の奥に住むべきを猶たのまるゝ春日山哉  
春の日の山のそなたをきくごとに我捨てはてし秋ぞかなしき

(安元二年九月廿八日)

第二篇 俊成の作品と評釋

たのむかな我立つ袖と祈り置て山のかひある峯のけしきを  
あし曳の山の中にも富士の山いかに契て煙たつらん

河

宮柱下の岩根の五十鈴川萬代すまんすゑぞはるけき

行かへり馴れし都のしのばれて音もなつかしき賀茂の川浪  
折ごとに思ひぞ出るいづみ川月をまちつゝわたりしものを

當初毎月參仕當社三ヶ年故云

ひえを山岩きりとをす谷川のはやきしるしを猶たのむかな  
秋くれて紅葉ながるゝ立田川はやくみし世や戀しかるらん

野

野べは秋あきはま萩の花ざかりをじか妻とふ夕ぐれの空  
我袖にくらべも見ばや宮城野の木の下露はげにやしげきと

春日野は子日わかなの春のあと都のさがは秋萩の花

鶉なくあはづの原のしのすゝき過ぞやられぬ秋の夕べは

秋風に野邊のけしきを見るばかり身にしむ事は猶なかりけり

關

月を見て千里の外を思ふにも心ぞかよふ白川の關

關守はすぐしやれども清見がた心のとまる波路なりけり

聞わたる關の中にも須磨の關名をとゞめける波の音かな

逢阪の關のせき守老にけりあはれと思ふあはれとおもへ

よと共に過る月日をかきとめて文字の關とはいふにや有らむ

橋

鈴鹿山きりの古木のまろ木橋これもやことのねに通ふらん

久しくも聞わたるかな葛飾やまゝのつぎ橋苔生ひぬらん

第二篇 俊成の作品と評釋

宮古いで、伏見をこゆる明がたはまづうちわたす櫃川の橋

東路や勢田の長橋昔より幾千世へよとわたしそめけむ

あはれなり長柄はあともくちにしを大江の橋の絶えせざるらん

海路

ひれふりし昔をさへや忍ぶらんまつらの浦をいづる舟人

百つたふ八十島かけて見わたせば空こそ海のきはめなりけれ

すみよしの松吹風はをくれども心ぞとまるすぐる舟人

何となく心ぞとまるそれと見て漕はなれ行く虫あけの松

浪のうへに遙かにうかぶ芦鴨はとり島かよふ船にや有らん

別

春の過ぎ秋のくれ行き別にも年ふるまゝにたへすも有かな

入江こぐを舟になびく芦の穂はわかると見れど立かへりけり

別てふ名こそつられ旅衣立わかれては日數へずとも

かりそめの旅のわかれと忍ぶれど老は涙もえこそとどめね

浦波は立わかるらんすみよしの松をたのむぞたのみなるべき

旅

いづくをも旅ならずやは思ふべき浮世ばかりの宿とこそきけ

角田川古郷思ふ夕ぐれに啼音をそふる都鳥かな

まるふしの柴のしき井に露ぞ置く夜や更ぬらん小夜の中山

かきすつるあまのもしほの草枕心ぞとまるわか浦風

みやこちは幾日もなきをもしほ草敷津の波は袖にかけり

山家

春は花秋は紅葉に散まがふたれ山里をさびしといふらん

山里はぬしをば置いて瀧の音も心ぼそさのすむにぞ有ける

長秋草

第二篇 俊成の作品と評釋

松のかげ竹の柱の山里は千世もへぬべき心地こそ  
れ  
山里はたへてもいかゞすごすべき松のあらしに鹿も鳴くなり  
爪木こる山路ばかりはふみ分て蓬が門は跡たえてけり

田 家

ますらをは月を友にてもるなれや門田の庵のまばら成らん  
長岡やおちぼひろひし山里にむかしをかけて田づらにぞ行く  
をじか啼く山田の庵は月もるゝおどろかさでぞ見るべかりける  
秋くれぬ今は我見んすみ馴れし山田の庵は紅葉ちるらん  
稲葉ふく風もことにぞ身にさむきいくらの里の秋の夕暮

懷 舊

思ひいでは昔もさらになけれども又かへらぬぞ哀なりける  
哀とはみをやの神も照さなんむかしの人を忍ぶ心を



むかしをば神も哀れと思ひ出よ月に山路をととせ見し人

先人納言毎月參仕當社之事十ヶ年故云

新 昔だにむかしと思ひしたらちねの猶戀しきぞはかなかりける

ふりにけり難波ほり江のみをつくしいづれの年のしるし成らむ

夢

うき世をば何によそへてさとらまし夢ぞまことのみちにある

夢路をばはかなき世には頼むべき思ひあはするかたもありけり

夢をなどはかなき物とたとふらん三世の事までみゆとこそきけ

夢とのみ過にしかたはおもほえて覺めてもさめぬ心地こそすれ

みても又思へば夢ぞあはれなるうき世ばかりのまどひと思へば

無常

つねなきは常なる事に馴ぬれば驚かれぬぞおどろかれぬる

長秋草

第二篇 俊成の作品と評釋

春のたち年の暮ぬとかはれどもまた世の常と見るぞはかなき  
くれをまつ朝の露もかたき世に猶さだめなし野邊の秋風  
なをいとへ蓮のたち葉の露だにも此世の池は風ちらしけり  
何か世を常ならずとは思ふべきながらの橋も名やは朽たる

述 懷

かけまくもかしこき豊の宮ばしら直き心も空に知らん  
いのり置し心のうちをみたらしの末に逢みんことぞ嬉しき  
春日山谷の松とはくちぬとも稍にかへれ北の藤なみ  
世を照す日吉と跡をたれてけり心のやみをはるけざらめや  
和歌の浦の道をばすてぬ神なれや哀はかけよ住の江の波

祝

新君が代は千世ともさゝじ天の戸や出る月日のかぎりなければ

君が代は賀茂の社の姫小松十かへり花ぞ咲かんとすらん

天の下のどけかるべし君が代は三笠の山の萬代の聲

君が代ははこやの山に千世を経て不二の高根に立まさるまで

四方の海のどかなれとぞ住吉のつもりの浦に跡をたれけん

これよりおくはみぐるしちらさるまじく

此五社百首去文治六年建久元年三月朔所之清書也。日吉百首同三月朔參社之時、令進覽了。殘

各相待便宜之間、伊勢神官權禰宜荒木田氏良不慮之處、同六月廿五日入來、仍宮悅令付進

了。其後無音之間、建久二年九月十一日件氏良又入來、有示事者、仍即相詢之處、以

紙夢想記示レ之。去年建久元年七月廿日件百首與二禰宜成良一相議、持三參御寶前一、午刻於

寶前再拜讀之讀了。奉三納於禰宜宿館一、（是於正殿者非勅定者、無奉開之例之故也）

其後同年八月廿五日夜夢に氏良參三五條天社一候處、南面波入道令三出合一、布衣烏帽子ヲ着云

々、又座上爾長老御座波、入道座下硯筥有リ、爰長老人命氏良天曰久、只看ル明月之影ト

第二篇 俊成の作品と評釋

彼御烏帽子爾可<sub>レ</sub>書志<sub>二</sub>者、氏良奉<sub>レ</sub>彼仰<sub>二</sub>染筆天、入道烏帽子ノ額たれたる中爾、只看明月のかげ此定爾書<sub>レ</sub>之云々、此靈夢撰<sub>二</sub>良辰<sub>二</sub>語<sub>二</sub>祠官<sub>一</sub>之處。百首詠靈感揭焉之由、各所欣仰之云々、聞<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>、内心詠云。

あきらけき月みる人としなしけりこゝろはれてぞ世々をかさねん  
子孫長可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>奉公<sub>一</sub>、歡慶之人象也。仍註<sub>レ</sub>之權禰宜氏良記ハ奉<sub>二</sub>納管底<sub>一</sub>了。

先人任參議之後注之

おいらくの月にすみてはよとせへぬへだてし道の雲ははれねど  
見てはるゝあまてる月のかげなればのちの世かけて我が身へだつな

代々集作者目六第三大納言

先祖大納言  
長忠相續爲家

わかの浦にかすならぬ身のなにしてむかしにかへる名をのこすらん  
載之、非神慮之爭可然哉

是祖父春之草注載夢記之符合也

正元々年八月一日注之

きみもわれもつたふる道の三代までにいやまさりなる名をのこしつゝ

彼太神宮一禰宜

延季、氏良孫、和歌浦集撰者三代

文應元年九月廿二日此草子枕にして寢たる人夢　ちゝ子や　おもへば、未だ神代なりける

親盛がもとなつかはさまほしながら、迺世のものどもあまりおほく、範綱爲保は十三日の  
あか月やがてほうしになりにけり。ことにもいかゞはなときこえしほどに、丁もんのため  
に六條殿にまいりたるに、素服の人どものなかに範綱親盛法師にて侍し、なをあげればかぎ  
りなくて、いでてこれより親盛がもとなつかはしける

かなしきは人をとふべきならねどもすがたをみるにたえずもあるかな

返し

ちかもり　法名　見　佛

かなしさにたえぬすがたをあはれともとはるゝことぞいのちなりける

長秋草

第二篇 俊成の作品と評釋

後白 河院 かくて日ごろのすぐるにもつきせぬこゝちのみしておもひつゞけしことをたれにはい  
ひやらんなどおもふたまへしほどに、 靜賢法師こそはとなげきのほどもおもひやられて、  
三月つくる日つかはしける長歌

あまのはら そらともたのみ あふぎしを はこやの山に としくれて みのりにはに  
雪つもり たまのみぎりも 風さえて よはのみましも つねならず 日かすすぎゆきか  
すみしく 春にかはれど はれやらす みどりのそらも てらされて やよひのをかは  
つかのよ おぼる月よの あげがたに こしのやまのは くもなかひき かすめる空も しづ  
かにて ほとけのみなも こゑたゝす たぶきのむすび ゐながらに みぐしをきたに お  
はしけり かゝるかなしき ときにあひて たれかは心 おさむべき たとへんかたも な  
ざさなる むなしきふねの こしかたの むかしのことを さらに又 おもひいづるも う  
ばたまの ゆめぢにのみぞ まよはるゝ いへばはるけき しらかはの のりのすべらぎ  
ましゝよに 秋のみやこの なかにして たまのうてなに いでたまふ そのみや人と な

りそめて みかきにおふる かはたけの ひとよふたよは すぎゆきて たもちはじめし  
 もんしきや おほうちやまの くものうへは ましてかひある こうちして きよくすんしき  
 月のまへ みはしにはの 花のもと たちならしつゝ おのづから うき身のほども な  
 ぐさめき なをつゆしもと かさなりて くはのとぼそに 身をのがれ 苔のたもとに し  
 ほれても きみがみかげを しのびつゝ 山路の菊に なづさひて 和歌の浦わの もしほ  
 ぐさ かきあつむべき みことのり くだりしことの かしこさに ちゞのこの葉 かき  
 のせて よろづよまでも みそなはせと おもひしものを 春の夜の ゆめとみんとは お  
 もひきや 涙のあめや くらしけん そらもかすめる もち月に またもかへらぬ みゆき  
 にて 都のたつみ しめをきし みのりのはなの むろのうちに いはのかためを とちは  
 てゝ たちわかれけん もる人は むかしの春の きさらぎの つるのはやしに ことなら  
 じ かゝるなかにも かすならぬ うき身のみこそ かなしけれ なみだのいろの くれな  
 るは こけのたもとに ふかけれど かたみのいろは よそにして ありしそのよを おも

第二篇 俊成の作品と評釋

ふには かりにつけつゝ あはれてふ なげのことばの つゆごとに しのぶなみだは お  
ちそひて たもとほふちと なりぬべし いまははちすの 池水に いかでちぎりを むす  
びおきて さとりひらけん はなのとき なをとことはに きみにあひみん  
おもひきやあるにもあらぬ身のはてにきみなきのちのゆめをみんなとは  
なげくべきそのかずにだにあらねどもおもひしらぬはなみだなりけり

これをみせにつかはすせうそこに三月つくる日なりしかば

きみをのみこふるなみだをくれはつる春のわかれもしらすぞありける

返 し

法 印

いかにせんきみがかすみとのぼりにし春にさへ又けふわかれぬる

四月ついたちにそへをくりたりし

靜賢法印

わかれにし春をつらしとながむればけさもうづきのそらにぞありける

又かへし



けさもなを春のわかれのかなしさをうづきはそふる名にこそありけれ

そのちをとなかりしほどに御四十九日は五月二日なりし、それなどすぎて五月十六日に  
おくりたりし長歌はしにことばあり

やよひのつごもりに、たまひたりし御ながうたいとあはれにて、いそべの波のうちをきが  
たく、あまのたくなはくりかへしみられて、もしほの袖いとゞかわきがたかりしに、丁も  
んのおりのぼりひまなくて、さ月のそらにもなり侍しにしかば、軒のしづくのしづかなる  
まゝに、むかししのぶもいとゞしげりまさりて、庭にながるゝうたかたのかたのやうにか  
きつられたる御かへし

あまのはら そらとあふぎし きみははや 春のかすみに さそはれて ゆきけんかたもし  
らくもの たちわかれにし あか月の そのありさまを おもふにぞ くらきみちをば よ  
そに見て 月の宮にや いりにけん それよりたかき くもるにて よつの苑にや あそぶ  
らむ 七つの池の ほとりにて たまのはすをや たをるらん たとへばむつの ふるさと

第二篇 俊成の作品と評釋

を このたびながく いてすとも つるにははちすの うへにして ほとけのみとぞ なり  
しはと おもへばきみは うれしきに とまるわれらが かなしきを きゝもやすると 老  
のかね うちたゆみたる ときもなく こがねの人を つかひにて たへなるのりの たま  
づさを われもくゝと さゝげつゝ いのる日かすの すぎゆけば 春のかすみも たちわ  
かれ 卯月のそらに なりにけり かけし葵は よそにして なみだにくつる ふぢころも  
これをかたみと おもふまに よそぢあまりの こゝぬかに けふはなりぬと 宮人の を  
のがちりくゝ ちりしとき さ月のそらに なりぬとて なみだのあめも いとゞしく ふ  
りにしことを おもふにも うきぬにおふる あやめぐさ なをかりそめの この世のみ  
いまさらしなに いとはれて をばすて山の 月をみし むかしの人の こゝろをも おも  
ひしらざる ふるさとの 庭のあさぢに たちまじる わがとこなつに うちふして 山ほ  
とゞぎす ひとこゑも きくだにあへぬ なつの上に まどろむことも かたしきの 袖を  
しぼりて おもふこと なにはの磯に やくしほの からくおひぬる 我が身かな あさ日

まつまの つゆしきを たゞ身のうへと おもふにも くらきみちより またくらしき やみにまよはん ことをのみ しほるゝ麻の衣手に かゝるなみだを 又そへて 身もうきぬべし わたり川 わたらばはやく たづねみん きみにふたゝび あふきありやと みづぐきのあととはかまなきことのはをかきながしつるなみだ川かな

このたびはこれが返しばかりをつかはす

かきながす心もみゆるなみだがはすゑまでふかきあとやのこらん

かの歌は三月つごもりにほういんにつかはしたりしを、左衛門督通親の卿きゝてこれは四月十五日おくられて侍し、又ながうた

なげくらん こゝろのうちを しらかはの のちのうきなど きくごとに 落つるなみだはいとゞしく かきながしたる みづぐきを みるにつけても 夜半の月 くもかくれにしあけがたは おもひ忘るゝ そらぞなき かはくまもなき 袖のうへは みるめなきにしほたれし いせをのあまの こゝちして はれやらざりし ゆふぎりに みもすそ川の

第二篇 俊成の作品と評釋

神風や ふきもはらふと たむけせし おほみてぐらを さゞげもて 八十瀬のなみにぬ  
れくも ふるきすゞかの 瀬をたづね いのるおもひのふかさをば あまてる神も あは  
れとや そらにみるとぞ あふぎしを かぎりありける 御代なれば やよひのそらのか  
すみにて おほはら山の のりのしの をはりをくりし 鐘のをとも たえはてぬればい  
まはさは おぼろのしみづ よにすみて またもあひみじと 思ふより 春やむかしの は  
るならぬ わが身ひとつの かなしきを おもひそむれど ふぢごろも たちきるかすの  
ほかなるも いまは誰かは あはれてふ つゆのことは かくべきと こととふかたの  
なきまゝに なれしはこやの 山水に みかげうつりし みぎはにも かたみにさけるか  
きつばた このよのほかや へだつらん 花ばかりのみ うつろひて みのりをうつす 窓  
のうちも 玉のすがたは かげかくし たえなるのりの はちす葉に たてまつりをく 花  
ばかり とゞまるあとの かはらぬを みるにつけても くらされて かぎりのたびのみ  
ゆきとて 出でしけしきも ひきかへて つるのはやしに たき木つき わしのみねにも

あつまりし そのいにしへを うつしをく かげのしたにぞ へだたりしかへさもしらで  
もろ人の 立ちわかれにし その中に まことのみに いらにける たぐひもあまた き  
こゆるを おもひとられぬ 身ながらに うかりし春も くれはてゝ いとどう月は ほと  
ゝぎす かたらふ聲も なつかしく 死出の山ぢや すぎこしと しのびがたくて もろか  
づら かざすみあれも とゞまりて よはすみ染に たちかはり いまはかひなき ながさ  
めに みはかばかりに ゆきかよひ 道のあたりを みるも又 しのびがたくぞ なりまさ  
る つくりおきける やどもみな よもぎの島の こゝちして みかきのたけの 風のみぞ  
あはれそよとも こたへける ふしみのよはは 千代をへん はじめとのみに ちぎりしを  
いつしかかゝる うき世には あはんものとは 思ひきや おもひいづれば こゝのへの  
光さしいる すべらぎの ちよのふはのね はるかなる いはひのをりと もてなして か  
はらすきゝし みこゑこそ ちりをめぐらす あとなれや いまもきこゆる こゝちすれ  
ながさむかたも なきまゝに むなしきそらを ながむれば ゆふべの雲の うきてのみ

第二篇 俊成の作品と評釋

すこす心は 世とともに やみにまよへる 身とはしらすや

たぐひなきなげきのもととはかきつくることの葉もなをおよばれぬかな  
のぼりにし霞もおなじそらなればみしよの春にかはらぬぞうき  
墨染にこゝろはふかくそむれどもうすき袂のうらめしきかな

かきながすあとを見るにぞ涙川いとゞうき世のふかくなりける

いかにせんたのみしかげもかくれにき心のやみのはるゝまぞなき

このおくの五首にまた返し

ことのはをかきやるかたもげにぞなきなげきのもとも谷のくち木も  
うらみても過ぎぬればまたかなしきはうかりし春のかすみなりけり  
うすしてふ名こそつらけれふりぬれば涙ぞかはるすみぞめの袖

かきやれど心もゆかゝなみだ川かゝるたもとは淵となれども

たのみてもうき 　　にあらざりきたゞこひしきぞ悲しかりける

建久明 子共 かくれてのち月日はかなく過ぎゆきて、六月つこ  
 もりかたにも 母 けりとゆふぐれの空もことにむかしの事ひとりおもひつゞけてものに  
 書きつく

くやしくぞひさしく人になれにけるわかれもふかくかなしかりけり  
 さきの世にいかちぎりし契にてかくしもふかくかなしかるらん  
 おのづからしばし忘るゝ夢もあればおどろかれてぞさらに悲しき  
 やまのすゑいかなる空のはてぞともかよひてつぐるまぼろしもがな  
 なげきつゝ春より夏もくれぬれどわかればけふのこゝちこそすれ  
 いつまでかこの世のそらをながめつゝゆふべの雲をあはれともみん

又法性寺の墓所にて

おもひかね草の原とてわけきても心をくだくこけのしたかな  
 くさの原わくる涙はくだくれど苔のしたにはこたへざりけり

長秋草

第二篇 俊成の作品と評釋

苔のしたとゞまるたまもありといふゆきけんかたはそこををしへよ

これらをおもひかけす前齋院の御人のつたへ御覽せさせたりければ

時のまの夢まぼろしになりになりにけんひさしくなりし契とおもへど

かぎりなくふかき別れのかなしさはおもるたもとも色かはりけり

いまはたゞねられぬいをやなげくらん夢路ばかりにきみをたどりて

雲のはてなみまをわけてまぼろしもつたふばかりのなげきなるらん

秋きぬとをぎのは風にしられても春のわかれやおどろかるらん

なげきつゝそれとゆくゑをわかぬだにかなしきものを夕暮のくも

いくとせもわかれの床におきふしておなじはちすの露をまち見よ

佛にきくもかなしき草の原わけぬそでさへつゆぞこぼるゝ

ものいはぬ別れのいとゞかなしきはうつすがたもかひぞなかりし

道かはるわかればさてもなぐさまじたまのゆくゑをそことつぐとも



又

身にしみておとにきくだにつゆけきは別れにはをはらふ秋風

御返しに

いろふかきことの葉をくる秋風によもぎのにはのつゆぞちりそふ

七月九日秋風あらくふき雨そゞぎける日左少將まうできて歸るとてかきをきける

たまゆらの露もなみだもとゞまらず亡き人こふるやどの秋風

返し

秋になり風のすゞしくかはるにも涙のつゆぞしのにちりける

かげさりしむそぢの霜にながらへてさらぬわかれのとをざかりぬる

なゝそぢにあまりさえふるしもなれば別れはなをぞ遠ざかりゆく

又の年二月十三日忌日に法性寺にとまりたる夜まつのあらしはげしきを聞きて

新かりそめの夜半もかなしきまつ風をたえずや苔のしたにきくらん

長秋草

第二篇 俊成の作品と評釋

おもひきやちよとちぎりしわがなかをまつのあらしにゆづるべしとは

つぎの日墓所にて

いつまでかきてもしのばんわれも又かくこそ苔の下にくちなめ

しのぶとてこふとてこの世かひぞなきながくてはてぬこひのゆくゑに

そのとしの秋ふるさとにてひとり月をみてあか月かたまでありしにおぼえける

かくしもはをばすて山もなかりけんひとり月みるふるさとの秋

(ウラ 餘白)

その又の年にや、八月にうるふ月ありし秋三條にて月をみて

うれしくものちもたのまぬ老の身に秋くははれる月をみるかな

(うら餘白御紙うらに)

建久九年二月十三日依忌日向法性寺又詣墓所心中詠所思

わかれてはむとせへにけりむつのみちいづかたとだになどかしらせぬ

# 藤原俊成年譜

鳥羽

永久二年

誕生

元永元年

藤原仲實卒す

同二年

内大臣家歌合

保安三年

父俊忠權中納言太宰帥に任す

同四年

七、九

父薨す、年五十三

同

藤原顯季薨す

崇徳

大治元年

源俊頼和歌抄成

同

攝政左大臣歌合

同二年

正、十九

敍爵美作守に任す

同

金葉集成る

同三年

永縁奈良坊歌合判者俊頼

西宮歌合、南宮歌合、住吉歌合

(一 歳)

(五 歳)

(六 歳)

(九 歳)

(十 歳)

(同 )

(十三 歳)

(同 )

(十四 歳)

(同 )

(十五 歳)

藤原俊成年譜

藤原俊成年譜

同 四年

橘顯仲卒す、住吉歌合の判者

(十六歳)

長承元年

加賀守に任す

(十九歳)

保延元年

前大僧正行尊寂

(二十二歳)

同 年

鳥部野の父の墓に詣で懺法に會す

(同)

同 三年

遠江守に任す

(二十四歳)

同 四年

藤原基俊より古今集の傳授

(二十五歳)

同 五年

母の喪に服す。源顯仲卒す

(二十六歳)

同 六年

堀河百首題にて詠百首

(二十七歳)

永治元年

崇徳天皇御讓位

(二十八歳)

近衛 康治 中

待賢門院中納言結縁の爲法華

天養元年

二十八品和歌を詠す。藤原基俊卒す

(二十九—三十歳)

久安元年

從五位上に敘す

(三十一歳)

同

詞華集成る

(三十二歳)

同

參河守に任す

(同)

同 五年

丹後守に任す

(三十六歳)

右衛門督家成家歌合

(同)

同 六年

正五位下に敘す

(三十七歳)

同 年

久安御百首を召さる

(同)

同 七年

正、六

從四位下に敘す

(三十八歳)

仁平元年

關白忠通弟頼長と權を争ふ

(同)

同 二年

十二、卅

左京權大夫に任す

(三十九歳)

同 三年

勅を奉じ久安百首を部類す

(四十歳)

久壽二年

藤原顯輔出家頓て薨す

(四十二歳)

後白河

保元元年

保元亂

(四十三歳)

二條

平治元年

平治亂

(四十六歳)

永曆元年

太皇太后宮亮清輔家歌合

(四十七歳)

同

極樂六時讚の歌を詠す

(同)

應保元年

美福門院崩す

(四十八歳)

同 年

九、十九

左京大夫に任す

(同)

同 二年

定家生る、初名光季

(四十九歳)

同

藤原範長赦にあひ歸京

(同)

長寛二年

讚岐院崩御

(五十一歳)

永萬元年

四、廿六

藤原範兼卒す

(五十二歳)

同 二年

八、廿七

從三位に敘す

(五十三歳)

藤原俊成年譜

藤原俊成年譜

同 年 十一、十二

大夫を辭し長男成家侍從に任ず

(同)

中宮亮重家朝臣家歌合顯廣判

(同)

六條 仁安元年 十二、三十

定家五歳從五位下に敍す

(五十三歳)

同 年

和歌現在書目成る

(同)

大嘗會悠紀方の歌を詠進す

(同)

同 二年 正、廿八

正三位に敍す

(五十四歳)

同 年 十二、廿四

名を俊成と改む。院司に任ず

(同)

平清盛太政大臣となる

(同)

太皇太后亮經盛朝臣家歌合清輔判

(同)

右京大夫に任ぜらる

(五十五歳)

高倉 嘉應元年

藤原清輔和歌初學抄成

(五十六歳)

同 二年 七、廿六

太宮大夫を兼ねる

(五十七歳)

同

住吉歌合俊成判

(同)

建春門院歌合俊成判

(同)

左衛門督實國卿歌合

同 承安二年

皇太后宮大夫に任ず

(五十九歳)

同

廣田社歌合俊成判

(同)

同

清輔尙齒會を開く

(同)

同 三年

三井寺新羅社歌合俊成判

(六十歳)

安元元年

源空淨土宗を開く

(六十二歳)

同 年

備前権守に任じ定家侍從に

(同)

同 二年

出家法名釋阿

(六十三歳)

治承元年

右大臣家歌合清輔判

(同)

同 二年

藤原清輔卒

(六十四歳)

同 二年

長秋詠藻成る

(六十五歳)

同 年

別雷社歌合釋阿判

(同)

同 三年

右大臣家歌合釋阿判

(六十六歳)

同 四年

源頼政薨す

(六十七歳)

養和元年

平相國薨す

(六十八歳)

壽永元年

賀茂重保月詔和歌集成る

(六十九歳)

同 二年

藤原盛房三十六人歌仙傳成る

(七十歳)

同 年

顯昭の古今集序註拾遺集註散木集註成る

(同)

同 三年

顯昭の柿本朝臣勘文成る

(七十一歳)

同 四年

平氏亡ぶ

(七十二歳)

藤原俊成年譜

安徳

藤原俊成年譜

後鳥羽

文治二年

十七番歌合季經判

(七十三歲)

文治 中

西行の御裳濯川歌合釋阿判

同 三年

後白河院々宣撰集の下命

(七十四歲)

同 四年

千載集を撰進

(七十五歲)

同 六年

女御入内屏風歌、五社百首

(七十七歲)

建久元年

賴朝六十六ヶ國總追捕使

(七十七歲)

同 二年

西行痕、上覺の和歌色葉抄成る

(同)

同 二年

發賞闘白となる。後徳大寺實定及藤原長

方薙す

(七十八歲)

同 四年二月

夫人歿す。哀悼の歌を多く詠す

(八十歲)

同 年秋

左大將家六百番歌合俊成判

(同)

顯昭陳狀を奉る

同 六年

民部卿經房朝臣家歌合釋阿判

(八十二歲)

同 八年

古來風躰抄成る

(八十四歲)

同 九年

後京極殿自歌合判

(八十五歲)

建久 中

慈鎮和尚自歌合判

土御門

奏狀を奉る

(八十六歲)

正治元年



同二年 二五

御室撰歌合判

(八十七歳)

同一年

三百六十番歌合判

(同)

同一年

百首を召さる

(同)

建仁元年 一、廿五

式子内親王薨す

(八十八歳)

同

和歌所を置かる

(同)

同

老若五十首歌合

(同)

同

新宮撰歌合

(同)

同

影向歌合、八、十五撰歌合

(同)

同二年 五、廿六

影向歌合、七、二十寂蓮歿

(八十九歳)

同

千五百番歌合

(九十歳)

同三年 七、十五

八幡若宮撰歌合

(九十歳)

同一年 十一、廿三

和歌所にて九十の賀宴を賜る

(九十一歳)

元久元年 十一、

歿す

蒙求和歌成る、卿相待巨歌合、北野宮歌合